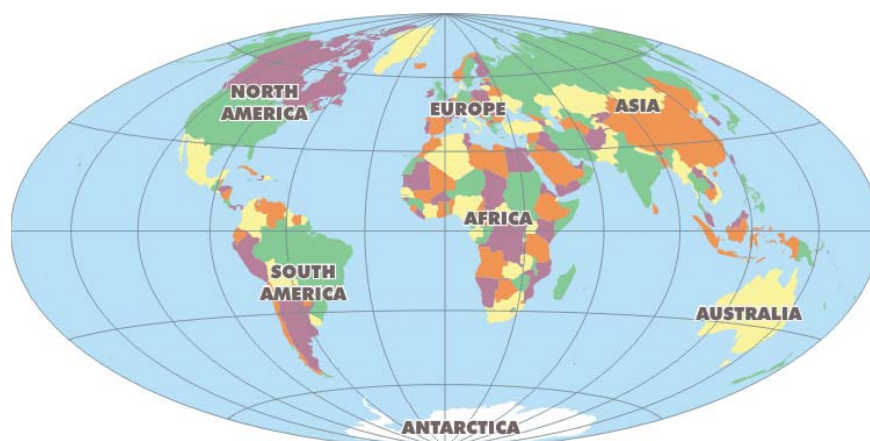


平成23年度

# 教師海外研修アドバンスコース

## 報告書



独立行政法人 国際協力機構 九州国際センター

## はじめに

本報告書は、平成 23 年度に JICA 九州が実施した教師海外研修上級者コースプログラムについて、海外研修の報告書をまとめたものです。

教師海外研修上級者プログラムは、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の教師、及び教育委員会の指導主事等を対象に、国際協力の複雑さ、ODA について更に深い理解をしていただくとともに、シンガポール、ルワンダにおける研修を題材にして、様々な教材作成、発表を通して、九州の教育現場における国際理解教育 / 開発教育 / グローバル教育の指導的役割を果たす人材育成をねらいとしており、全国でも初めての試みとして行われました。

今回、九州各地から 9 名の教員の方々が参加され、矮小な国土、少ない人口、天然資源は無く、人口密度が極めて高く、強力な政治的リーダーシップで開発を行っている、という共通点を有する、シンガポールとルワンダを題材として、「共生・開発のための政治のリーダーシップと教育の役割」をテーマに行いました。

事前研修では、シンガポール、ルワンダ社会、JICA 事業の概要についての情報共有、ルワンダでスラム街の子供の就業支援を行っている NGO の方の取り組みについて学びました。

訪問先である、シンガポールでは、シンガポールの ODA の取り組み、職業訓練におけるグローバル教育の在り方、ルワンダにおいては、虐殺を乗り越えるために進めている民族間の和解の取り組み、義務教育、職業教育の役割、青年海外協力隊等の JICA 事業の関係者との意見交換を行いました。

事後研修では、現地訪問で得たことを題材に、広く国際理解教育 / グローバル教育の普及に向けた活発な議論を行いました。

ご参加された教員の方々の真摯な熱意に敬意を表するとともに、グローバル化が進む世の中で、将来を担う日本の子供たちの将来の糧としていただき、本報告書が広く活用されることを心より願っております。

平成 23 年 3 月

独立行政法人国際協力機構

九州国際センター所長 村 岡 敬 一



# 目 次

## ■ 平成 23 年度 教師海外研修アドバンスコース報告

鹿児島大学教育学部代用附属鹿児島市立田上小学校	高 島 芳 倫	7
福岡県糸島市立前原南小学校	福 井 陽 子	19
大分県別府市立北部中学校	大津留 美 紀	25
大分県中津市立本耶馬溪中学校	小 川 邦 夫	33
福岡県立福岡高等学校	鹿 野 敬 文	43
宮崎県立延岡工業高等学校	富 山 隆 志	45
福岡市立福翔高校	八 田 智 弘	50
大分県立大分東高等学校	廣 川 由 美	52
国立北九州工業高等専門学校 総合科学科	荒 川 裕 紀	60

## ■ 日本の国際理解教育・グローバル教育を広げる方法

67

## ■ 添 付 資 料

1. 事前研修プログラム		73
2. 現地研修 日程と訪問先のメモ		
8月1日 SCE (Singapore Cooperation Enterprise)	荒 川 裕 紀	75
8月1日 TEMASEK POLYTECHNIC	鹿 野 敬 文	76
8月4日 在ルワンダ日本国大使館	福 井 陽 子	78
8月4日 Brief on REACH's activity at JICA Office	高 島 芳 倫	80
8月4日 Training site Lycee de Kigali Secondary School (SMASSE Rwanda)	大津留 美 紀	82
8月4日 ルワンダ JICA 駐在員事務所	廣 川 由 美	84

8月5日	TCT (トゥンバおよびキガリキャンパス)	荒川裕紀……	87
ホームステイ 8月6日～7日			
	Brother Camille Rudasingwa (St. Aloys Rwamaga Group School)	荒川裕紀……	89
	Mr. Rwamurangwa Stephen (Rwamagana)	小川邦夫……	91
	Homestay: Mukarugina Monique さんの家	廣川由美……	93
8月8日	ニャンザ青年職業訓練センター (Nyanza)	小川邦夫……	95
8月8日	JICA 事務所	八田智弘……	97
8月8日	SHIGOTO NO ARU KURASHI	福井陽子…	100
3.	事後研修プログラム ……………		102

# 平成 23 年度 教師海外研修アドバンスコース報告



学 校 名

鹿児島大学教育学部代用附属鹿児島市立田上小学校

氏 名

高 島 芳 倫

## 1 現地研修全体に関する所感

一言で言うと、私にとって素晴らしく充実した研修であった。これまでには2年前のインドネシアへの教師海外研修のほかに集団で渡航したことはほとんどなかった。集団行動が苦手であるからである。しかしながら、今回の研修は、参加者皆さんの研究意識が、非常に高く、常に学び続け修養しようという空気がいつも流れていた。どの方が質問されても、皆さん自分が質問されたかのように耳を傾け、聞き入ってメモを取られている姿は、教員としてだけでなく、人間としても大変勉強になった。

全体に関する所感として、現地の方々から伺ったことで、特に印象に残っていることを取り上げて述べていくこととする。

過去に私は、大きく三つのことをテーマとして一人で途上国を回ってきた。それは、

- ① 世界の中の日本
- ② 今の日本の子どもにどのような力を付けるべきか
- ③ 自分を鍛える

というものである。

今回は、その内の①、②はそのままに、③として、同行者と会話や話を重ねることで、①と②をより深く考える、身に付けるということを重視した上で、九州にどうしたら国際理解教育が広げられるか、その重要性を理解させられるかという風に置き換えた。

- ① 世界の中の日本
- ② 今の日本の子どもにどのような力を付けるべきか
- ③ 九州にどうしたら国際理解教育 が広げられるか、その重要性を理解させられるか

①については、シンガポール、ルワンダだけでなく、トランジットで降り立った空港内でもたくさん感じることができた。特に、「3 現地研修を通しての気付きと疑問」で後述するが、新聞やテレビなどでの報道の在り方という点で、「世界の中での日本」というものについて新たな気付きを得ることができた。

②については、自分自身が現地で感じることはもちろんだが、このような機会でしかお目にかかれないであろう方々に、恐れ多くも直接質問をぶつけてみた。それは、「現在の日本が世界でおかれている状況を考えたときに、今の日本の子どもたちにどのような力を付けるべきだと思いますか。また、教員は何をすべきだと思いますか。」というものである。これは本来、我々教育者が自分で考えなければならない質問であるので、恐縮した。しかし、現地で実際に生活されている日本人に伺うことは、大変重要なことであり、この言葉をその方から直接受け取ったものとして、同僚や大学生、生徒や児童に伝えることは、大変意味のある、そして有る意味での即効薬となり得るのではないかと思った。ここでは、在ルワンダ日本国大使館畑中邦夫大使からと、JICA ルワンダ事務所小林所長、JICA ルワンダ駐在員の瀧本様、SMASSE プロジェクトコーディネーターの高橋さんからの言葉を簡潔に記す。



## 【畑中邦夫大使】

- 日本は農耕民族で、突出したリーダーが必要ななかった。しかしルワンダもそうであるように、ほとんどの国は大陸の中にあり、周りとの戦争、対立、国交が余儀なくされている。日本はリーダーを育てる社会的な仕組み、教育制度はない。
- 日本は海外との交流、外との付き合いをもっと頻繁にして、国際情勢に敏感でなければならぬ。海外では半分以上が海外のニュースである。しかし日本では、海外のニュースがほとんどない。NOKでさえそういう傾向がある。本当にこれでいいのだろうか。マスコミは、国民の要求するものばかりをこしらえて、視聴率のためにやっているように思えてならない。大陸では、海外のニュースは当たり前である。例えば、南米で地震が起こると、知り合いの知り合いがいるので、自分のこととして考える。だから国外のニュースが多い。日本は他人事のように思う傾向にある。これで日本はやっていけるのであろうか。日本は日本だけでは決してやっていけない。教員のみなさんには、現場に戻られて、子どもが海外に対して敏感になるように、是非努力してほしいとお願いしたい。

## 【JICA ルワンダ事務所 小林所長】

- 世の中には「機会の豊かさ」と「心の豊かさ」があると思う。日本の子どもたちは、自分のもっている機会に気付いていない。水・授業・地下鉄・車…当たり前の機会が溢れた中で生活していることに不安を感じている。ぜひ、途上国に出かけて、自分にはない「心の豊かさ」をもっている人に出会ったときに、それぞれの豊かさに気付いてもらいたい。途上国は、明日に向かって生き抜く力をもっている。未来に向かって考えている。日本はどうだろうか。また日本には、発展した国としての義務と責任があり、それを果たしながら、最後は日本の豊かさにつなげられるようにしていかなければならない。
- 日本人として誇れるものをもっとほしい。日本人は、優しく、相手を尊重・尊敬する心をもっている。いいものがたくさんあるのに、出さないでいる。そこで子どもに最もつけてほしい力は、コミュニケーション能力である。どんな場所でも、自己主張ができる子どもを育ててほしい。ちゃんと自分の考えを説明できる力、自分の意見を整理して発言できる・伝える力を身に付けてほしい。
- JICA から学校に派遣で授業を行って事業の説明をしても、「そーなんだ」で終わることが子どもたちに共通していることのように思える。学ぶことを止めない指導をしてほしい。

## 【JICA ルワンダ駐在員の瀧本様】

- 自分は、中学生のときに途上国に行く機会をもつことができ、色々なことを考えさせられた。途上国に行かせるプログラムが少しずつ増えきていると思う。どんどんそれが低年齢化してきていることはいいことだと思う。やはり途上国にどんどん行くことが一番だと思し、そうすることで日本を知ることができると思う。とにかく「世界に出る！」と言いたい。また、恩師からの手紙に書かれていた、「mastery for service (奉仕のための練達)」という言葉が、今の仕事のきっかけになっている。

## 【SMASSE 高橋さん】

- 日本を去って16年になる。現在の日本の子どもの状況は分からないが、たまに帰国して接すると、「今時の子どもたちは…」と聞く割には実際には素直であると感じる。自分の子どもにも願うことだが、たくましく育ててほしい。自分の意志で生きていくたくましさを身に付けてほしい。日本では一時期グローバル化が騒がれて、留学や英語学習がはやし立てられた時期があったように思う。しかし、言葉は道具に過ぎない。その前に、まずは自分の国のことをよく知り、自国に誇りをもつことが大切だと思う。世界は日本人の気質について大変よいイメージをもっている。世界中どこに行っても、周囲から「日本人」と言われる。だからしっかりやりたいと思う。

この瀧本様からの言葉をはじめとして、今回いただいた言葉から共通して感じられるのは、①日本人が世界をもっと知らなければならないこと、②我々教育者こそそれを率先して行わなければならないこと、そして、③人を育てる「教育者の責任」は大変に重いということではないだろうか。これらのことをまずは自校の同僚、子ども、保護者、実習生などの教育活動に関わる方々に伝えていこうと考えている。

③については、8月27・28日の事後研修でしっかり語り合いたいと考えている。

最後に、これだけの移動の中で、全員が大きく体調を崩すことなく、無事に帰国できたことは大変素晴らしいことである。今回のメンバーの方々は渡航経験が豊富な方々であろうとは思ってはいたが、旅程中も常に澁瀬とされており、おかげ様で私はいつも励まされたり、元気づけられながら過ごすことができた。心から感謝申し上げたい。加えて、皆さんの英語力のおかげで、これまでの一人旅とは全く違う、新鮮で知的に満ちた充実した研修を受けさせてもらうことができた。私は英語力が乏しく、訪問先等で様々なご迷惑をお掛けしたことをこの場をかりてお詫びさせていただきたい。

これほどまでに魅力のたくさん詰まった方々と出会える機会を設定してくださり、貴重な経験をさせてくださった JICA 九州に深くお礼を申し上げたい。

## 2 参加に際しての個人的な目的

個人的な目的は、参加者一同の目的と重なる部分もあると思われるが、大きく分けて4つある。この4つのそれぞれ、自分が教育者として、教育現場で小学生に何をどのように伝えるべきなのかという意識が根底にあるということをお先に述べておくこととする。

一つめに、事前に学習していた94年の大虐殺に関する様々な意味での痕跡を見ることと、国民がそれをどのように乗り越えようとしているのかを見ることである。虐殺についての史実は、ある程度情報として日本でも入手できることができる。しかし、実際に行って、見て、感じることでしか分からないことができないことがあるはずである。それは、現地の方々の話しや記念館等からはもちろんですが、国民の心に残っている悲しみや憎しみなどの感情、町や村に雰囲気として残っていることなども含めて感じられることすべてを示している。特に、たった17年前の悲劇を胸に、民族の垣根を越えて、国民がどのように受け止めて生活しているのか、どのようにして民族間でお互いを考えて、融和して生活しているのかということ。そして、震災でどん底の状態にある方々がいる日本と重なる部分もあると思われる、どん底という危機的状況からどのように這い上がり、克服してきたのかという「生きる力」がどのように存在しているのかということ等を、滞在する間ずっとアンテナを張り巡らして感じ取りたいという目的があった。

二つめに、かつては大虐殺の中心地、今では「アフリカの奇跡」と呼ばれているほどの急速な発展を遂げている首都キガリの様子を視察することである。現在は高層ビルが立ち並ぶオフィス街や24時間営業のショッピングセンターを備えているとあった。また、環境整備にも力を入れており、キガリは、ビニルのレジ袋を禁止した都市としても有名であるとのことで、復興・開発において環境にも配慮しているとあったが、実際にはどうなのだろうと気になった。特に、事前の情報では、「アフリカのシンガポール」へ生まれ変わろうとしており、「アフリカで最も持続可能な、ハイテクで、ネットワークの整備された国」をめざしているということだったので、それらの整備がどの程度進んでいるのだろうか、日本・シンガポールと比較して視てみようという目的があった。

三つめに、過去に自分自身が色々な国に渡航したとき、または前回のインドネシアへの教師海外研

修でもそうであったように、教育活動全般で生かせるような教材となる素材を集めることである。事前研修でもあったように、今回は前回の研修とは違って、授業での教材づくりのための研修ではないとしても、小学生に、または同僚に、大学生（教育実習生）に世界の現状を知らせ、日本の在り方、自分自身の生き方を考えさせる実践のための取材ができる絶好の機会でもある。特に国際理解教育を主旨とした小学生を対象とした授業では、子どもの興味・関心を惹きつけるのに、写真は絶大な効果があった。目の前にいる先生自身が現地に行って撮影し、また自分と同世代の子どもがどのような生き方をしているのかということ写真を通して知ることが、自分が世界の中の日本という国で生きている（たまたまこのあまりに豊かな国に生まれ、生きている）ことを最もよく認識できるということが分かった。教材となる素材集めのひとつの手段として、たくさんの写真を撮影してくることを目的とした。

四つめに、日本のことをよく知るということである。日本のことをよく知るために、または、自分の日本人としてのアイデンティティを再確認する、もしくは新たな気づきをするためでもあると思った。そして日本を、「世界の中の日本」であるという感覚をより鋭く、強くもつことができるようになったらという目的をもち、参加させていただいた。

### ③ 現地研修を通しての気づきと疑問

まず初めに、上記2に書いた「研修への参加に際しての個人的な目的」に対応させる部分から記述することとする。

一つめに、大虐殺の痕跡である。記念館や虐殺のあった教会等からは当時の様子を想像することができたものの、街の様子や人々の表情からは、17年前にまさかここでそのような事が起こったとはとても思えなかった。また、国民がどのようにして悲劇から乗り越えようとしているのかということについては、カガメ大統領の強烈なリーダーシップのもと、国民が一丸となって国の発展を第一の目標とし、民族間の融和を積極的に進めているため、今では民族同士の争いのことなど考えないようにしているときであるという説明をいくつかの訪問先や人々から聞いた。ただ、現地の人々と日々一緒に仕事をしている数人の協力隊員からは、表向きはそうだけれども、人々の中にはその時の恨みなどがかなり強く残っており、一触即発の事態ではないかと思うこともあるという話を聞くことができた。現在、東日本震災の復興は、政治的な面を含め、国内では遅れていると言われているが、着実に進んでいるようだ。しかし、危機的状況からの脱却は、その事件・事故が起こるまでの国の経済状態が大きく関わるのではないかと思った。そのためルワンダ政府は、まずは豊かさ、それも経済的な豊かさを手に入れることにより心の余裕をもたせ、ルワンダの心の中に残る爪痕を無くしていこうとしているのではないだろうかと思った。

二つめに、首都キガリの発展の様子である。事前にインターネットやVTRで見ていたので、建造物や道路整備などの発展にはそこまで感動はなかったが、街のどこにもゴミが落ちていないということには驚いた。聞くところによると、多額の費用を投じて清掃員を雇い、街中に配置しているとのこと、国民にも月に一度、街を清掃する日を設定して、意識を高めるようにしているとのことだった。このあたりは、シンガポールの政策を取り入れているのではないかと思われた点である。

三つめに、教育活動全般で教材となり得る素材を収集することである。どうしても第一に大虐殺のイメージが脳裏にあったために、それに関わることを集めようとも思ったが、小学生の発達の段階ではなかなかそのようなマイナスイメージを提示することは、国際理解教育の主として用いること望ま

しくないと思われる。ですが、同僚や大学生に国際理解教育の大切さを伝える際に用いることを考えると、それは必要なものであると考え、できるだけ多くの写真を撮影するように心掛けた。小学校での授業の導入段階では、その国に興味・関心をもたせるために、「その国のことを知りたい！ その国に行ってみたい！」と思わせることが重要である。そういう観点から考えると、ルワンダの素晴らしい自然や歴史、伝統・文化、人々、動物などの撮影ができる機会はあまりなかった。そのため、小学生にルワンダの素晴らしさを伝えるのに最も適した写真集を購入した。高価だったが、ルワンダを知らせるために大変役立てられると考えている。高学年の発達段階になると、私の撮影した写真なども用いて、近年の悲しい歴史から立ち上がろうとしている人々の思いや国の姿勢を紹介したいと考えている。

四つめに、日本のことをよく知るということである。この点について、ルワンダ滞在中に気付けたことは、あまりなかったというのが正直な感想である。しかしながら、ルワンダ以外で感じたことを2つ挙げようと思う。

一つめは、日本の自然・森林の豊かさと、そこから生まれる日本人の心の豊かさである。ドバイの空港に着陸する直前の飛行機の眼下に広がる風景を見たときのこと。荒涼とした岩山が長く続いて見えた直後に、突然人工的な街が出現した。私がいつも眺めている国内線の飛行機から眺める風景を思い出し、日本の肥沃な土壌、自然の美しさ、四季の移ろいを楽しめる心をもつ国民性を誇りに思った。

もう一つは、各地の空港で目にした新聞記事からのことである。行きのトランジェット、ドバイ空港で富山先生が手にしていた英字新聞の一面には、「日本の政府は全く信用できない」という大きな見出しがオバマ大統領をはじめとした各国のリーダーの写真とともに書かれていた。この報告書の1に記載した、在ルワンダ日本国大使館の畑中邦夫大使のお話、「日本のマスコミは、日本国内のを中心に伝えることが多く、海外のことはほとんど伝えていないように思う」という言葉を聞いたときに、数日前に見たその新聞のことが思い出された。日本という国のマスコミの在り方が、世界の国々とはかなりかけ離れていることを感じたのは、今回の研修で初めてだった。これは、私が以前から感じ続けていた、日本が、日本人が、「世界の中の日本」であるという意識が低いからではないかと思う出来事であった。

その他、ルワンダ滞在中に気付いたことと素朴な疑問を記載する。

ルワンダでは、家の中に入っているのかもしれませんが、街や村に老人が少ないと思った。虐殺によって少なくなったのかとも推測したが、見付けることが難しかった。見付けるのが難しかったと言えば、裸足の人である。アフリカに対する私のイメージでは、裸足の人が多いというイメージだったが、キガリでは一人も見付けることができなかった。唯一、ルワマガナのホームステイのとき、現地の協力隊員の方と一緒に市場まで散歩したときに近寄ってきた子どもが裸足であった。穴だらけのボロボロの服を着た子どもだった。その時に一緒にいた協力隊員に、裸足のことを尋ねると、政府の命令で2年前から靴を履くようになっていたとのことだった。そのため、靴を履いていないと警察から注意されるそうで、警察がいる確率が高い市場が近くなってくると、ずっと付いてきていたその子どもはいったん姿を消し、どこからか草履を履いてきた。また、ストリートチルドレンのような子どもたちはいないのかと尋ねると、地方は全体が貧困の状態に近く、むしろストリートチルドレンと呼ばれるような子どもたちは、キガリにいるという解答だった。市場から教会に戻るときにも、細い道から現れた、大きなゴミ袋のようなものを背負った三人の裸足の子どもを見付けた。私たちの見たルワンダは、ほんのほんの一部なのだなどと改めて実感した出来事であった。

## 4 JICA に対する提案と要望

### (1) 本研修の成果を現場の教育・指導にどのように活用可能か

まず、小学校現場で子どもたちを対象として授業を行うという観点から考えて、本研修を活用するというのは、なかなか困難であると考えます。その理由は二つある。

その一つは、今回私が見たルワンダは、ルワンダのあまりにもほんの一部だからである。写真も、キガリとトゥンバ、ルワマガナ等、またそこに向かうまでの道程での撮影だけのものだ。これらの今回の研修で見聞きしたことのみを素材とし、国際理解教育として、「これがルワンダです。」と紹介する訳にはいかないと私は思うし、況してや「アフリカ」としてのイメージをもたせるわけにはいかない。ただ、どうしても授業で行うのであれば、前述したルワンダの写真集を活用して、興味・関心をもたせた上で、今回の研修の内容を少しだけ盛り込むことになると思う。

もう一つは、授業実践を行うことを目的とした旅程になっていなかったからである。前回のインドネシアの研修では、「環境」をテーマとした授業実践のための教材となる素材集めという観点での旅程だった為、訪問先もそれを考慮された素晴らしいものであった。しかし今回のアドバンスコースでは、当初の指令そのものが違っていたために、訪問先もその指令に即したものと設定されているのがよく分かった。そんな中でも、学級の子どもたちの顔を思い浮かべながら、何とか素材を集めようとは努めたが、やはり小学生を対象した一授業を構成するだけの素材集めは、私にとっては困難だったというのが二つめの理由である。

では、今回の研修成果をどのように生かすことが可能かということになると、やはり教える側の人々に対して国際理解教育の重要性を訴えるために活用することが大切ではないかと考えます。事前研修でも話題に挙がったように、できることであれば、私は、ターゲットをこれから教員になろうとしている大学生としたほうが望ましいと考える。

ただし、今回の研修だけでそれを行うことはなかなか困難なのではないかと個人的には思いません。例えば、9月9日(金)の2校時に、教育本実習生 64 名と参加観察実習生 65 名の計 129 名に「食育に関する講話」として 45 分間話をします。食育という名目ですが、話の底にあるのは紛れもなく国際理解教育である。この講話の中で「世界の中の日本」という話題に触れたときに、これまで世界を旅して感じたことを伝える中の一部として、今回のルワンダでの研修で学んだことを取り上げたいと考えている。つまり、今回の研修だけでは伝えることは難しいと言うことである。

また、もし仮に参加者のみんなで報告会のようなものを行うということがあれば、アドバンスコースに参加された方々のこれまでの渡航経験から学んでこられたことと、国際理解教育を実践してこられたことを、共通したねらいに応じて精査し、それに今回の研修での学びを付け加えるようなものにすれば実現可能なのではないかと考えられる。そして、それこそが最も実のある実践となるのではないかと考える。

### (2) 新学習指導要領に基づいた提案、要望

小学校で国際理解教育を導入する、または先生方に強く意識付けさせることはなかなか困難であると思う。しかし、手をこまねいているわけにもいかない。だからといって、一部の職員が声高にその必要性を訴えてもなかなか難しいだろう。そこで、国際理解教育が実践できそうな箇所を学習指導要領から見つけ出し、個人の主張と重ね合わせて指導の必然性を訴えれば、実践しや

すい環境となるのではないかと思う。

そこで私は、小学校学習指導要領に新設された、外国語活動の在り方に着目した提案を考えた。小学校で本格的に始められた外国語活動の現状を考えたとき、外国語活動の内容に国際理解教育のねらいと内容をもっと濃く盛り込むことができる、いや盛り込まなければならないと感じるからである。その理由を以下に示していく。

教育基本法 第一章2条五に、

「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」

が教育の目的として示されている。

また、小学校学習指導要領では、今回から、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて「道徳教育」を充実させることが定められた。ここでいう道徳教育のなかには、先に述べた教育基本法第一章2条五に追加して、

「民主的な社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和の発展や環境の保全に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成するため、その基盤として道徳性を養うことを目標とする。」

と明記されている。つまり、新設された外国語活動でもこの内容を盛り込まなければならないということを示しているのである。

ここで、今年度から完全実施されている小学校学習指導要領での外国語活動の実際はを考えてみる。断言はできないが、私が知る限りでは、「外国語」が「英語」、「活動」が「教育」となり、「英語教育」を施している学校が少なくないのではないかと推測する。

我々の世代は、当然外国語活動という授業を受けたことがなく、中学校の英語教育が外国語との初めての出会いであろう。外国語活動は、中学校での英語教育の予備授業としての目的も含んでいるとも思えなくもないが、実際の目標は、

「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」と、「コミュニケーション能力の素地を養う」と明記されている。そして、それらの方法として、「外国語を通じて、言語や文化に体験的に理解を深めること」であり、「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる」となっている。つまり、子どもたちにコミュニケーション能力を付けさせることを目標としており、言語（英語）に慣れ親しませることは方法であって目標ではないのである。

そして特筆すべきは、外国語活動の内容である。第4章外国語活動、第2内容の2(2)に、「日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと。」を指導することが述べられている。

これらは、国際理解教育のねらいとするものと大変共通している部分が多いと思われる。そこで、国際理解教育のねらいとはどのようなものなのか調べてみると、平成18年の文部科学白書第2部第10章第1節1. 国際理解教育の推進には、国際社会で活躍する人材の育成として、

「国際社会においては、子どもたちが日本人としての自覚を持ち、主体的に生きていく上で必要な資質や能力を育成することが大切です。また、我が国の歴史や文化、伝統などに対する理解を深め、これらを愛する心を育成するとともに、広い視野を持って異文化を理解し、異なる習慣や文化を持った人々と共に生きていくための資質や能力を育成することも重要です。こうした観点から、現在、各学校において、社会科などの各教科、道徳、特別活動や総合的な学習の時間を通じて国際理解教育が行われています。」

とある。

つまり、外国語活動の時間は、「他国を尊重し、国際社会の平和の発展や環境の保全に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成するため」という道徳教育を踏まえた上での、「日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付く」べき時間であるとともに、国際理解教育のねらいを多く含んだ時間でなければならないと解釈することができる。

以上のようなことから、もし、外国語活動がまるで英語教育のように行われているという傾向があるとしたならば、外国語活動の在り方を考え直してもらうように提案することこそ、JICA が積極的にできる提案ではないだろうか。そして、それを現場で伝えることができる適材こそ、これまでに教師海外研修に参加した、またこれから参加する先生方であることは言うまでもないだろう。また、JICA から「積極的にコミュニケーション能力を高めようとする態度を育成するための講師を派遣します」という宣伝をし、協力隊 OB 等を派遣するプログラムを準備すれば、本来は教師自身が気付くべきはず外国語活動の本質を理解できていない学校に対して、何らかの示唆を与えることができるとともに、JICA の存在力と国際理解協力の発展につながるのではないかと考える。

## 5 各訪問先の所感

月日 (曜日)	各訪問先での研修内容と所感	研修場所
7/31 (日)	<p>【出国】 福岡国際空港 10:15 発→チャンギ 空港 (シンガポール) 15:25 →ホテル到着 16:45</p> <hr/> <p>〈所感〉 最初のフライトを終え、無事にシンガポールシティに到着した。円高がどんどん進んでいることに注目している。ホテルまでの道程で見かける光景、特に港の様子から、シンポールの貿易力の強大さを実感させられた。</p>	<p>福岡・シンガポール 【国際線／機内】</p> <p>宿泊施設 「リンクホテル」 シンガポールシティ</p>
8/1 (月)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ SCE にて、シンガポールの国際協力についての考え方、ルワンダに対する協力の方針、課題について学ぶ。</li> <li>○ テマセック・ポリテクニク (高等職業訓練校) の教育方針と卒業生の進路指導状況について学ぶ。</li> <li>○ シンガポール国立大学リー・クワン・ユー公共政策大学院の設立の経緯、大学院修士・博士課程の説明と派遣国別実績、研究実績、組織体制等を学ぶ。</li> </ul> <hr/> <p>〈所感〉 SCE は、アフリカ全般から依頼を受け、ボランティアではなく、ビジネスとして支援活動を行っている企業で、ルワンダが自国をモデルとしていることを踏まえた援助をしているという認識があることが分かった。 シンガポール国立大学リー・クワン・ユー公共政策大学院では、現在のシンガポールにおけるエリート養成のための国</p>	<p>宿泊施設 「リンクホテル」 シンガポールシティ</p> <p>↓</p> <p><input type="checkbox"/> Singapore cooperation enterprise (SCE)</p> <p>↓</p> <p><input type="checkbox"/> テマセック・ポリテクニク高等職業訓練学校</p> <p>↓</p> <p><input type="checkbox"/> シンガポール国立大学リー・クワン・ユー公共政策大学院 (LKYSPP)</p> <p>↓</p>

月日 (曜日)	各訪問先での研修内容と所感	研修場所
	<p>としての教育政策と実際、養成課程の戦略について学んだ。自国を世界に残らせるという視点で考えたときに、現在底上げ均一化を図ることを最重視している傾向のある現在の日本の教育について深く考えさせられた。</p>	<p>宿泊施設 「リンクホテル」 シンガポールシティ</p>
8/2 (火)	<p><b>【移動】</b> チャンギ空港（シンガポール）→ドバイ（アラブ首長国連邦） →ナイロビ空港（ケニア）→ブルンジ国際空港（ブルンジ） →キガリ空港（ルワンダ）</p> <hr/> <p>〈所感〉 とにかく、フライト中もトランジットでの空港内でも、体調を崩さぬようにすることを第一に心掛けた。 ドバイ空港で富山先生が手にしていたニューヨークタイムスの一面に、「日本の政府は一切信用できない」という大きな見出しが、世界各国のリーダーの写真とともに書かれていたことに驚いた。「世界の中の日本」を感じた出来事であった。</p>	<p>シンガポール ↓ アラブ首長国連邦 ↓ ケニア ↓ ブルンジ ↓ ルワンダ  宿泊施設 Chez Lando Hotel</p>
8/3 (水)	<p>○ JICA ルワンダ事務所を訪れる。所長によるルワンダでのJICAの協力の概要と、青年海外協力隊の活動状況の説明を受ける。質疑応答。 ○ キガリ市内、キソジ虐殺記念館を訪れる。94年のルワンダの虐殺について詳しく学ぶ。 ○ ルワンダの都市部の生活について学ぶために、ケニア資本による市場を訪れる。 ○ 都市部と対比して、ルワンダの地方部での生活事情について学ぶために、村や市場を散策し、学ぶ。4</p> <hr/> <p>〈所感〉 JICA ルワンダ事務所では、日本から遠く離れたこのルワンダで、世界のためにルワンダのために献身的に勤務されておられる方々から実際にお話を聞くことができ、大変感動した。また、ルワンダ国内だけでも多くの協力隊員が働いているということを知り、アフリカ全土だとどれだけのものだろうか、その数の多さに驚かされた。このような方々によっても、日本は世界に存在感をアピールできているのは間違いないことである。心から感謝したいと思った。 Nakumat という店舗でお土産を購入。商品によってだが、メイド・イン・ルワンダの食品は極めて少なく、探すのが難しく、そのほとんどが輸入品であった。特に、ケニアからの物が多く、この辺りからもルワンダの国内・国際事情が伺えた。</p>	<p>キガリ（ルワンダ）  宿泊施設 Chez Lando Hotel ↓ □ JICA ルワンダ事務所 ↓ □ キソジ虐殺記念館 ↓ □ Nakumat 市場 ↓ 宿泊施設 Chez Lando Hotel</p>



月日 (曜日)	各訪問先での研修内容と所感	研修場所
8/4 (木)	<p>○ ルワンダに駐在されている日本大使からルワンダの生活・経済状況と、日本の在り方等について伺う。</p> <p>○ 94年の大虐殺時に心身に障害を持った元戦闘員に対して、政府が行っている社会復帰支援、和解・持続的開発の活動（日本のNGOによる支援：リチ・ネガナ化<sup>レ</sup>-ション）の状況について学ぶ。</p> <p>○ ルワンダにおける理数科教育のJICA協力の現状と課題について学び、中等理数科教員が受けている研修を参観する。</p> <hr/> <p>〈所感〉</p> <p>大使の話は大変興味深いものであった。ルワンダの状況や人柄、この国家の目指そうとしていることももちろんであるが、私が、「現在の世界の状況を考えたときに、日本の子どもたちにどのような力をつけるとよいと思いますか。」という問いに対し、日本のテレビ番組等のマスコミの報道の在り方に疑問を投げかけられたのであった。日本の報道は、国内の事がほとんど。海外の報道事情とは大きくかけ離れていることを指摘され、「子どもたちにも、世界の様子がよく分かる番組を見せ、事実を知らせ、自分で情報を取捨選択していく力を付けていくべきだ」ということをお話くださった。これには、大変同感させられるばかりであった。ルワンダ滞在中も、そのことを感じさせられることが多くあり、これは日本人々にも伝えるべきことではないかと強く思った。</p>	<p>キガリ（ルワンダ）</p> <p>宿泊施設 Chez Lando Hotel</p> <p>↓</p> <p><input type="checkbox"/> 日本大使館</p> <p>↓</p> <p><input type="checkbox"/> JICA ルワンダ事務所 (リチ・ネガナ化<sup>レ</sup>-ション・イン・ルワンダのブリーフィングのため)</p> <p>↓</p> <p><input type="checkbox"/> SMASSE (スマッセ) 中等理数科教育学校</p> <p>↓</p> <p>宿泊施設 Chez Lando Hotel</p>
8/5 (金)	<p>○ JICAの支援により設立され、運営されている、首都キガリから北へ車で2時間離れた山奥にある、トゥンバ高等技術専門学校(TCT)へ向かう。現地で支援を行っているJICAのコーディネーターから、学校の概要、卒業生の就職先、プロジェクト概要、協力隊員の主な活動についての説明を受ける。</p> <p>○ TCTのキガリキャンパスを訪問する。</p> <p>○ 8月8日に訪れる、大虐殺時からの除隊兵士の職業訓練校(JICAの支援によるプログラム)についての詳しい内容について、説明を受ける。</p> <hr/> <p>〈所見〉</p> <p>首都キガリから、四輪駆動車に分乗して乗り込み、田舎の農村地帯を横断したり、山奥の悪路を時速5～10キロで揺られたりしながら、どんなところに行くのだろうと思っていたが、到着すると、とても洗練された感じの専門学校があった。とても新しい設備のコンピューターや巨大なサーバーが配備され、木工品の加工を行うための機械も新しいものが揃っており、大変驚かされた。興味深かったのは、インド人の技術者が持ってきたという教室の壁中に貼られたポスター</p>	<p>キガリ（ルワンダ）</p> <p>宿泊施設 Chez Lando Hotel</p> <p>↓</p> <p><input type="checkbox"/> トウンバ高等技術専門学校(TCT)強化支援プロジェクト事務所</p> <p>↓</p> <p><input type="checkbox"/> トウンバ高等技術専門学校(TCT)キガリ校</p> <p>↓</p> <p><input type="checkbox"/> JICA ルワンダ事務所</p> <p>↓</p> <p>宿泊施設 Chez Lando Hotel</p>

月日 (曜日)	各訪問先での研修内容と所感	研修場所
	<p>である。学ぶことに対して大変前向きになることが示す格言と写真であり、個々の向上心はもちろんであるが、ひたすら発展のために努力しようとする国の実態をそれから読み取ることができたような気がした。</p>	
<p>8/6 (土)</p>	<p>○ ルワマガナの神父が暮らす家にスティ。様々な会話を通して、ルワンダの歴史や文化について学ぶ。</p> <hr/> <p>〈所見〉 英語があまり得意でない神父6名とのコミュニケーションに戸惑ったが、その分心と心のコミュニケーションが図れた。</p>	<p>宿泊施設 Chez Lando Hotel ↓ ルワマガナ <input type="checkbox"/> ホームスティ先</p>
<p>8/7 (日)</p>	<p>○ 教会のミサに参列。昼からは神父が校長をされている隣接する学校内を見学。 ○ 地元で活動する協力隊員と市場と隊員が住んでいる家を見学しに行く。</p> <hr/> <p>〈所見〉 3000人が一同に集まるミサは迫力満点であった。ルワンダでのキリスト教信仰者の存在を思い知らされるとともに、虐殺時の教会の存在についても考えさせられた。この教会でも神父を含むたくさんの人々が殺されたのだという。庭の美しい紫色の落ち葉の絨毯にその人々の思いを馳せた。学校の給食室が日本のものとは違い、庭で釜焚きしているところもあり、興味深かった。また、協力隊員と市場まで散策したときには多くの学びがあった。やはり、現地で実際に活動している人への取材は得るものが大きく、大変リアルである。部屋を見せてくださったことに、とても感謝したい。</p>	<p>ルワマガナ <input type="checkbox"/> ホームスティ先 ・教会 ・隣接する学校 ・ルワマガナの市場 ↓ キガリ 宿泊施設 Chez Lando Hotel</p>
<p>8/8 (月)</p>	<p>○ 8月5日に講義を受けた、政府がJICAの支援を受けて行っている若者（障害を負った元戦闘員・除隊兵士）の職業訓練所を訪れ、実際に見学する。 ○ 青年海外協力隊の活動から始まったNGOの若者の就業支援活動（「仕事のある暮らし」Shigoto no aru kurashi）を訪れ、活動内容と将来の展望について学ぶ。 ○ 政府が行っている社会人向けのICT訓練支援について学ぶ（障害をもつ元戦闘員と障害者の社会復帰のための中等理数科教育強化プロジェクト長期専門家との話合い）。</p> <hr/> <p>〈所感〉 94年の大虐殺で、実際に障害を負った20～25歳ぐらいの若者が技術訓練をしている現場に行った。みんな真剣で、時折屈託のない笑顔がこぼれている雰囲気は、想像していたものとは少し違って、どこか心が安らいだ。しかし、その後の事務所とのブリーフィングでは、たった15年前の出来事で、心の傷が癒えているとはとても言い難いということ、</p>	<p>キガリ（ルワンダ） 宿泊施設 Chez Lando Hotel ↓ <input type="checkbox"/> ニャンザ虐殺メモリアルホール（教会跡） ↓ <input type="checkbox"/> 除隊兵士（障害を負った元戦闘員）支援センター～障害者社会復帰プロジェクト事務所 ↓ <input type="checkbox"/> NGO「仕事ノアル生活」工場 ↓</p>

月日 (曜日)	各訪問先での研修内容と所感	研修場所
	<p>ただ技術を身に付けるだけでなく、和解と融和を進める活動や心のケアも不可欠であることを強く訴えられた。このプロジェクトは、日本の支援をルワンダ政府自身が積極的に受け入れて行っているプログラムであり、具体的に見学をした上で考えても、現在のこの国に大変相応しい、素晴らしい国際貢献のひとつの形であると感じた。</p>	<p>□ JICA ルワンダ 事務所 ↓ 宿泊施設 Chez Lando Hotel</p>
8/9 (火)	<p>○ ルワンダでの研修で感じたこと、学んだことを JICA 事務所の所長と駐在員の瀧本さんに報告、語り合う。最後にお礼の意味を込めて、スタッフ全員に日本の歌を贈る。 【移動】 キガリ空港 (ルワンダ) → ブジュンブラ国際空港 (ブルンジ) → ナイロビ空港 (ケニア) → ドバイ (アラブ首長国連邦)</p> <hr/> <p>〈所感〉 大変充実した旅であったことを、JICA ルワンダ事務所小林所長と、瀧本駐在員に報告できた。わたしは今回の研修で、日本の子どもにどのような力を付けておくべきかということを中心に個人的な主題としてもち続けて参加していたため、前日に世界で活躍され続けてきたお二人にその質問をお願いしていたので、その回答を聞いたことが大変嬉しかった。その中でも、「自分の考えを主張できるコミュニケーション能力」と「mastery for service」という言葉が非常に印象に残った。これらを今後の教育活動にしっかり生かしたいと強く思った。</p>	<p>キガリ (ルワンダ) 宿泊施設 Chez Lando Hotel ↓ □ JICA ルワンダ 事務所 ↓ □ キガリ空港 【国際線／機内泊等】 キガリ空港 (ルワンダ) → ナイロビ空港 (ケニア) → ドバイ (アラブ首長国連邦)</p>
8/10 (水)	<p>【移動】 ドバイ (アラブ首長国連邦) → チャンギ空港 (シンガポール)</p>	<p>【国際線／機内泊等】</p>
8/11 (木)	<p>【入国 (帰国)】 チャンギ空港 (シンガポール) 1:00 発 → 福岡国際空港 8:10 着 → JICA 九州国際センター</p> <hr/> <p>〈所感〉 10日～11日 帰路で体調を崩し始めるケースがあるため、フライト時もトランジット時も、健康管理に細心の注意を払った。また、帰国時しばらくしてから、安堵の気持ちから張っていた気が開放され、発熱や下痢を起こす場合を経験しているため、さらに注意をした。全員が無事に帰国でき、本当によかった。</p>	<p>シンガポール → 福岡空港 【国際線／機内】</p>

学 校 名

福岡県糸島市立前原南小学校

氏 名

福 井 陽 子

## 1 研修全体についての所感

長い長い坂道を、大きな荷物を頭に載せ、あるいは自転車に積みながら、ひたすら歩き続ける人々の姿の辛抱強さ。自分が産んだ子でなくても引き取って育てる親と、育ててくれるその親を手伝い助ける子ども達の姿。貧しいはずのルワンダには、豊かになりすぎた日本が無くしてしまった心の豊かさがあった。

ジェノサイドの悲劇は、パレスチナ問題と同様、自分の国の都合を優先させる先進国の政策が引き金となって起こり、人々はそれを乗り越えようと今も努力を続けてる。

そのような中で、JICAをはじめとする日本人の地道な努力の姿は、ルワンダの人々からの信頼が感じられ、同じ日本人として誇らしく思えた。せめて日本は、純粋にそこに生きる人々がみな幸せになることにつながる支援のできる先進国であり続け、そういうスタンスで他の先進国へも常にメッセージを発信できる志の高い国であり続けたいと思った。

## 2 参加するにあたっての目的

「共生・開発のための政治のリーダーシップと教育の役割」というテーマのもと、次の5点を主な目的に今回の研修に参加した。

- ① シンガポール及びルワンダの社会や教育の現状と国際社会での日本の役割を知る。
- ② 日本における教育基本法でいうところの「平和で民主的な国家および社会の形成」に必要な条件は何か考える。
- ③ 国際協力（国を発展させる事業）を学ばせることの教育効果について考える。
- ④ 国際理解教育への関心をもっと高め、広げていくための方途（報告会のあり方を含む）について参加者と共に考えを深める。
- ⑤ 現地の人々の生活や心に触れ、自分の教育実践に生かすための材料を集める。  
（将来の夢・大切なものについてのアンケート等）

## 3 現地研修を通しての気づきと疑問

かつて日本が支援していたシンガポールは、人材育成に力を入れ、経済発展を遂げ、今や先進国の一員として他の開発途上国への支援を行うまでになった。現地のインフラ整備や教育あるいは企業になう人々の姿は、いきいきとして自信にあふれていた。

ルワンダの場合、援助をしている先進国の中で、日本の支援額はそう高い方ではない。日本に求められているのは、資金面よりもむしろ技術を指導できる人材を育成することへの支援である。開発途上にある国は、自分達の力で自分達の国をよりよくしていくことができるようになりたいと願っている。

日本の小・中・高（高専）の教育の教育に携わる者の一人として、次のことの大切さを改めて確認

することができた。

- ① 海外（とりわけ開発途上国）に目を向け、先進国として日本が世界の中で果たすべき役割、期待されている役割を知ること
- ② すべての国の人が豊かに暮らせるようになることを目指して自分にできることは何かを考え、実践できる人を育てていかななくてはならないこと
- ③ 技術指導できるそれぞれの専門性を高めていくこと
- ④ しっかりした言語力を身につけ、コミュニケーション力やプレゼンテーション能力を高めること

そういうことが、教育の中で大切にされなければならないし、そうでなければ、これからの国際社会において、日本が信頼され続け、生き残ることができないという危機感を持った。しかし、学ぶ側にそういった切実感があるだろうか。また、学ばせる側にもそういった切実感があるだろうか。国際理解教育にある程度関心がある自分でさえ、そういう危機感・切実感が足りなかったように思った。このことを自覚できたことは、自分の本研修での大きな成果であると思う。

JICA ルワンダの瀧本氏から、中学校時代の恩師からの一枚の葉書がこの道に進むきっかけになったことを伺ったが、小学校の教師として、いつか子ども達の心の中で思いが大きく花開くことを願いつつ、世界のことに興味・関心を持たせることに、これからも微力ながら尽力していきたい。

## 4 JICA への提案・要望

3で述べた点から、もともと国際理解教育に関心のある教育関係者はもちろん、これから社会に出るために最終準備をしている大学生を対象に、国際理解教育を実施できるような講座を設けることは、効果的ではないかと考える。（特に教員養成課程のある大学での講座の実施）また、教諭の自分がいちおうはおこがましくもあるが、管理職・指導主事クラスの先生方にも、理解があり意識の高い方とそうでない方もおられると思うので、何かの研修の機会に国際理解教育の必要性を再認識する場が少しでも設定されるとよりよくなると考える。JICA から、教育委員会へのそういった面での働きかけがあるといいと思う。

今回、アドバンスコースとして研修をさせていただいたことで、前回とは違った視点を得ることができ、また視野を広げることができ大変感謝している。

この教師海外研修は、国際理解教育を実践する上で、教師自身が実感し、取材し、実践に生かすことのできる大変貴重な研修の機会になっている。これから持続可能な社会のために国際理解教育の果たす役割を理解し、志そうとする後輩達のためにも、今後とも本研修を継続していただくよう切にお願いしたい。

## 5 各訪問先・研修内容についての所感

### (1) シンガポール

#### 【Polytechnic】

産業のニーズに直結した最先端の専門技術を身につけさせる近代的な教育施設。30haのキャンパスに6つのコースのと厚生施設が設けられている。国の予算をもとに各国の大学や企業から学識者・技術者を招聘している。4年生の時点で能力別に振り分けられている等、進路の選択の面

からすると一概に是とも言えないが、学校の概要を説明する女性の態度には誇らしさを感じられ、かつて日本が支援した国が、経済的に素晴らしい発展を遂げ、更に教育に力を入れながら発展していこうという国策の一端を見ることができた。

### 【Singapore Cooperation Enterprise】

政府から委託されノウハウ支援を行っている半官半民の企業。①民間活力 ②社会保障 ③新空港建設 ④都市計画アドバイザーの4分野でアフリカなどの開発途上国を支援している。シンガポールが支援ができる経済力とノウハウを備えた国に成長していることが分かった。説明を受けた姜氏はルワンダで仕事をされた経験があり、特産品やあいさつ、社会情勢やタブーなど、親切なアドバイスを受けた。女性議員が少ない日本に対し、女性が重役として企業の中でいきいきと活躍する姿が別の意味で印象に残った。

### 【リー・クワン・ユー公共政策大学院】

大岩隆明代表からお話を伺う。かつて日本が行っていたシンガポールへの支援が、シンガポールの開発途上国支援に生かされていること、また、お札の裏に学校教育の様子が印刷されているが、東京大学公共政策大学院との間でダブルディグリー制を導入するなど、シンガポールが教育と人材育成に特に力を注いでいることがわかった。日本の大学より豊かな財政資金で研究環境を与えられれば、研究者が日本を離れていくことも懸念され、もっと日本の政策のあり方を見直す必要があるのではないかという危機感を感じた。

## (2) ルワンダ

### 【Gisozi Memorial Site】

ジェノサイドの悲劇が当時の写真や体験者の映像と音声で理解しやすく展示されていた。とくに、国連軍を率いて鎮圧しようとし、援軍を得ることができなかった将校の空しさ、殺された子ども達の愛くるしい笑顔の写真とともに好きなものを紹介した展示がいつまでも心にのこり、先進国の都合で引き起こされたことへの怒りがこみ上げた。こんなことが二度とくり返されてはならないと思った。

### 【Nakumat Supermarket】

このマーケットの周辺は大変な賑わいを見せていた。1つのマーケットほとんどすべてが揃うような大きな店は、移動中の車窓からは他に見当たらなかった。1つのレジに2人ずつ担当がいるのが違和感があった。紙の袋に買った商品を入れていた。ルワンダ産の紅茶・コーヒー・はちみつ・マカダミアナッツをおみやげに購入した。人々の消費生活の様子がうかがえてよかった。

### 【Courtesy call to Embassy of Japan】

畑中邦夫全権大使に直接質問し、答えていただくことができ、光栄に思った。

これまでの中央銀行もと総裁の服部氏や JICA 理事長の緒方氏の努力もあり、日本とルワンダはいい関係にあること、ルワンダは女性議員が53%もいるのに対し、日本は先進国の中でも最も遅れているので話題にできないこと、ルワンダは特に教育に力を入れていること、カガメ大統領の任期があと6年に迫る中、後継者をどのようにするのか、どのように民主化を図るのか、また、

コンゴ側の無政府地帯の国境整備をどのようにしていくかが、今後のルワンダの課題であると伺った。また、海外のニュースが日本のメディアではあまり取り上げられず、情報が不足しがちなので、日本の教育者へ、「日本は海外との交流なしにはやっていけない国なので、子ども達が海外のことにもっと敏感になることに努力してほしい。」という願いを伝えてくださった。

### 【REACH】

佐々木和之氏からお話を伺った。ジェノサイドから2年後の1996年に、被害者側と加害者側の心の癒しと和解を目的にフィルバート・カリサ牧師によって立ち上げられたNGOである。癒しと和解のセミナーを通して、紛争の歴史的な原因等について理解を促すとともに、種族をこえて一緒に再活再建のための物作りや、加害者が被害者のつらさに耳を傾けることができるように支援をしておられる。壊された家を建て直すということで赦しをえられ、互いの心が癒されていくという、修復的正義の実現を目指した草の根的な活動であるが、どちらにとっても真の心の癒しにつながっており、この活動に携わっておられる佐々木氏のご努力に頭が下がる思いだった。

### 【SMASSE】

高橋専門家よりお話を伺い、後日見学させていただいた。ルワンダでは9年間の男女共学の義務教育を無償で行っている。教科書はあるが、冊数不足で子どもは使うことができなかつたり、教科書を貸し出しているところもあるが指導する教師側も教科書を使った経験がないため、どうやって使ってよいか分からなかつたりしている。教師に指導力を付けるための指導が行われ、身近なものを使って興味関心を高めたり、実験したりする指導能力を付けることを支援している。学生の年齢はさまざまで、より高い給料がもらえることを目指し頑張っていた。

### 【TCT】

トゥンバ本校では井川氏、舟木氏、また、キガリ校では西山氏からお話を伺い、見学させていただいた。産業社会のニーズに適合した、実践的な高等技術者の育成を目指した教育施設で、標高2200mにある清潔で美しい校舎・施設であった。JICAからの支援で導入されたコンピュータを始めとするたくさんの機器が導入・設置されていた。モチベーションを上げるため、どの教室にもたくさんのポスターが貼り巡らされていた。キガリ校には他の近隣諸国からも学びにきている他、一般向けの有料セミナーも行われていた。ジェノサイドのため、中堅から高等技術を指導すべき年代の人材が不足しており、ここにも国の発展にむかおうとする人々にとって負の影響を与えていることが分かった。

### 【ECOPD】

妹尾専門家よりお話を伺い、後日見学をさせていただいた。元国軍（RPF）兵士・旧政府軍民兵を分け隔てなく支援してきた支援プロジェクトが、新たに一般の障害者も含めて社会復帰のための技能訓練と就労支援を行うプロジェクトとなって継続している。技能訓練は、美容整容・溶接・全盲者歩行・建築・調理・木工・シルクスクリーン・水道管・縫製・電気機器修理・農牧業と多岐にわたる。技能訓練後、協同組合の結成を促したり、スターターキットを提供したりして活動しやすくし、必要な情報を提供する等の支援を行っている。足に障害がある人が多く、施設の入り口にスロープを付けるなどの改善が少しずつ行われている。指導に当たるルワンダ人の教師

の指導力の向上を図るため、青年海外協力隊員を始め、日本からの技術支援や新たなプログラムに期待されていた。

### 【Nyamata Memorial Site】

教会に助けを求めながら、その教会が殺戮の場と化したことの悲劇を忘れないため、殺された人々が身につけていたものをそのまま集め、床の上に低い台をこしらえて敷き詰められていた。トイレの中に投げ込まれた遺体から外した衣服、教会の壁には投げつけられて殺された子どものあとがしみになって残っており、同じ1994年のジェノサイドの6月に生まれた我が子のことと重なって涙が止まらなかった。マチューテで斬りつけられ、割れた頭蓋骨など、惨状の恐ろしさを思い浮かべた。案内をしてくれたエリザベスさんが、アンケートに、自分の大切なことは、「ルワンダが悲劇の後何年にもわたって再び平和な国になったこと」だと書いてくれたことがとても心に残り、これからも平和が続くことを願わずにいられなかった。

### 【Homestay in Kigali】

とても温かい家族だった。協力隊員をこれまでも受け入れてこられたせいも、子ども達が日本語を覚えて話したり、ひらがなの練習を楽しそうしたりにするので驚いた。お母さんのモニカさんは、ジェノサイドで夫と夫の子どもと自分の子の3人を失っていた。2人の息子はインドとカナダの大学へ行っていること、娘は結婚して子どもができてよそで暮らしていること、そして、甥と姪を今養っていることなどをアルバムを見せながら話して下さった。深い悲しみを乗り越えてこられた心の強さ、甥や姪の面倒まで見る心の広さを感じ、ルワンダ人のすばらしさに感動した。また、友達と連れだって私達をExpo2011に連れて行って下さった。ルワンダの伝統や近隣諸国の物産の展示や販売が行われ、見物客がいっぱいで、熱気にあふれていた。家に戻ってきた時、子ども達が夕飯の支度をして待っていてくれたことにまた驚いてしまった。こんな家族の助け合いが当たり前である心の豊かさを、日本人が忘れていないかと反省させられた。

アフリカの家庭の味はおいしい。加熱調理は2口の電熱器と炭のような固形燃料で行っていた。冷蔵庫もある。庭には家庭菜園にパイナップルやなすびレタス、パセリ、アロエ、バナナなどが植えられている。後片付けでは水を大切にしていることとそのための工夫が素晴らしかった。家の外には雨水をためるタンクと地下貯水槽があり、モーターで水を送っており、炊事場にもトイレにも水道が通っている。しかし、出ない時間帯もあった。炊事場やトイレの横には、大きな筒状の容器に水をためてあり、炊事の他、トイレで用を足した後も汲んで流して使っている。洗いの後の水は庭にまいている。洗濯機は見当たらなかった。バナナの木の根もとは穴が掘られ、ゴミ捨て場となっていた。生ゴミは、外のバスケットに入れておくと乾燥してほとんど臭わない。しかし、紙や電池も外に捨てられていたので、ごみの分別の意識がもっと広がると思った。

日本では店に並んでいるのしか見たことのないアボカドが木になっているところや、牛乳を大きな缶に入れたままバイクで宅配に来た様子を見たりでき、大変興味深かった。

### 【Nynza Royal Palace Heritage】

昔のわらぶきの宮殿や、家畜として牛が大切にされてきたことを実際に見ることができた。また、植民地支配を受けながら王国が滅んだ歴史を当時の写真のパネルを見ながらたどることができた。いつも先進国は新しい優れた技術を伝える反面、自分の利害しか考えていないことで、その国の



人々の文化を台無しにしてきたことを改めて思った。

### 【Shigoto no aru kurasi】

事前研修で加藤氏からお話を伺っていた工房で見学をさせていただいた。貧しさから学校に通えなくなる子ども達があとをたたないことから、家庭に安定した経済基盤を作ることが大切と考え、立ち上げた工房だった。単に牛の角を使って工芸品を作る技術を教えるのではなく、それを販売につなげ、仕事として稼ぐことができるようにするための工房だった。訪問したとき、床の改装中だったので、収入が上がり、少し余裕が出てきたのではないか思った。天日に干して乾燥させた牛の角が、小さな部屋にうずたかく積まれていた。おみやげとしてみんなで購入したが、販路がもう少し広がれば、より暮らしの向上につながるのと思った。送賃を含めて利益を上げるのは難しいのかもしれない。アンケートに応じてくれた子ども達が「社長になりたい」「通訳になりたい」と将来の夢を答えてくれたので、シゴトノアルクラシがこの夢の実現に是非ともつながってほしいと思った。

学 校 名

大分県別府市立北部中学校

氏 名

大津留 美 紀

## 1 全体の所感

思い描いていたアフリカとは違い、緑豊かで過ごしやすい気候、おいしい食べ物、明るく恥ずかしがり屋で勤勉な人々・・・アフリカの大地に立っている感覚がほとんどないまま研修を終えた。主食はトウモロコシ粉でつくるウガリ、キャッサバなどの芋類、甘くないバナナ、そして米も食べている。この米の栽培に JICA が大きく貢献していることも知った。実際に、灌漑や稲作、農業関連の場所には行けなかったけれど食糧自給率が 100% の国であるということは素晴らしいことである。

紛争後短期間で復興しているルワンダであるが、カガメ大統領の強力なリーダーシップで造られているということを感じた。卒業後すぐに職業人としての技術を身につける高専レベルの技術高校や除隊兵士の職業訓練施設、そして科学技術発展のための理数科教育強化の取り組みなど、資源の少ないこの国で、人を育てることが国造りの柱になっていると思われる。しかし、紛争の心のケア、ストリートチルドレンの職業支援といった時間がかかる個人個人への働きかけは NGO でないと行き届かないのも現状である。今は平和だが、復興している国とそれを牽引しているカガメ大統領が指示されているが、この先この平和が続くのかはとても危うい気がした。カガメ政権が終わるときに民族の中に燻り続け、消えなかった思いが爆発しなければよいのであるが。

しかし、シンガポールもそうだが、国を造っていく時のリーダーシップは強引な方がまとまるのかもしれない。もちろん民主主義で、誰もが自由に何でも言える国にそんな時代に育ったので、そうでない国の大変さが理解できないのかもしれない。ただ、今の日本の復興を支えているのは国のリーダーではなく心ある人達なのではないか。政治のリーダー不在のままの日本が進んでいる未来は明るいであろうか。近年国を開いたブータンは国民総幸福指数を一番に考えている国だ。国は破綻寸前のスペインやイタリアで、国民は幸せに暮らしているという。また、福祉の充実した学力の高い北欧の国では自殺が多く（日本も世界の中では同様であろう）、開発途上国では自殺はほとんどないという。国のリーダーと国の発展、国の発展と国民の幸福感、何を優先すべきなのかとても考えさせられた研修であった。

JICARwanda の職員のみなさん、協力隊や専門家など現地で活躍されているみなさんのお話を聴けたことは大変貴重な経験であった。そして今回の仲間とは、伝記を何冊も読むような素晴らしい出会いであったと思う。それぞれの方に進路学習の講師として来ていただきたいくらい魅力的な素敵な方々であった。これからもこのつながりを大切にしていきたい。

## 2 参加する時に個人でどういう目標を設定していたか。

シンガポールもルワンダも日本も国土が狭く、資源が少ない国である。人口密度は高く、人が資源だと考える要素は似ているものがあると思う。大虐殺からわずかな期間で「復興」しつつあるルワンダ。やはり短期間でアジアで経済力も学力もトップとなったシンガポールに何を学ぼうとしているのかを知ることで、経済力も学力も下降傾向にある日本のこれからの「復興」を考えることができるのではないだろうか。東日本大震災からの「復興」も含めいろいろな意味で日本は岐路に立っている。「復

興」のヒントを得たいと思った。

また、中学校現場には思春期の子ども達の心の荒れやいじめ、人間関係がうまくつけれないといった課題がある。民族紛争後の和解と平和構築の取り組みや元戦闘員や障がい者支援のプログラムは、人間関係を修復したり、価値観やこだわりを修正したりすることができるプログラムではないかと思われる。学校での人権的な課題に生かせることを学んできたいと考えた。

そして、国際理解教育に熱心に取り組んでいらっしゃる先生方の気づきや取り組みに学ぶということを目指して設定した。

### ③ 現地研修を通しての気づきや疑問

まず、到着した夜の景色に大変驚いた。停電が多く懐中電灯を持参の方がよいと聞いていたが、街の灯りが想像以上に多く大都会ではないかと思った。そして滞在中、停電は2回しかも短時間であった。また、幹線道路は良く整備されており交通量も多かった。道路に警官が立っていて様々な取り締まりをしていた。写真撮影やスピード違反、裸足で歩くなどが取り締まられると聞いたが、他にどんな取り締まりをしているのであろうか。また、警察官の数は人口あたりとても多いのではないかと感じた。教員の特に小学校教員の給与はかなり少ないと聞いたが、警察官はどの程度のだろうか。シンガポールもゴミを捨てたら罰金というくらい警察の取り締まりが厳しい国である。強いリーダーシップで国を動かしていくにはたくさんのきまりが必要なのではあろうか。

また、事前研修でアボカドやバナナなどが採れる農業国だと聞いていたが、実際に食糧自給率は100%で穀類も野菜も果物も豊富でしかも新鮮であった。丘の多い、水は谷にしか貯まらない地形で郊外では水汲みをしている姿も多く見かけた。JICAが行っている水プロジェクトの灌漑や水田、特産品であるお茶やコーヒーの農園や加工所などにも行ってみたかった。そして国が力を入れている観光ビジネスの現場である山に行く機会がなかったのは残念であった。

### ④ JICA に対する提案と要望

今回、アドバンスコースに参加させていただいたことで貴重な体験ができ、感謝の気持ちでいっぱいである。

以前教師海外研修で行ったシリアもそうであるが、国際理解教育に興味関心を持ち実践を重ねている仲間に出会えたことが何よりの成果であったと思っている。その後集まる度に、情報交換ができ刺激を受けている。同期の仲間だけでなく、これまでの教師海外研修の参加者が希望して参加できるような会があると、他の研修先のこと、研修後のそれぞれの取り組みなど情報交換でき、各自がモチベーションをあげて、またそれぞれの県や職場でさらにパワーアップした取り組みができるのではないかと考える。数年前、JICA九州で国際理解教育ファシリテーター養成講座が開かれた。中野民夫さんから直接話を聞いたことも貴重な体験であったが、養成講座で知り合った他県の方や協力隊経験者の方、JICA職員の方と交流したことは大変刺激になった。

また今回素晴らしい仲間に出会い、他の方の実践や発表をぜひ聞いてみたい、見てみたいと思っている。それぞれの勤務校だけでなく、各県教委の国際理解教育担当指導主事に派遣依頼の文書等送っていただくと、同期の仲間以外に興味関心のある方、過去の参加者等が参加しやすくなると思う。

現在、各県の初任者研修などで国際理解教育に関する講座が開かれていると思うが、夏季休業中な

どの研修で、海外からの JICA 研修に参加したり、一緒にまち歩きをしたりといったフィールドワークに参加するような参加型の研修があるとよいのではないかと思う。そこから、国際理解教育の視点が育まれたり、教師海外研修や協力隊、シニアボランティアといったことに興味を持ったりする人が増えるのではないかと考える。

## 5 各訪問先の所感

### 8月1日(月) シンガポール

#### ・ TEMASEK Polytechnic

シンガポールの教育制度の説明と Polytechnic のレベルの説明をしていただいた。Polytechnic では、生活に密着した即実践で通用する教育をしている。国の方針でインターンシップは全員必須とのこと。TEMASEK では現在年間 400 人くらいが海外の企業でインターンシップを行っており、給与をもらえるところもある。日本の技術支援を受けたシンガポールだが、資格制度についてはアジア諸国に通用するアメリカの資格を取らせるようにしている。これは、日本の資格が海外で通用しないことからだそう。



国土が狭く資源が少ないところは日本と似ているのだが、シンガポールは英語教育もそうだが教育制度や資格制度も世界で通用する国を目指してきたんだと理解できた。そして、まさにその成果がここ数年でていると感じた。

#### ・ Singapore cooperation enterprise



半官半民の SCE、外国政府からの依頼を受けてシンガポールの企業が利益を出すための視点で支援や協力を行っているシンガポールの機関である。現在ルワンダへは 4 つのプロジェクトに取り組んでいるとのこと。8 回ルワンダに行ったことがあるとおっしゃった担当者は、具体的なプロジェクトの内容までは詳しくわからないようであったが、国と国、国と企業をつなぐ仕事をされていて、とても堂々としていたことが印象的であった。

#### ・ 大岩 JICA 代表から事業説明 at Lee Kuan Yew School of Public Policy

シンガポール国立大学リークワンユー公共政策大学院では、現在日本人 8 名を含む世界各国からの学生を受け入れている。「シニア幹部向けリーダーシップ研修」は 3 週間約 200 万円だそう。開設当初よりハーバード大学、コロンビア大学、パリ大学、ロンドン大学などとダブルディグリー協定を結んでおり、教員の交換派遣など戦略パートナーシップを組んでいるとか。



1954 年から日本はシンガポールに援助してきたが 1998 年に終了し、現在は対等な立場で新たなパートナーシッププログラムに取り組んでいるそうである。大岩代表の日本語での説明で、シンガポールのこと、日本との関係など大変わかりやすかった。日本は戦後の復興にはめざましいも

のがあったが、世界進出については完全に出遅れた感がある。政治家のリーダーシップは重要であると感じた。しかし、中東諸国で起きているクーデターを考えるとリーダーシップが独裁政治になってしまう危険もはらんでおり難しい。

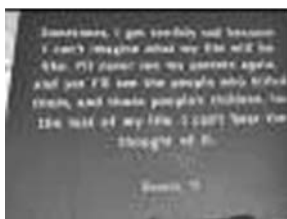
## 8月3日(水) ルワンダ

### ・ Briefing by JICA Rwanda

JICA ルワンダにて瀧本さんよりスケジュールや諸注意がある。期待と不安半々。



### ・ Gisozi Genocide Memorial Site



文章だけでなく映像や写真などから、大虐殺がほんの17年前に起きたのだということを実感しとても悲しい気持ちになった。順路後半、ベトナム、ドイツ、カンボジアなどの世界各国での虐殺の展示もあった。日本も中国をはじめ東

南アジア諸国で虐殺を行っている。日中戦争や南京大虐殺の生存者の証言調査に行ったことを思い出した。外国の歴史に学び、私たちも祖先の過ちを繰り返さないようにしないといけない。

## 8月4日(木) ルワンダ

### ・ Embassy of Japan

2011年1月よりルワンダに赴任された畑中大使よりお話をうかがった。3年くらい前まではほとんどJICA関係者の方々30名くらいしかいなかった日本人だが、現在ルワンダには100名を超えるくらいいらっしゃるそうだ。ルワンダ人の平均収入が年間500ドル、自給率は100%のルワンダ。他のアフリカ諸国と比べると緑が多く政治も清潔だとか。国の情勢やカガメ政権に関する詳しい話を聞けてとても充実していた。



### ・ Brief on (REACH)



事前研修で見たDVDの1本がREACHの取り組みであった。虐殺の加害者が反省して被害者の家を建てるといった内容であった。'96年にフィルバート・カリサ牧師によって創設されたルワンダのNGOで基督教の道徳性と共同体の価値観(身内で罰するけれどその後は引き受ける)がベースになっているそうだ。この取り組みがうまくいくかどうかは、加害者とNGOの信頼関係や、それ以上に被害者側が鍵を握っているという。草の根からの平和構築-修正的正義による和解をめざして-まさに、その地に根ざした草の根活動なしにはできないと感じた。以前ニュージーランド研修で差別虐待をされた歴史を持つ原住民マオリ族が多く暮らす地域に住んだことがある。マオリのコミュニティの紛争解決と似ていると思ったら、マオリやネイティブアメリカンの共同体の紛争解決に学んだところが大きいとのことであった。

### ・ Training site (SMASSE Rwanda)

中等理数科教育強化プロジェクトは国の「科学技術発展に資する教育の推進」の目標の下取り組まれているもので、ちょうどそのトレーニング期間だということで Lycee de Kigali Secondary School で見学させていただいた。8月3週間の長期休暇中11日間全国10ヶ所で研修を行っている



そうだ。対象はA2レベル、高卒で無資格の教員だとか。年齢層も様々で一生懸命実験や話し合いをしていた。トレーナーをしていたユージン先生は山形に一ヶ月研修に来た事があるそうで、授業研究を見てぜひルワンダでも取り組みたいと研修最後2日は授業→話し合い→もう一度授業を行っているそうだ。思っていた以上に実験道具が充実していて驚いた。

### ・ Brief on JICA Project (SMASSE Rwanda)



SMASSE のことについて、JICA の高橋専門家からお話をうかがった。この研修では『hands on minds on』を合言葉になるべく実験したり活動を取り入れたりしているのだそう。生徒側の感想としてはわかりやすくなった、質問しやすくなったと好評のようであるが、授業の組み立てや教科書を先生しか持っていなかったりといった課題も残されている。また、研修では学位はとれないので給与が上がるわけではなく参加教員のモチベーションを上げることが課題のようだ。しかし、全国で研修がかなりの期間一斉に行われていることの意義は大きいと感じた。

## 8月5日(金) ルワンダ

### ・ JICA Project (TCT)

首都キガリから北へ2時間車に揺られて Tumba という高地にある Tumba College of Technology に行った。2007年に設立された技術高校より少し上の高専レベルの学校である。6週間の企業研修を含む2年間が就学期間で卒業生はまだ2期しか出ていない。日本が無償支援しているプロジェクトとのことでパソコンなど



設備が充実していた。協力隊の方、専門家の方、コーディネーターの方と日本からの技術支援も行われており、生徒たちの学ぶ意欲もうかがえた。驚いたのは教室内にたくさん貼られていたポスターで、インドの技術者が持ってきたものだそう。教訓的なものばかりで、インドもこうやって学力や経済力を上げてきたのかと思った。

### ・ TCT Kigali Campus

TCT が企業研修など産業界との窓口となるよう首都キガリの KISCO の中の一棟を間借りして運営している。シンガポールでも感じたが、高専はその後の就職まで考えて企業とのつながりを持つことが、生徒や教師のモチベーションを上げるためにも学校を発展させていくためにも重要なんだと思った。Kigali 校の果たす役割はこれからどんどん大きくなっ



ていくと考えられる。

#### ・ Brief on ECOPD



障害を持つ元戦闘員と障害者の社会復帰のための技能訓練及び就労支援プロジェクトは政府からの要請に基づき JICA が 2005 年から取り組んでいる。除隊兵士は 50 万人とも 8 万人とも言われており、子どもの頃にウガンダに逃げ 94 年に帰国したカガメ大統領は除隊兵士への支援に力を入れているようだ。08 年第一期プロジェクト終了時に行われた調査では、約 75%の方が習得した技能を活用して仕事を行ったと答えているらしく成果がみられる。現在は第三期が開始されており、今年の 1 月からは一般障害者の技能訓練や就労支援も実施しているそうだ。敵対していた兵士同士が同じ場所で学ぶこと、元戦闘員と社会的弱者である一般の障がい者が一緒に学ぶこと、他では聞いたこともない素晴らしいプロジェクトだと思った。現在日本で障がい者の方の工房や施設に見学に行かせていただいているので、8 日の訪問が楽しみである。

#### 8 月 6 日 (土) ルワンダ

##### ・ Nyamata Memorial Site

緑豊かでのどかなところに Nyamata Memorial Site はあった。大虐殺が起きた 1994 年以前から国の政策として、湿地帯のこのあたりに民族が集められたり、人が亡くなるとツェツェ蠅が発生したからだとか、不審な差別や虐待が行われていたらしい。大虐殺では約 45000 人の方が亡くなりこの元教会に遺骨と服が集められ展示されている。壁には叩きつけられた子どもの血がついていたり、壊された壁など生々しく残っていた。人が人をこんなにまでいためつけることができるのかと何とも言えないか思いがわいてきた。



この日は 8 月 6 日、原爆記念日に虐殺記念館に立っているということで日本のことを思わずにはいられなかった。

#### 8 月 7 日 (日)

##### ・ Home Stay in Kigali in Mukarurina Monique

ホームステイは、福井さん、廣川さんと一緒に Kigali 市内の小学校の先生をしている Monique さんのお宅だった。一緒に暮らしているのは姪の Hamida と甥の Dahaiyo で、夫と一番下の息子は虐殺で亡くなったとのことであった。他の息子 2 人はインドとカナダで暮らしているとのこと。着いた時に同僚の友人が 2 人いらっ



しゃっており、Monique とその同僚の方と 2011 Rwanda EXPO に出かけた。週末の夕方ということもあり、バスには長蛇の列、会場も大混雑であった。会場にいるところが途上国ということをおぼろげに忘れるくらいたくさんのパビリオンがあり、車や家電などたくさんの物が展示販売されていた。



帰宅して遅めの夕食、15 歳中学生の Dahaiyo が食事の準備をしてくれていた。とてもおいしかった。私たちも一緒に片づけをしたが、子ども達はよく働くなあとと思った。



7日は朝食後、牛乳売りから牛乳を買いおつかいを頼まれた二人と一緒にローカルマーケットに行く。親子に許可を得て写真を撮ったが、その後まわりの方から激しく怒られここでは撮影は控えようと思った。帰り道、家の向かいがFMの放送局だということで見学を申し出たところ快く中を案内してくれた。スタッフは50人で今年の終わりにはテレビの放送も始めるとのこと。貴重な経験ができた。家にもどって昼食。Moniqueは料理を習いにも行ったらしく、毎食きれいに盛りつけられ、とても美味しかった。食事の後、子どもたちの通知表やノートを見せてもらった。授業用ノートは学校に置いているらしく家庭学習用ノートだと言っていた。また、二人はカメラに興味があり、すぐに触りたがりあわや全消去という場面もあった。中学生のDahaiyoはヒップホップ音楽などが好きでTom Closeという怪しい名前のRwanda人ミュージシャンをすすめてくれた。また携帯電話も持っており、SIMカードは2枚あるという。使用料は安いそうだ。小学5年生のHamidaは人懐っこくておしゃれで撮影用にお気に入りの服に着替えてくれた。



ホームステイを通して少しではあるがルワンダの暮らしを垣間見ることができた。また、親戚と言っていたが、子どもたちは近い親戚ではないようであった。REACHの佐々木さんがおっしゃっていた共同体意識がこれなのかもしれないと思った。1泊2日ではあったが、好意的に受け入れて下さったMoniqueさん一家に感謝の気持ちでいっぱいである。

## 8月8日(月) ルワンダ

### ・Nyanza Royal Palace Heritage

Kigaliから山を越え水田の広がる谷を抜けNyanzaの小高い眺めのよい丘に王宮跡があった。美術館や王宮の復元したものがあって、立派な角のある牛もたくさん飼っていた。とても眺めのよい場所であった。



### ・Nyanza VTC JICA Project (ECOPD)



5日に瀬能さんからお話をうかがったECOPD ProjectのVCTを訪問した。実際に多くの生徒が学んでいるところを実際に見学することができた。卒業生が協同組合をつくることを奨励したり、裁縫コースだった生徒には卒業時にスターターキットとしてミシンを渡すなど、すぐに働けるような、そして働き続けられるような支援をしていることは素晴らしいと思った。

### ・NGO Shigoto no aru kurashi

事前研修でお話をうかがった元協力隊の加藤さんが立ち上げたNGOの工房Umulimo Mu buzimaを訪問した。ちょうど工房を改装している最中らしく、作業している様子を見ることはできなかったが、品物を購入させていただいた。手書きであったがレシートも発行してくれ金銭の出納などもしっかりしていると感じた。





・ Ambassador Rwamasirabo

元大使は病院の先生でもあるそうで、どうしても抜けられないという連絡があった。残念。

しかし、おかげで瀧本さんのお話を聞くことができた。高校時代からまっすぐ国際協力の道を選び、迷いなく自分のやりたいことができているなんて素晴らしいと思った。

8月9日(火)

・ Debriefing to JICA Rwanda

最終日、参加者各自が感想を述べた。また、質問事項には瀧本さんがていねいに答えて下さった。小林所長からのお話は特に、人の豊かさの要因には、機会の豊かさと心の豊かさがあると思う。子どもたちも本当は現場に行ってみて確かめる機会があるとよいのだが、そこはJICAが担い、そして心の豊かさは先生方に頑張ってもらいたい。そして、一緒に日本の子どもたちを育てていきましょうという話が心に残った。明日を生き抜く力を持っていて機会に恵まれない途上国の子どもたち。しようと思えばたくさんのお機会は手に入れられるのに夢をもてない日本の子どもたち、どちらも大切なこれからの世界を背負っていく子どもたちだ。私たちは日本にもどってすべきことが待っていると感じた。この研修を生かしていく方法を考えたい。



学 校 名

大分県中津市立本耶馬溪中学校

氏 名

小 川 邦 夫

## 1 研修に関する全般的な所感／意見について

映画「ホテルルワンダ」や「ルワンダの涙」を見て、ルワンダを知った人が、現在のルワンダを訪れたら、おそらく映画と現実とのギャップに驚くかもしれない。そういう私も17年前の大虐殺の記録と開発の進む首都キガリの街並みとのギャップに驚いた1人である。ルワンダに行く前の印象は、虐殺、貧困、マラリア等悪いイメージばかりだったが、実際に7日間ルワンダに滞在して感じたことは、確かに貧困という現実は目の当たりにしたが、17年前の虐殺から立ち上がり、力強く発展している国であった。産業の90%が農業であるため都市部から少し離れると、「千の丘の国」といわれるように畑や森が広がり緑はとても美しかった。ホームステイの家族をはじめ、出会った人々はみなホスピタリティあふれる心を持っていた。

JICA ルワンダ事務所の小林所長さんをはじめ、職員および協力隊員の方々には、忙しい中私たちの研修のために細かい配慮をしていただき、大変感謝している。海外で活動されるということは、私たちにはわからない苦勞もたくさんあると思うが、ルワンダの国づくりのために、現地の方々とともに活動する姿に感銘をおぼえた。

## 2 今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

今回の研修に際して、次の3点について主眼をおいた。

1点目は、1994年の虐殺により国家が壊滅的打撃を受けたにも関わらず、その後17年という短い期間に「アフリカの奇跡」と呼ばれるほどの経済成長を遂げた背景には何があったのかをシンガポールでの研修を参考にしながらさぐることである。

2点目は、ルワンダに暮らす人々の生活に触れ、自分たちの生活を見直すきっかけにすることである。ホームステイなどを通じて、言葉や宗教、文化の違うシンガポール、ルワンダの人々の生活にふれ、異文化を体験することで教室での異文化理解教育、開発教育に役立てたいと考えた。

3点目は、日本の国際貢献の実態について、自分の目で確かめることである。日本にとってODAは、国際貢献の主要な手段である。ルワンダでODAに関わる仕事をしている協力隊員の活動の様子を知ること、開発途上国が求める国際協力について自分の目で確かめたいと思った。

## 3 視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

アフリカで最大の人口密度を有するルワンダは、資源が乏しいため、人的資源を豊富にしていくことが経済成長や社会の安定に不可欠であることや、近代化が進む首都のキガリと地方では経済格差が拡大する傾向にあり、発展が遅れている地方を支援することが絶対的貧困層削減に効果的であること、経済成長を続けるに当たり、経済インフラは不可欠であるが多額の資金を必要とするため、日本をはじめ外国の援助が必要であることなどが今回の視察を通して学ぶことができた。

また、今回の視察を通して、距離的には遠いがルワンダを身近な国として感じられるようになった。

アフリカの国々に関する新聞の記事やニュース番組等を以前よりも興味関心をもって見るようになった。ルワンダで出会った人たちが日本に対してあこがれや目標にしていることが肌で感じた。この研修を通して、勤勉で努力する日本人像は、ルワンダの国づくりのために熱心に活動する JICA の職員や隊員の活動によるところが大きいのではないかと感じている。

キガリの虐殺記念館での記述がツチ族側の立場で書かれている部分が多かったのが気になった。ルワンダ政府が、ツチ、フツの存在を超えて、「ルワンダ人」という統一されたアイデンティティを共有するための取り組みが学校教育のカリキュラムの中に位置付いているのかを調べてみたい。(高橋専門家は、20歳になると合宿してルワンダ人としての市民教育を行っていると話されていたが…) また、ルワンダ愛国戦線が、コンゴなどでおこなったフツ族に対する虐殺は、今後どう総括されるのかフランスとの関係をたどりながら調べてみたいと思った。

現在ルワンダは ICT 国家を目指しているが、その実現は本当に可能なのだろうか。農業が産業の中心のルワンダが、工業化の段階を経ずしていきなり ICT 国家になり得るのだろうか疑問が残る。SMASSE 教員研修やトゥンバ高等技術専門学校を視察したが、技術者を育成するため環境整備はまだ不足していると感じたし、そもそも高等教育を受ける人材が少なすぎるのではないだろうか。また、内陸国であるディメリットや首都キガリに限っても電力の供給が不足しているなどインフラ整備も不十分のように感じた。カガメ大統領の強いリーダーシップで「アフリカの奇跡」と呼ばれるほどの経済成長を遂げたルワンダだが、そのカガメ大統領も今限りで大統領を退かなければならない。ICT 産業による国家づくりをめざす「Vision2020」がはたして実現するのか、ルワンダの今後に注目していきたい。

#### 4 教育指導への活用について

私は、中学校で社会科を教えているが、子どもたちに社会科は、「人間」を学ぶ教科であると常々話している。社会科の授業を通して、人間の「生きざま」に共感できる人間になってほしいと願っている。今回の研修で出会った、協力隊員やルワンダに暮らす人々のおもいや願いを教材として取り上げることによって、生徒自身の在り方や生き方を見つめ直すきっかけにしたいと考えている。

中学校社会科で今回の研修を取り上げることでできる分野としては、地理的分野と公民的分野がある。

地理的分野の単元「世界の諸地域」では、新学習指導要領は「各州に暮らす人々の生活の様子を的確に把握できる地理的事象を取り上げ、それを基に主題を設けて、それぞれの州の地域的特色理解させる」と、主題をもうけた学習するように述べている。「アフリカ州を大観」させたあと、ルワンダについて「主題をもうけて追求」という形がとれるのではないかと考える。しかし、困ったことは、来年度でないと新指導要領に沿った新しい教科書が手に入らないということである。

今年度、先行学習するには、現状の地図帳や資料を活用しながら、今回シンガポールやルワンダで得た資料を織り交ぜながら取り組む必要がある。

社会の公民的分野の大単元「私たちと国際社会の諸問題」は、国際政治、国際経済の基礎・基本について学ぶことができる単元である。地球上の様々な諸問題を多面的・多角的につかむことをねらいとしている。民族間の対立から生じる地域紛争や難民問題、文化の多様性や貧困問題などをアフリカやルワンダの現状と結びつけて学ぶことができるのではないかと考える。学習指導要領解説に「文化や宗教、民族などの違い、経済格差などの様々な要因によって地域紛争などが多発していることを認識させ

と述べられているように、今回、地域紛争等の要因を文化や宗教、民族の違いから対立につながる様子を生徒に追求させることが可能になった。ルワンダでの民族対立から生じた虐殺事件を植民地支配の歴史からひもといていくことも可能ではないだろうか。また、同単元の中で学習する国際協力は、国際化が進むこれからの日本を担う生徒にとって重要な内容である。新学習指導要領では、「…我が国の安全と防衛及び国際貢献について考えさせるとともに、…世界平和を確立するための熱意と協力の態度を育てる。また、地球環境、資源・エネルギー、貧困などの課題の解決のために経済的、技術的な協力などが大切であることを理解させる。」とある。「世界平和のために」という小単元で日本の国際貢献について学ぶようになってきているが、ルワンダの国づくりのために活動する JICA 職員や協力隊員の活動の様子をここでくわしく紹介できるのではないだろうか。ルワンダでの具体的な青年海外協力隊の活動を紹介するとともに、「必要とされる援助とは何か」について考察させたい。

## 5 JICA に対する要望・提言

JICA の専門家の方や青年海外協力隊隊員の活動視察を中心に、在ルワンダ日本国大使館、虐殺記念館やスーパーマーケット視察、ホームステイ・・・と、個人の旅行では訪問できない所も多く、貴重な研修内容だった。さらに、JICA 事務所職員の方の同行は、車中や食事中に生きたルワンダの情報をお聞きすることができ、貴重な情報を提供して頂いただけでなく、旅に抱いていた不安を解消してくれる存在であった。

ただ、今回訪問した時期が、学校の長期休みにあたっており、子どもたちの授業風景を視察できなかったのが残念であった。

チーム「ルワンダ」のメンバーは、それぞれの分野ですばらしい実践を積んでいる人たちばかりで、お話をしても話題が尽きない、私自身学ぶことの多い方々でした。このような得難い仲間達に出会え、時間を共有できたことに感謝の念で一杯である。特に同行者としてお世話頂いた桜井さん、西川さんには感謝したい。また、今回アドバンスコース参加の機会を与えていただいた JICA 九州村岡所長をはじめ竹川さん他職員の皆様に、心から感謝申し上げます。

## 6 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
8月1日(月)	シンガポール ・ テマセック <sup>o</sup> リテクニク ・ SCE ・ リークウアン <sup>u</sup> -公共政策大学院 (大岩 JICA 代表)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東南アジアの小国ながらめざましい経済発展をとげたシンガポール。高層ビルや港に停泊するコンテナ船の数の多さにこの地がアジアにおける金融・物流の中心であることを実感させられた。</li> <li>・ テマセック・ポリテクニクの説明では、シンガポールで3番目のポリテクニクとして1990年に創立され、現在約15000人もの学生が通っているという。セントーサ島のツーリズムアカデミーを含む7つのス</li> </ul>

日 時	訪 問 先	所 感
		<p>クールを開いており、日本の高専のイメージとは少しかけ離れていた。シンガポールの教育システムについては、大変興味をもった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ SCE での説明によると、2006年に政府直轄の Singapore Cooperation Enterprise (SCE) という組織を立ち上げて、国内で培ってきた都市マネジメントモデルを都市化の進む発展途上国に売り込んでいるという。ルワンダでは、公共セクター能力向上、社会保障基金改革、空港開発アドバイザー、都市マスタープラン作成を支援しているという。戦略的な都市計画により目覚ましい発展を遂げたシンガポールのビジネスモデルが途上国で商売になることに驚いた。</li> <li>・ リークァンユー公共政策大学院で大岩 JICA 代表からシンガポールと日本の協力関係の歴史や第三国研修を中心に JICA 事業概要の説明を受ける。シンガポールでの日本の支援が開発途上国の支援に生かされている実態を知る。また、リークァンユー公共政策大学院は東京大学公共政策大学院の間で、ダブル・ディグリー制を導入しており、国際性を身につけた人材の育成を図っているという。留学先で学んだ学生が、将来、留学先の国・地域での活躍の可能性を広げると期待される。</li> </ul>
8月3日(水)	<p>ルワンダ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ JICA ルワンダ事務所 (小林所長)</li> <li>・ キガリメモリアルサイト</li> <li>・ JICA 事務所スタッフと懇親会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ホテルの窓から見るルワンダの風景は緑豊かな自然の美しい国だった。接する人々も明るく気さくで親切である。しかし、街中いたるところで自動小銃か担いだ軍人や警察官を見かける。ルワンダの国情を改めて理解する。</li> <li>・ 小林所長のあいさつのあと「JICA のルワンダ支援の現状について」と題してルワンダにおける JICA の事業概要の説明がある。1994年の紛争後、目覚ましい復興を遂げているルワンダを支援するため2004年以降本格的な二国間協力を再開し、2005年に首都のキガリにルワンダ駐在員事務所を</li> </ul>

日 時	訪 問 先	所 感
		<p>開設した。現在事務所は総勢 30 名ほどで運営されていると説明がある。その後、瀧本さんよりルワンダでの安全情報について説明がある。体調管理に気をつけるように説明をうける。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・キガリメモリアルサイトを見学した。展示内容は 1994 年に起きたジェノサイドに関連した写真や映像が中心であった。100 年前の歴史の過ちといえは理解できなくもないが、これはほんの 17 年前の出来事である。2 階にあった子どもの写真を展示していた部屋には、殺された子どもたちの名前や生前どんな食べ物が好きだったとか誰と仲良かったとか、どうして亡くなったのかが書いてあった。突然未来を奪われた子どもたちを思うと心が痛くなってしまった。恨みが絡めば人間こんなにも残酷なことをやってのけるものかと恐ろしくもなった。</li> </ul>
8 月 4 日 (木)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本大使館表敬訪問 畑中大使と懇談</li> <li>・ REACH アクティビティについての説明 NGO 佐々木和之</li> <li>・ SMASSE 教員研修の様子を視察</li> <li>・ SMASSE についての説明 高橋専門員</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本大使館を表敬訪問。畑中大使のお話を聞かせていただいた。大使としてルワンダに住んで感じていること、大使としての仕事などを伺った。大変気さくな方で、予定時間を過ぎても丁寧に質問に答えていただいた。</li> <li>・ 現地 NGO である REACH の一員として活動を始めた佐々木さんの取り組みの説明をうける。 REACH は、虐殺の被害者・遺族と加害者の和解を働きかけている団体で、佐々木さんの発案によって加害者が被害者のために家を造る、という償いのプロジェクトが進めている。 佐々木さんの言う、加害者がセミナーを通して謝罪の思いを深めつつ、被害者家族のために家造りに取り組む「修復的正義」による和解の取り組みは、いまだに復讐的要素の濃い死刑制度を残す日本国民が理解するのは難しいと感じる。ルワンダ人には、神による赦しを説くキリスト教的の思想が根底にあるからこそ取り組めるのではないだろうか。</li> </ul>

日 時	訪 問 先	所 感
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ルワンダでの理数科教育の現状を知るため、先生方の研修の様子を視察させていただきました。長期の休みの時期を利用して、ルワンダ SUMSSE（中等理数科教育教科計画プロジェクト）では理数科教員を対象に指導力をあげるための研修を行っている。この時期、全国でこのような研修が行われているという。中学校を卒業しただけで教員になる人も多く、教員の質を上げるためにも教員研修は欠かせないという。産業発展に必要な科学的知識、技術を持った人材育成のために理数科教育に特に力を入れている様子がわかった。物質の燃焼実験など生徒に興味関心を抱かせるような授業の工夫がなされていた。</li> <li>・ 高橋さんより、ルワンダにおける理数科教育の現状について説明を受ける。開発途上国では、産業発展に必要な科学的知識、技術を持った人材の育成のため理数科教育支援へのニーズは大変高いものがある。日本では、教員養成課程から現職教員研修まで継続的、かつ段階的に教師の能力向上を支援する仕組みがあるが、ルワンダをはじめとして、アフリカの多くの国では、教師の教科知識や授業実践能力の不足を補う研修が整備されていないという説明があった。高橋さんの話の中で、ルワンダの理数科教育の問題点として、教員の給与の低さと、そのために有能な人材が教育界に残らないという指摘があった。質の高い教師を育成するためには、給与面を含めて教師の待遇改善を図るべきだと感じた。</li> </ul>
8月5日（金）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ トウンバ高等技術専門学校（TCT）の視察</li> <li>・ TCT キガリキャンパス視察</li> <li>・ ECOPD について説明 瀬能専門員</li> <li>・ JICA 青年海外協力隊員と懇親会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ キガリより2時間バスに揺られ、トウンバ高等技術専門学校を訪問する。同校は、短大レベルの高等技術専門学校として、2007年8月首都キガリの北西約30kmのルリンド県トウンバに開校したもので、産業・社会のニーズに合致した実践的な教育機関を志向している。同校には、情報通信。電子通信、代替エネルギーの3コースの学科があり、JICA から3名の技術者が派遣されていた。情報通信の授業を見学させても</li> </ul>

日時	訪問先	所感
		<p>らったが、ルワンダで需要の高いネットワーク分野に日本の技術援助が役立っていると実感した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ JICA 事務所で「障害を持つ元戦闘員と障害者の社会復帰のための技能訓練及び就労支援プロジェクト」について説明を受ける。ルワンダでは、長年にわたる内戦及び 1994 年の大虐殺やコンゴ民主共和国 (DRC) 等近隣国との紛争にかかわった兵士の動員解除及び帰還の推進を進めてきている。説明によると、元戦闘員には、主にツチ族で構成される国軍兵士のみならず、1994 年以前の旧政府軍兵士と 1994 年以降ルワンダ国外で武装活動をしている民兵も対象としているという。敵味方で戦ったもの同士を同じ環境で技能訓練を行ってきたこと、1994 年の大虐殺により障がいを負った一般市民も多数存在することを聴き、ルワンダの国民が経験した戦争の傷跡がいまだに癒やされることなく心や身体を苦しめていることを知った。このプロジェクトがうまくいけば、国民和解の促進につながると感じた。</li> </ul>
8 月 6 日 (土)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Nyamata メモリアルサイト視察</li> <li>・ ホームステイ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ キガリからバスで 30 分ほど行った小さな村に、虐殺現場となった教会が残されていた。教会内の壁や天井に広がる無数の銃弾や血の付いた積み重なる大量の衣類。教会の中のいたるところに、当時の状況そのままを残していた。地下に続く墓室には、一人が歩ける位の幅の狭い空間に人骨が、キレイに整然と積み上げられていた。どうすることもできなくて、最後に教会に逃げ込み、そして殺されていった人々の気持ちを思うと苦しくてたまらなくなった。民族対立はここまで人間を狂気にするのかと、心をえぐられる思いだった。</li> <li>・ 午後は、キガリに戻り、そこから 3 つのグループに分かれて一泊二日のホームステイに参加した。私たちのグループは、Kayonza Secondary School の校長先生である Mr. Rwamurangwa Stephen の家庭に</li> </ul>



日 時	訪 問 先	所 感
		<p>ホームステイすることになった。子どもは5人で配偶者である奥さんは Kayonza 市の市議員を2期務めているという。日本車を2台保有し、使用人も10人近くいる典型的なこの国の富裕層である。早めの夕食をとった後、近くの教会に連れていってもらった。プロテスタント系の教会で、自分が持っていたキリスト教会のイメージとは違っていた。キガリから来た伝道師の言葉の意味はよくわからなかったが、彼女の一言に聴衆は熱狂していた。その後、歌あり踊りあり聴衆の一体感は驚きであった。</p>
8月7日(日)	・ ホームステイ	<p>・ ホームステイの2日目、朝食の前に子どもたちと折り紙を折って遊んだ。一枚の紙から鶴やキリンといった動物を作り出す様子に、校長先生であるお父さんは興味を示していた。朝食後、飼育している乳牛をみせてもらった。牛を飼うことは、豊かさの象徴であるという。ルワンダ政府が進めている“One Cow One Family Project”が実施されており、牛を飼育する専門の使用人がいた。改めてこの国の持つ経済格差を見た気がした。その後、昨夜に引き続いて教会へ連れて行ってもらった。ウーマンズウィークの最終日で、昨夜同様教会内は超満員であった。熱心に伝道師の言葉をメモする人たちの姿が印象的だった。教会が地域のコミュニティ中心であり、社会教育の場であるということがよくわかった。次に、お父さんが校長を務める全寮制の Kayonza Secondary School を見学させてもらった。この学校は、日本政府の援助で設立されており、現在もアメリカをはじめ外国の援助を受けて教育環境の整備が進んでいた。学校は長期の休みに入っていたため授業の様子は見学することはできなかったが、教育環境の整った学校の様子をつぶさに見学することができた。</p>

日 時	訪 問 先	所 感
8月8日(月)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Nynza Royal Palace Heritage 見学</li> <li>・ ECOPD 視察</li> <li>・ 「仕事ノアル暮らし」 工房の視察</li> <li>・ JICA 関係者と懇親会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 早朝、昔の首都があったニャンザに向かう。王宮として建設された建物が現在はルウェセロ美術館として公開されていた。ニャンザ王宮には栄華を誇った王国の宮殿や王国時代の貴重な遺物が残されていた。遊牧民のフツ族による王国らしく、原種に近い種の雌牛を飼っていた。日本では見ない立派な角が生えた牛であった。</li> <li>・ ニャンザにある「障害を持つ元戦闘員と障害者の社会復帰のための技能訓練及び就労支援プロジェクト」の現場を視察した。ここは JICA が支援している 4カ所の訓練センターの1つであり、協力隊員1名が派遣されていた。シルクスクリーン、機織り、煉瓦組み、溶接、縫製、木工、水道管工事のコースがあり、所長さんと専門員の原田さん、そして協力隊員の佐藤さんが各コースの様子を丁寧に説明していただいた。訓練を受けただけでは、就労につながりにくいので共同組合を設立して雇用を創出している。この国では、一般の人たちも雇用の機会が限られている中で、就労支援を行っていくことの難しさを感じた。また、2011年2月より開始されたが、一般障がい者への支援体制は整っておらず、プロジェクトが円滑に実施され、除隊兵士のみの場合と同様の成果を上げることができるか注視していく必要がある。</li> <li>・ 「仕事ノアル暮らし」工房を視察する。ここは、ルワンダ協力隊 OG の加藤悦子さんが現地のストリートチルドレンの自立支援のため、作った工房である。加藤さんから工房の様子について、事前研修で直接お話を伺っていたので、牛の角を加工する様子をじっくり見学させてもらった。商品の品質管理を徹底させることや日本での販路の開拓など困難の中で、ストリートチルドレンを支援し続けている加藤さんの生き方に大変興味を覚えた。</li> </ul>

日 時	訪 問 先	所 感
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ JICA ルワンダ事務所の職員の方や専門家と有意義な話ができた。海外で生活する大変さや JICA に応募したきっかけを聞き、自分の生き方あり方を振り返ることのできた時間であった。</li> </ul>
8月9日(火)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ JICA ルワンダ事務所 (小林所長)</li> <li>・ キガリ発</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ルワンダでの最終日、JICA ルワンダ事務所で視察の報告会を行う。印象深かったことなどの感想や、実践授業にどのように活用していくかなどを報告する。忙しい業務の中、私たちの研修視察に便宜を図っていただいた JICA ルワンダ事務所の小林所長を始めスタッフのみなさんに感謝している。</li> </ul>

学 校 名

福岡県立福岡高等学校

氏 名

鹿 野 敬 文

## 1 今回の現地研修全体に関する所感

非常によく練られたプログラムでした。各訪問先で教えて頂いた内容を振り返ったり、頂いた資料を読み返したりすることで、ルワンダと日本との多面的・重層的な関わりが更に深く理解出来るようになりました。

研修プログラム自体の素晴らしさに加え、参加された先生方の考え・教育理念が深く、またそれが豊かな教育経験に裏打ちされていたため、足が地に着いた実のある研修となりました。様々な機会に各先生方から教えて頂いた内容は、今後、私が国際理解教育・グローバル教育を推進するにあたって役に立つことばかりでした。有難いことだと感謝しております。

## 2 研修参加に際してのねらい

今後、教育現場では「キャリア教育的な国際理解教育」が進め易いのではないかと考え、現地では出会う方々(今回の研修では、海外で活躍されている多くの日本人に会えました)に、「これまでの人生」「人生の分岐点」「これからの人生」などについての話を積極的にうかがうようにしました。勿論、参加された先生方にもこれらのことをうかがいました。

その中でも特に印象に残ったのが、Chez Lando Hotelで偶々出会ったオーガニック・ソリューション(現地の日系法人)の吉村さんの話と、JICA ルワンダ事務所の方々の話でした。手前みそになりますが、こういった方向で国際理解教育を進めていくのが効果的だということは、参加された先生方にも理解していただいたのではないかと思います。

## 3 現地研修についての気付き・疑問

- ① 高島先生が一貫して「JICA 九州への高いレベルの提言」を主張されていたので、研修目的に大きなぶれはなかったと思います。でなければ、一回目の研修と同じような「実践のための教材収集旅行」レベルで終わっていたことでしょう。
- ② 工業関係の先生が2人いらっしまったため、JICA の供与技術のレベルなどについてより深く理解することが出来ました。これに加え、もし農業関係や水産関係の先生方が参加されていたら、我々の理解は更に深まったのではないかと思います。
- ③ JICA が行う「教師海外研修」(特にアドバンスコース)のファシリテーターとしては、元商社員、元外交官、元 JICA 職員の様な海外経験の豊かな人、或いは、教育現場のツボを十分理解している人(自らの経験を通して「ここをこう押すと国際理解教育はうまくいく」といったことに熟知している教員)がいいと思います。

## 4 JICA に対する提案・要望

- ① 「キャリア教育としての国際理解教育」「道德教育としての国際理解教育」に関する勉強会を立ち上げられたら如何でしょうか。これらは、これまでにないアプローチです。
- ② 教員志望の大学生や農・工学系の大学生を対象に、短期間の「青年海外協力隊『丁稚隊』」制度を設けてみてはどうでしょうか。出発前と帰国後に、元協力隊員などによる研修を行えば効果は更に上がると思います。「degree より実力」といった学生集めの宣伝戦略・差別化戦略のため、参加を希望する大学は多いでしょう。
- ③ JAMSTEC (海洋研究開発機構) が行っている「サイエンスカフェ」のような『国際人養成カフェ』のようなものを企画されてはどうでしょうか。
- ④ 「国際理解教育学会」や「異文化間教育学会」や「グローバル教育学会」とは全く違ったアプローチの『JICA 教員研修大会』を定期的開催されてはどうでしょうか。それに加え、各学校に JRC 部やユネスコ部、インターアクト部の様な『JICA 部』を作ってみてはどうでしょうか。

## 5 各研修先の所感

- ① シンガポールのポリテク・SCE・リークワンユー大学院で学んだことは、ルワンダ訪問 (Tumba College of Technology など) の後にもう一度振り返ることで、更に理解が深まりました。それとは別になりますが、SCE での「中国の指導者とは頻繁に会って話し合っている」との発言、リークワンユー大学院での「ここはアジアの人脈を作れる国の財産」との発言には考えさせられました。
- ② JICA でのブリーフィングは、JICA がルワンダで行っている事業の特徴を理解する上で大変役に立ちました。現地研修では、現任校 (福岡高校) が協力している Strengthening Mathematics and Science in Secondary Education の訪問がとても参考になりました。
- ③ ジェノサイド関連の施設 (Gisozi Memorial Site, Hotel Mille Colines, Nyamata Memorial) 訪問は、個人的な関心 (私の専門が国際法、特に「戦時国際法」や「国際人道法」) があったため楽しみにしていました。ジェノサイドについては、更に勉強したいと思います。特に、タンザニアでの国際刑事裁判所の判決文は是非読んでみたいと考えています。
- ④ ホームステイに関して言えば、以前のマラウイ訪問の時より良かったです。と言うのも、泊まったのが修道院だったため、普段経験が出来ないことばかり経験したからです。校長でもあるブラザーが地域の人々から如何に慕われ頼られているのかが、一緒に町を歩いてみてよくわかりました。「いい人生をおくられているな。」と思いました。また、ブラザーが、ジェノサイドの被害者を “our friends” と表現されていたのがとても印象に残りました。

学 校 名

宮崎県立延岡工業高等学校 校長

氏 名

富 山 隆 志

## 1 今回の現地研修全体に関する所感

アフリカのスイスと言われるルワンダは時間が止まっているように思えた。水、道路、電気などの多くは整備されていない。都市部が経済成長を続けているという印象を受けた。電気の普及率は低い。都市部は警察や軍が10メートル間隔に立っていた。銃と無線機を持ち一日中警備する姿に緊張感を覚えた。

国境を接する幹線道路の警備は緩やかだった。多くの国と接するのに不思議だった。最貧国でありながら、ストリートチルドレンや物乞いする人の姿はほとんど見受けなかった。自給自足の生活が出来るからか。国の政策か。不思議であった。平和の大切さ重さを省みる機会になった。特に genocide は多くの人々に、今も体や心に深い傷跡を残していることを意識した。無線通信網の整備は進んでいた。鉄塔とアンテナ群、発電機から推察出来た。

テレビは政府系一局しかなかった。果物など食材は豊富にあり餓死することはないように思えた。アフリカの中ではキリスト教徒が多いと感じた。文化、宗教、民族との間で教育の役割は重要だと感じた。

モバイルネット接続用 WiFi や携帯電話網は確立していた。スマートフォン、ブラックベリーなど PC 搭載携帯のコピーが普及していたのに驚きを感じた。

内戦や紛争による対立を乗り越える努力は見受けられだが、融和に向けて教育の中で、どんに取り組みがなされているのかが気がかりだった。尋ねることが難しかった。

## 2 研修参加に際してのねらい

下記の4点について国際理解、開発教育の視点から具体的目標を決めて参加した。

### (1) 「アジアの成功をルワンダに」をつぶさに見る

具体的なものを見聞することは出来なかった。理科系の教員のスキルアップ養成講座 SMASSE は興味深いものがあった。特に生徒を中心に据えた教育が行われていた。問題発見、問題解決のための分析、理論構築し証明する。それらを班別に協議していた。これらが基礎講座のまとめとして行われていた。教科書や指導書はなかった。普段の身の回りにある不思議な現象を題材に取り上げていた。

燃えない方法を考えさせ、なぜ、ロウソクに触れた紙は燃えないのかを導き出す。帰納法、演繹法の大切さを学ぶ機会になった。OECD が教育で大事にしている読解力、思考力、創造力を高める教育が行われていた。

IT の普及と教育に力を入れ始めている TCT を見学した。IT の普及は、世界の潮流に乗るためには必要不可欠だが、これがルワンダの復興につながるとは思えなかった。もっと裾野の広い地域や、貧しい人々の教育に力を入れていく必要を感じた。電気の普及率が10%も満たない国家では、IT 教育ではなく、貧しくても、人々が助け合い、平和で安心して暮らせる国と地域作りが必要だ

と感じた。地道な教育と地域の特性を活かした農畜産業の振興が国の復興の力になると感じた。

過去の歴史を乗り越え「平和で民主的な国家及び社会の形成者」を育成するには、すべての子ども達を対象にした早期教育が必要であろう。貧困からの脱却にはすべての人々の生活と暮らしを支える仕事と収入が必要である。そのための労働の場をルワンダの自然、地域性、農耕文化の特性の中で、産業の育成に結びつけて行く教育の役割は大事だと思う。そのための共同体、経営、流通の仕組みが確立されると良いと思った。人工都市国家シンガポール、日本をまねる必要はないように思えた。

## (2) 「IT 人材から IT を活用したモノづくり人材の育成」で私たちが出来ること

IT は世界の産業や経済活動の枠組みの中にある。IT を制する国が豊かになっていることも事実であろう。IT から何を産み出し育てるか。産業は裾野の広さで決まる。溶接、旋盤、塗装、板金、測量、金型、電気工事、木材加工、土木などの基礎基盤の技術と技能の上に成り立つ。裾野の産業の連鎖と環境の形成が大事だと思う。IT 技術はツールでしかない。IT から何を産み出すのか。そのモノづくりを鮮明にする必要があるだろう。基礎基盤の技能・技術者の育成が大事だと感じた。

TCT の Tumba 校と kigari 分校の現場を見学した。もし、これがルワンダの最先端の技術者、中堅技術者養成機関だとしたら、世界には追いつけないだろう。情報技術の革新は日々加速しており、その教育や技術の習得を国内で行うことは難しいと思う。

## (3) 「日本、中国、韓国、台湾、シンガポールのルワンダでの国際貢献」をつぶさに見る

中国は Kigari から Tumba に行く幹線道路を作っていた。Kigari、Kayonza、Nyanza、Tumba では中国の建物があった。韓国は Koica が積極的に入っていた。韓国の大学生インターンシップ制度があるのか？台湾とシンガポールについての具体的な内容は見られなかったが、本年 10 月、シンガポールの貿易展示会がルワンダ各地で開催されることになっていた。

## (4) 「日本企業、とりわけ本校卒業生の働く現場」をつぶさに見る

シンガポールに旭化成は 270 億円をかけて天然ゴム工場を建設中である。この建設現場か現地事務所に立ち寄り卒業生に会いたかった。

また、日立プラントが古い火力発電所を解体し新しい発電所を建設している。ここにも卒業生がおり会う機会を設けたかった。

## 3 研修を通しての気付きと疑問

平和は尊い。人の心の痛みが分かる感性が大事だとあらためて思った。心の痛みが分かる人がモノづくりをする必要があると思った。戦争や紛争の道具としてのモノづくりではなく、人や世の中を幸せにする技術やモノづくりが大事だと思った。シリア、リビア、イラク、アフガンでは紛争が続く。その道具は先進国が作っている事実を心に留めたい。

人はなぜ殺し合うのか。ホームステイで、レイモンド校長先生の言葉にルワンダの歴史的背景を感じた。

今、世界が求める人材とはどんな人か。細分化された技術の中でも広い視野、柔軟な心を持つ人材育成が必要だと思った。ルワンダの 10 年後 20 年後を描き、良い文化を根付かせるには何が必要か。

物質文化から平和と心の文化、欲望から未来に持続可能な文化への転換が必要だと感じた。

2000年の国連ミレニアム宣言の目標、貧困削減、教育、ジェンダー、保健医療、環境は改善しているのか？世界は舵を切ったはずだ。今、豊かさの代償として環境、平和、心を失っているように思う。自分たちと他の人々を認め合う文明の転換が必要な時代に入っているように思う。

どこの国でも教師のリードは大事。それで国は変わる。歴史も変わる。教師、教育をハンドブック化するのではなく創造力を磨く。人はカリキュラムであり、自分自身の身につけている力を自覚した機会であった。

教科の細分化ではなく総合力が身につくキャリア教育と国際理解教育の必要性も感じた。学校は人という製品を作る。通貨は上質に出来ていた。どこの国で作っているのだろうか？通貨の国策を感じた。

Rwamagana ファミリーでのホームステイは貴重な体験となった。セカンダリーハイスクールのレイモンド校長先生、奥様はKayonza 副市長、4人のお子様、13人のご親戚、2名のハウスキーパーがおられた。生活が困難な親類縁者をご自宅で面倒を見られる姿に感銘を受けた。レイモンド校長先生は休みがなく、年間を通して土日は教師を目指す若者に授業をしておられた。47才という若さ、ルワンダへの熱い思いを聞いた。ホームステイを受け入れるのは、はじめてであった。レイモンド校長先生、奥様共に我々と話がしたかった事がご様子で分かった。堰を切ったように会話が進んだ。わずか二日間であったが、お二人の豊富な知識、経験、高い志、熱い思いを感じた。お二人ともケニア、タンザニアの大学院を卒業されており、英語は堪能であった。様々な話が聞けた。

プロテスタント系教会に二日間で2回5時間滞在した。午前中Nyamata Memorial 教会のGenocideの現場を訪問していた。教会という清新な場所で大虐殺が起こった理由が結びついた。中ではウーマンウイークで行事が行われていた。国から派遣されてきた女性の伝道師が主としてミサ？セレモニーを取り仕切っていた。キンヤルアンダ語と時々英語が混じる。女性の自立を何度も何度も促す。

教会でのレイモンド校長先生との一問一答について話を要約する。

1963年、世界のキリスト教は「解放神学」に進んだ。解放とは自由だ。神はもっと広くて自由である。ミサの言語はラテン語から自由へと変革した。貧しい人々と共に抑圧から解放するために、教会は政治、経済にも介入するようになった。これが民族対立を生んだ。この変革の中で発生した。貧しい人々、豊かな人の対立が生まれた。現在は落ち着いている。政治はイエスの教えを守り、信仰と政治を区別し、信徒でも政治に参加できるようにした。無関心ではいけない。政治や国は変わらなければいけない。そのために教育は大事だ。解放の神学は人間の解放を意味する。

十字架はRestration 復活、Evangelical 福音、church 教会が壁にデザインされている。鳩が十字架に降りてくる。節理、運命、家族、平等を意味する。神様の前では平等で、すべての人々に聖霊が降りてくる。神の恵みを受けたら、その恵みを出し合い共有する。踊りが神様を讃美、神美する。演劇と演技は、みことばの祭儀。敵を愛する。十字架の下には聖書の一文がある。キンヤルワンダ語、フランス語、英語だ。数字は聖書のページと項目。この十字架と言葉がこの教会の理念。相手を受け入れられないとしても拒否はしない民族。この教会のことばは受け入れられている。教会、宗教を信じる者はお互いを受け入れ合う。

マザーテレサはヒンズー教に何度も迫害を受けた。それでも人を愛し続けた。いつしか受け入れられた。宗教が違ってもお互いの存在を受け入れ合う文化はルワンダにある。中国はこの人間教育を恐れた。信徒を追放した。EUは資本主義が重点。自分たちの文化を尊重しなかった。自分たちが図を



描き変えていった。これが国内の民族対立を生んだ。政治や宗教に無関心であってはならないと思っている。知識を身につけ教育は大事である。脳と指先のバランスをとる教育も必要だと思う。ルワンダの教育にそれがない。日本の教育に興味と関心がある。本校でもモノづくりのスキルアップを図りたい。折り紙の指導やモノづくり教育のカリキュラムを導入したい。日本の支援を期待している。学校に塀がない。これらも解決したい。

未来のルワンダを描くにはルワンダ一国では決められない状況にある。この国は多くの国々と接しており民族のストレスが多くある。我々はその中でどうしたらよいか悩んでいる。カガメ大統領の、ひと家族に一頭の牛を飼う政策は貧困の解消に役立っている。こんな政策が必要だ。後継者がどうなるかが課題だ。教育は民族の融和と国の復興にはなくてはならない。

#### 4 JICA に対する提案

- (1) 被爆対策専門員の育成。日本のモノづくりは危機に立つ。日本の教育界は放射能の専門的知識と技術者は少ない。被爆、原発の経験を世界に役立てる。
- (2) 教育関係の会議に JICA の関係者を参加させる。
- (3) 日本国内で実施するプロジェクトを教育機関参加型で企画・立案する。
- (4) 少子高齢化、世界は人口爆発、国際化・グローバル化、資源・環境、水、情報通信技術化など、回答のない難問の連続。世界のフロンティアリーダーになる JICA の理念「すべての人々が恩恵を受ける、ダイナミックな開発を進めます」の浸透。
- (5) 「KAIZEN」「MONODZUKURI」を世界のキーワードにするような活動を検討する。
- (6) 日本の地方は世界の先端にある。地方を活性化すれば世界に広がる。
- (7) 地方行政担当者、教員を JICA 海外事務所勤務させる。特に、行政は農工商観健を担う担当者、教員は将来の管理職候補者等。

#### 5 新学習指導要領に基づいた提案

- (1) キャリア教育の一領域に国際理解・開発教育を位置づける。
- (2) 道徳教育の中に「民主的な社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成・・・」  
この中に「自分たちと他の人々」を教育課程として入れる。外部講師を JICA で担うシステム化を図り教材集も作る。講師の人材育成はしばらく JICA が行う。
- (3) 筑波にある国立教育研究所の中に国際理解教育担当を置く。各県から小中高の教師を集め国際理解教育、開発教育の研修を行う。
- (4) 各県の教育研修センターが実施するプログラムの道徳教育の中に国際理解・開発教育を入れる。
- (5) 「就業やボランティアにかかわる体験的な学習の指導を適切に・・・」修学旅行や体験学習をモノづくりと国際理解・開発教育の領域を入れる。
- (6) 学校設定科目「国際理解・開発教育」を JICA と協力して独自に編さんする。
- (7) 偏差値と知識詰め込み方の高校・大学入試制度では、どんなにアカデミックに新学習指導が変わっても〇〇大学を頂点にした世界は変化しないと考えられる。東京大学が9月入学制度を作る。国

際化は進んでいるが、大学、高校での意識改革はこれからである。

当面、大学入試センター試験の、国語、外国語、地理、世界史、日本史、現代社会、政治・経済、数学の中に「国際理解・開発教育」の領域を入れるように働きかける。そのためには教科調査官、大学入試問題作成委員に JICA の理解者を入れる。

## ⑥ ま と め

シンガポール、ルワンダを訪問し人工国家のあり方について深く学ぶことが出来た。

高い経済成長を続けるシンガポールの勢いを感じた。GDP では日本と同じである。

ルワンダはアフリカの奇跡と呼ばれるにふさわしい国で、悲しい歴史を乗り越えようと、懸命に努力する姿を垣間見た。その中で人と人をつなぐ JICA の地道な活動に感銘を受けた。日本国が将来のアフリカの発展の礎になる可能性を感じた。

このプログラムにはなかったが、訪問に当たり日本の文化を紹介することを計画し準備して研修に臨んだ。NGO で日本の女性が「仕事のある暮らし」を推進しておられる。その方々の前でギターで「上を向いて歩こう」「ふるさと」を演奏しながら合唱した。「荒城の月」を尺八の演奏で合唱した。

さらに JICA ルワンダ事務所で現地スタッフの皆様方の前で「ふるさと」と西川さんをお願いして、アフリカへの思いを弾き語りで演奏して頂いた。

日本文化に少しでも触れて頂く良い機会になったと思う。ルワンダと日本の心が音楽とメロディーで歌と共に溶け込んだ一瞬でもあった。

このような貴重な体験と経験の機会を与えて頂いた JICA 九州所長をはじめ、関係者の皆様方、JICA シンガポール事務所、JICA. ルワンダの皆様方、急な要請に快く派遣に同意して頂いた宮崎県教育委員会に深謝したい。

学 校 名	福岡市立福翔高校
-------	----------

氏 名	八 田 智 弘
-----	---------

## 1 今回の現地研修全体に関する所感

個人ではなかなか行けないところばかりで、大変有意義な研修となった。シンガポールでは現地の教育システムの発達と効率性のレベルの高さに驚いた。このままだといつか、日本は抜かれてしまうと思った。(もう抜かれているかもしれない。)日本は全ての分野で硬直化が起きており、誰も責任を取りたくないのも変えずに1945年以降、同じことばかりを続けている気がしてならない。ルワンダで印象に残ったのは、障害を持つ元戦闘員の職業訓練所とホームステイだ。ホームステイ先の家族と行った教会では、この国の歴史を考えたとき、いろいろ感慨深いものがあった。また、ジェノサイドメモリアルでは、改めて、人と人が殺し合うことの惨さ、無意味さ、はかなさを思い知らされた。

## 2 研修参加に際しての狙い

シンガポールでは小国でありながら、世界に存在感を示し続ける国の秘訣を知ることで、ルワンダでは複雑な歴史からくる国をどうやって統合し、発展させていくかを見ることだった。上記の狙いは、研修の中で、解決された部分が大きかった。

## 3 現地研修に際しての気づき、疑問

ルワンダでキガリの町を一人でぶらぶらと歩きたかった。そうすれば、バスの窓から見えない、会議室では気づかない、何かを感じられたと思う。そういう時間がなかったのが、残念だった。

## 4 JICA に対する提案、要望

進学に重点を置いた高校の教師という立場でやれることは、個人として教科の授業の中で、または人権教育という授業の中で、自分の見たこと、感じたことを生徒に伝えていくことである。特別に国際理解教育という枠組みの中で、専門的に授業を行うことは正直にいうと難しい。普段の授業の中で、新学習指導要領に強く縛られながら、授業をしているわけではないので、新学習指導要領に基づく提案は、現場レベルでは分からない。

## 5 各訪問先の所感

### (場所) 障害を持つ元戦闘員と障害者の社会復帰のための技能訓練プロジェクト

ルワンダ政府は2007年に障害者支援のための法の制定がなされ、今まで無視されていたに等しい障害者支援に積極的に乗り出している。この法律はいわゆる大虐殺により、急速に増えた障害者(その60%は片足か両足がない)に対応するために作られた。ルワンダに職業訓練所は少なくないが、元戦闘員を受け入れる施設はまだ多くない。彼らを受け入れるには入所前に入念なカウンセリング

セッションのようなものが手で手間がかかり、まだまだシステムとして完全に確立したとは言い難いようだ。それでも JICA が支援するこのプロジェクトの意義は単なる就労支援という以上にとてつもなく大きい。以前、敵、味方として殺し合った者達が、一般市民と一緒に教室を分かち合い、懸命に技能を習得しようとしている。足がない者、胸に弾丸が入ったままの者、指がない者。それぞれがそれぞれの悲しみとやるせなさを背負ったまま、明日に向かって何とか技能を身につけようとしている。かつて、世界の中で、このような施設が存在したのだろうか？ 彼らのその空間こそが、「アフリカの奇蹟」だと思った。そして、彼らが今後そこで費やしていく時間は、そのまま新しい世界の 1 ページとなるような気がした。

学 校 名

大分県立大分東高等学校

氏 名

廣 川 由 美

## 1 全体に関する所感

係ではない私のところへ JICA からの文書が届かなくなって、もう 6 年になる。2011 年 5 月 25 日、サーモンキャンペーンでお招きした山本氏と川崎氏による全校行事の国際理解教育講演会を終えて職員室に戻った時、この研修の案内が直接私の手元に届いたお陰で、参加が実現した。JICA 教師海外研修（アドバンスコース）に関して、主催の JICA 九州職員の皆様をはじめ、ルワンダ駐在員事務所の方々、東北ブロック、今回の参加者、研修参加を快諾していただいた職場の先生方に大変感謝している。

JICA 本部が主催した 2003 年教師海外研修では、四国九州ブロックのメンバーでタイ王国を訪問した。今回は、九州ブロックのみの教職員 9 名が、全国初のアドバンスコースで「持続発展教育や、国際理解教育、道徳教育などの促進にあたる指導者の育成」を目的として派遣された。研修に参加して感じたことを、以下に三点まとめている。

第一に、関連性のある 2 つの国を同時に訪問することで、両国と日本を比較しながら、国家開発の経過について深く学ぶことが出来たと感じている。敗戦後、外国から支援を受けて経済発展を遂げた日本の今年の経済成長率は 0.4% である。かつて日本が支援していたシンガポールは、今年の経済成長率が 14.5% であり、経済、教育、学術研究の場、水ビジネスなど、アジアの中心を目指して発展を続けている。そして、シンガポールが現在支援しているルワンダの今年の経済成長率は 7~8%。カガメ大統領は、大虐殺の後、強力なリーダーシップを発揮し、政治の方向性を明確に指し示すことによって、たった 15 年余りで社会の安定と経済発展を実現している。「小さな国で、資源もなく、人口密度が高い」という共通点を持つ 3 つの国が、生き残りをかけて何をしているのか、タイ王国の訪問では見えなかったことである。また、南南協力や三角協力についても学ぶ機会となった。

第二に、研修をきっかけに、今後も継続的に考え続けるべき視点を与えられたと感じている。シンガポールとルワンダの研修を通して、「共生・開発のための政治のリーダーシップと教育の役割」「平和的国民の育成」というテーマを考えてきたが、難しいテーマであり、今後も考え続けていかねばならない。世界中が共存共栄するための国際協力、国家間の支援のあり方、国家の在り方、教育の在り方など、今回学んだ視点を参考にしながら、今後も考え続けていきたい。

最後に、国際理解教育に造詣の深い参加者ばかりだったので、研修中の情報交換が大変役に立った。ルワンダの情報が余りにも少なく出発前は不安だったが、移動中やミーティングの活発な情報交換のお陰で、充実したプログラムになった。十分に練られたプログラム構成であり、特にルワンダでのホームステイは貴重な経験だったと感じている。国内初のアドバンスコース参加者である以上、今後の教師海外研修のためにも、是非とも結果を伴う報告会を実現しなければならないと感じている。まずは、参加者全員で協力しながら、九州内の国際理解教育を広めること、そして全国へと発信できる報告会を考えていきたい。

## ② 研修に参加する時、自身で目的をどう設定したのか

私の研修参加の目的は、20年後の生徒の心に「恩送りの精神」を残すことである。例えば、水問題について学んだ生徒達が、節水を心掛けることによって、CO2排出量を減らして地球温暖化を少しでも防ぐことができたなら、遠くの沈みゆく国の人びとや、次世代を救うことになるかもしれない。私が研修で学び感じたことを生徒に伝えることによって、生徒がシンガポールとルワンダを身近な国と感じ、その国の人びとを思い浮かべながら行動できたなら「地球市民として物事を地球規模で考えて行動すること」が実践できる。生徒が「恩送りの精神」で一人ひとりにできることを実践できるように、水問題に焦点を絞って教材を作りたいと考えている。

## ③ 現地研修を通しての気づきと疑問

シンガポールについて、疑問が1点ある。シンガポールの教育システムでは、幼い頃から熾烈な競争社会であるにもかかわらず、日本のようないじめ、不登校、校内暴力などの問題がないという。なぜこのようなことが可能なのか。受験競争での敗者をつくり出す教育システムではなく、個別の能力を伸ばすためのストリーム制とアスピレーションについてもっと研究を進め、日本が学ぶべきシステムなのではないだろうか。

シンガポールとルワンダの英語教育について気づいたことがある。経済開発の戦略として英語教育を推進し、例えばシンガポール大統領は「英語教育が国民の宝」と表現している。ルワンダでは、2009年に全ての授業を英語で行い始めた。現実には小学校で英語の授業を実施することは無理だったため、翌年以降小学校は母語で、中学からは全ての教科を英語で学ぶ。日本に比べると、児童・生徒の全体的な英語のレベルは高い。テレビの国営番組では土曜日に数学、日曜日に英語の授業が放送され、ホームステイ先の子どもは番組を見ながら一生懸命勉強していた。内容は「話法の転換」で、小学校で履修する内容らしい。新学習指導要領の導入に伴い、小学校は評価を伴わない英語教育の開始、高校英語の授業は英語で教えるようになる。経済、文化、技術など、開発には多くの側面があるため、経済開発だけを目的とした英語教育の強化では偏りがあるが、地球市民としてのコミュニケーション能力を養う意味で、新学習指導要領が目指す日本の英語教育改革は大変重要である。両国の現状を生徒に伝えながら、日々の授業実践で、生徒の英語によるコミュニケーション能力を伸ばしていきたいと感じた。

最後に、今後の実践について研修中に感じたことを述べたい。私は「隣に外国人がいることが当たり前という意識を身につけること」「地球市民であると自覚すること」の2つの目的に絞って開発教育を実践してきた。知っている誰かのいる国、興味・関心のある国は、遠くのどこかではなく、身近で大切な国に変化し、「そこに英語でコミュニケーションをとりたい相手がいる。」時に、生徒の英語学習への意欲は最も高まると考え、留学生の受け入れには積極的に取り組んできた。留学生が帰国する際、ほとんどのクラスメイトが涙を流して別れを惜しむ。高校時代に顔と顔が見える交流で培われた友情は、大人になったとき「友だちがいる国と戦争はしない。」という気持ちにつながり、やがては世界平和につながって欲しいと考えている。長引く不況、3・11など日本の抱える問題は人びとの意識をますます内向きにさせ、「日本人総引きこもり」と言われている今日、相互依存している世界の現実へ目を向けることが必要である。そのきっかけ作りとして、私が生徒に伝えることによって、

生徒にとって遠くのどこかの国だったシンガポールとルワンダが、身近な国へと変容するよう努力していきたい。

## 4 JICA に対する提案

### 1. 成果を現場でどう活用することが可能か

「現場」のレベルを「学年」「学校全体」「大分県全体」という3段階に分けて、教師海外研修（アドバンスコース）の成果を活用した計画をまとめている。

この文章中に、国際理解教育と開発教育の両方が登場するため、便宜上、それぞれの定義を確認しておく。

財団法人埼玉国際交流協会では、国際理解教育を「だれもが平和で公正な世界を願っているが、私たちの住む地球は、戦争、貧困、開発、差別、人権、環境問題など様々な問題を抱え続けています。「国際理解教育」は、このような地球規模の課題に対し、(1)世界の現状を「知る」→(2)課題に「気づき考える」→(3)自分にできることを「実行する」というプロセスで学習に取り組む教育のことです。」と定義。

田中治彦氏は、開発教育を「21世紀に向けて私たちは貧困、南北格差、人口、資源、環境、民族対立などの地球規模で解決すべき多くの課題を抱えている。一方で文化、宗教、民族の多様性を尊重しながら、開発問題・南北問題を理解しその解決に向けて参加していく態度を養うのが開発教育である。」と定義。また、「国際理解教育は異文化理解や外国語教育のみではなく、人口、食料、環境、南北格差、国際的人権、民族対立といった課題の問題解決学習として捉えかえされる必要がある。言い換えれば、開発教育は平和教育、人権教育、環境教育と並んで地球的課題を扱う国際理解教育の一部に位置づけられるべきであり、またそのようにしなければ今後の国際理解教育の展望を拓くことはできないであろう。」と述べている。

この他にもさまざまな定義があるが、この文章では以上の定義を使っている。

#### (1) 学年での授業実践 ～ 2学期中

私が勤務している大分県立大分東高等学校には、県内唯一の国際コミュニケーション科（以下、国際科）がある。（残念ながら、高校で英語に関係した進路のみに絞るという特殊性から、国際科の希望者は年々減り、昨年末募集停止が確定した。）国際科の目標は「国際科時代に活躍できる人物になること」と「高度な『英語』のコミュニケーション能力を身に付ける努力をすること」である。3年間で「総合英語」「異文化理解」「英語理解」「コンピュータ・LL演習」「生活英語」「時事英語」「英語表現」の専門科目「英語」として授業が行われ、2年次から第二外国語「ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語」の授業が行われる。科独自の行事だった国際理解教育講演会は、2005年大分東高校へ転勤してすぐ、全校行事に変えて欲しいと私が要求し、既述のように、現在では学校行事として行われている。

私が担当している国際科3年生は、上記目標に則り、「読む」「聞く」「話す」「書く」の総合的表現力を伸ばすため、1年次の「総合英語」（「情報や相手の意向などを理解し、情報や考えなどを英語で伝える能力を伸ばすとともに、英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」授業）では、英文暗唱や「自分の好きなもの」というテーマの英語によるプレゼンテーションを行なった。2年次は、「コンピュータ・LL演習」（「コンピュータやLLなどを利用する

ことにより、理解力や表現力を高めながら、英語の総合的な運用能力の向上を図る」授業)で、「世界の水問題」と「日本が持つ水技術」というテーマで調査・研究し、意見をまとめて英語によるプレゼンテーションを行った。「世界の水問題」では、生徒が希望する地域を選んで、個人毎に国を決めて、その国が抱えている水問題をパワーポイントの画面でまとめ、説明を英語で行うという授業だった。「日本が持つ水技術」では、水道局が持つ技術、別府の温泉熱を利用した水技術、バーチャルウォーターについてパワーポイントの画面でまとめ、説明を英語で行うという授業だった。3年次の「英語理解」(「英語を通して情報や相手の意向などを理解する能力を一層伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」授業)で、シンガポールの水ビジネスや、ルワンダの水事情について、「読む」「聞く」「話す」「書く」の総合的表現力を伸ばすための教材作りをしたいと考えている。

国際科に加えて、普通科3年生でも国際理解教育につながる英語の授業を行いたい。今年度1学期初めにバーンガ、1学期末にはルワンダの紹介をした。国際科ほど詳細な実践は無理だが、英語Ⅱの授業で、英語の総合的表現力を伸ばすための水問題を扱いたいと考えている。

学年全体について、1年次には『世界がもし100人の村だったら』を扱い、2年次には留学生の受け入れと一部生徒とフェアトレードについて学び、計画的に国際理解教育に取り組んでいる。3年次は、水問題を中心に英語の授業で扱うが、系統的・発展的に行いたいと考えている。

## (2) 全校生徒への国際理解教育 ～ 12月

授業で担当している生徒だけを対象とするのではなく、全校生徒へと対象を広げたい。国際理解教育講演会と同じように、国際科独自の行事だった研究発表会を全校行事に変えて欲しいと私が要求し、2009年以降実現している。毎年12月、生徒が外国語のスピーチや研究発表を行っている。今年も私も発表し、3年生での授業実践を活かして、全校生徒で「校内の水問題」に関する国際理解教育を行いたいと考えている。

## (3) 大分県全体への発信 ～ 今後継続的に実施

大分県内全体への発信は、今後実現させるための努力目標であり、具体的な計画とは言えない。私案を二つまとめておく。

まず、大分県内の小・中・高の国際理解教育の実態調査を行いたい。理由は、大分県内で国際理解教育を効果的に広めるためには、実態分析が不可欠だと考えるからである。

7月3日事前研修最終日に「国際理解教育が九州で広がらない理由」について意見を出し合い、最も効果のある報告会にするための戦略について話し合った。ミーティングの度に時間をかけて話し合うのだが、具体的な分析やデータがないため、この論点でいつも紛糾し、最後まで案は決まらなかった。

現在、大分だけでなく、九州全体の国際理解教育の実態を把握するデータは皆無である。限られた人数とわずかな時間で、最も効果的な報告会を考え出すには、JICAがプロジェクトを計画する時と同じように、大分や九州全体が抱えている国際理解教育の課題を分析して絞込み、選択的・集中的に改善するためのアプローチを行うのが良いと考える。(ここからは提案で、九州全体のデータを集めるために、個人では限界があるため、JICA九州で実態調査を行えないか検討をお願いしたい。)

次に、大分県では、毎年10月に国際協力啓発月間で、沢山のイベントを行っている。5年前



の開会式で、本校生徒が JICA 実体験プログラムで作った開発プロジェクトを発表したことがある。様々な年齢層の方が参加していた。学校外に発信するには、この期間が良い。本研修を活かして何かできることがないか、川崎推進員に相談したい。

## 2. 新学習指導要領に基づいた提案

今回の改訂で、高校の外国語の指導について、何かの目的を達成するためにコミュニケーションが行われることを念頭において「的確に」「適切に」という文言が加えられている。「話す」「聞く」「読む」「書く」の4技能を統合してコミュニケーションの中で内容的にまとまりのある発信ができるようにすること、中学校での学習内容の確実な定着を図り、高等学校での学習に円滑に移行させるための学習機会を設けることの二点が、今回の改善のポイントとなっている。科目名は、コミュニケーション英語や英語表現などへと大幅に変わり、個人的には、国際科で行なわれてきた専門科目英語の授業の拡大と解釈している。

水問題という視点は、ESD（持続可能な開発）につながり、シンガポールの水ビジネスや、ルワンダの水事情について、「読む」「聞く」「話す」「書く」の総合的表現力を伸ばすための教材作りは、新学習指導要領の目指す英語教育に当てはまる。生徒同士が、英語で意見交換できる機会を増やすために、授業を工夫したい。

水問題については、本校ではまだ実施できていない教科横断的な授業（例えば、公民や家庭科との連携）が実現すれば、生徒にとってより深く学ぶ機会になるのではと考える。

## 5 各訪問先での所感

### 8/1 Temasek Polytechnic

日本の高専にあたるこの学校の施設・設備に驚いた。カリキュラムについて、産業界と話し合いながら、毎年少しずつ授業内容を変えたり、5年に1回はコースの見直しをすると聞いて、その柔軟性が経済発展の秘訣ではと感じた。シンガポールの教育システムには、日本が学ぶべきことが多いと思った。

#### SCE

カガメ大統領が2007年に初めてやって来て、2008年以降支援を続けていると言う。日本がかつてシンガポールを支援したように、現在はシンガポールがルワンダを支援している。経済成長率から考えれば、日本はシンガポールから学ぶべきことがあると思った。

#### リークワンユー公共政策大学院

アジアの中心として発展を続けるシンガポールが、学術研究、水ビジネスなど、先見の明をもった戦略的取り組みをしている。シンガポールブランドで、この大学院が世界的に認知されていることを考えれば、日本の取り組みの遅れを感じる。

### 8/3 JICA Rwanda Office

技術支援に限って支援するための、絞り込みと選択と集中の考え方、JICAのプランの立て方が参考になった。セキュリティ管理のため、警備員が門と扉ごとにいた。大統領官邸方向を見ることさえ許されないことに驚いた。今年7月数年ぶりにJICA九州を訪れて、セキュリティチェックシステムが導入されていることに驚いたことを思い出す。日本にいると忘れがちな安全管理について考えさせられた。

#### Gisozi Memorial Site

虐殺当時のことを語っているビデオが心に残った。なぜ残酷な虐殺が起きたのか、人間の恐ろしさを思い知らされる。子どもを壁に投げつけて殺害したり、家族の目の前で殺したり、当時の様子が展示に書かれていた。世界中の虐殺の歴史も展示されていた。虐殺の事実を忘れてはならないと感じた。

#### Nakumat Supermarket

キガリの都市の大きさに驚いていたが、日本のスーパーと全く同じようなスーパーの存在に驚いた。品揃えが豊富だった。レジはイギリスと似ていて、ベルトで商品を流すが、紙袋を見て、ルワンダであることを感じた。政策として、ビニール袋を使わないことになっている。環境問題に国家レベルで取り組むことの素晴らしさを感じた。

#### 8/4 Embassy of Japan

研修でなければ大使館に入ったり、初代ルワンダ大使にお会いする機会はないので、このような貴重な機会に恵まれたことに感謝している。ルワンダの概要について説明をしていただき、お話が大変分かりやすかった。

#### Reach's Activity

実際に REACH の活動を見学することはできなかったが、日本を遠く離れて、ルワンダで人間同士の和解のために活動をしている方がいることに驚いた。草の根からの平和構築というタイトルのお話だった。人間同士の対立を、どのように赦し、和解へと持っていくのか、そのお話は興味深かった。

#### Kigali Secondary School

ルワンダで唯一の学校訪問だった。補習に来ていた生徒を見かけることができた。この日の訪問では、教職員の研修を見た。英語と理数教育に力を入れているが、教職員不足から高卒で教員になっている人への研修だった。教育の充実には、まず教職員のレベルアップが必要である。ルワンダが目指そうとしていることが実現するまで、もう少し時間がかかりそうだ。

#### 8/5 Tumba College of Technology

道なき道を車で進み、たどり着いた山の頂上には、予想以上に大きな Tumba College があった。こんな山奥でも、虐殺があったと聞いた。建物も、虐殺の時に被害を受けたらしい。全国から集まった学生が、寮生活を送しながらパソコン技術を学んでいる。勉強には不便な場所のように感じていたが、学生にとっては勉強に集中できていいのかもしれない。ルワンダが力を注いでいる IT 分野の大学であり、施設が整っていた。

#### TCT Kigali Campus

Tumba College が山奥にあるため、首都で最先端の技術を取り入れたり、企業との連絡調整を行う事務所である。教室が2つあり、社会人向け授業を行なっている。

初日に宿泊したホテルの従業員は、観光学を学ぶために夜間大学で勉強していると聞いた。JICA 運転手も、夜間大学で学んでいるらしい。ルワンダは、勉強すればステップアップできる社会であり、特に奨励されているわけではないが社会人が夜間大学に通う例が多い。シンガポールでも、ポリテックで社会人向け夜間授業が行われていたように、産業と教育が連携した社会人向けの学びの場（日本にはあまりない）について考えさせられた。

## Hotel Mille Colins

『ホテルルワンダ』の映画で見たことを思い出しながら、あれほど残虐な行為が行われたホテルだとは信じられなかった。プールではが楽しそうに泳いでいる人、家族連れで宿泊に来た人など、穏やかな時が流れていた。

たった15年余で、対立していた人同士が、どうやって怒りや憎悪を静めて生活しているのか疑問である。REACHの活動支援が受けられない人もたくさんいるはずで、心にとるように折り合いをつけて暮らしているのかと思う。

## 8/6 Nyamata Memorial

組織的・計画的に行われた虐殺の様子について話を聞いた。ゴキブリという言葉を使って意図的に差別心を植え込み、武器を組織的に準備し、虐殺が起きた。後に殺害されたイタリア人女性のお陰で、1992年に放火から逃げてきた人びとが教会で助かった経緯があったため、1994年も沢山の人が教会にやって来たそうだ。

しかし、扉が爆破され、子どもが壁に投げつけられ、マリア像の目の前で多くの人が虐殺された。頭に傷を負った頭蓋骨の山、骨の山、服の山を見ながら、宗教では歯止めにならなかった差別心、人間の残虐さを思い知らされた。

## Homestay

虐殺で夫と子どもを失ったモニック、11歳の女の子ハミーダ、15歳の少年ダハイヨの家でホームステイした。協力隊員を何度か受け入れたことがある家庭で、我々の対応に慣れていた。前庭の地上と地下に水のタンク、裏庭は菜園で、バナナやパイナップル、ツリートマトなどがあり、家事は子どもが主に担当していた。小学校の先生2名が遊びに来ていて、一緒にExpo2011へ行った。沢山のテナントが並ぶ中、人ごみで呼吸ができなくなるほど混雑し、ルワンダの勢いを感じた。

近所の市場に行った。野菜や果物が並べられていた。英語はほとんど通じず、子どもたちが内容を通訳してくれた。写真を取られることは嫌がられ、写真を取るのならお金を払うよう言われた。

家の前にあるラジオ局を見学した。無料でアナウンサーが案内してくれた。写真は自由に撮ってよいと許可され、カガメ大統領が来て座った席に座ったり、放送機器に触れることができた。日本で放送局に行ったらと考えると、このような対応は考えられず、本当にいい機会に巡り合えたと感謝している。

我々に遠慮したのか、教会へは夕方行くと言っていたモニックさんは、日曜日の朝から着飾っていた。友人が教会帰りに立ち寄って話をしていた。部屋の随所にキリストの絵が飾られていて、宗教が生活に大きな影響を与えていることが伝わってきた。

国営番組で、土曜日は数学、日曜日は英語の授業が放送される。ダハイヨは番組を見て、一生懸命英語の復習をしていた。ハミーダとダハイヨの成績表やノートを見せてもらった。料理と片付け、掃除などそれぞれの分担があるようで、日本の子どもたちとは環境が違うが、真剣に勉強に取り組んでいることが伝わってきた。

ルワンダの人の暮らしを、ほんの一部だが経験できたことに感謝している。我々を歓迎して、踊ったり、踊りを教えていただいたり、民族衣装を見せていただいたりした。子どもたちは常に話しかけてくれた。見知らぬ国から来た人びとに、心を開いて接していただいたことが嬉しかった。

## 8/7 Nyanza Royal Palace Heritage

移動中、井戸か水道に水汲みに行く人びとを多く見かけた。水問題に関心があるので、大変興味深かった。

王宮では、ミルクの家、ビールの家、水牛などを見た。ビジターズハウスも訪問した。王朝時代のことを全く知らないなので、帰国後資料を読みたいと思った。

## ECOPD

織りもの・シルクスクリーン・溶接・建築の施設を見て回った。ここでルワンダでは対応が遅れがちだった障がい者への技術指導と、自立の支援を行なっている。訓練生はお互いに助け合っていて学んでいるということだった。見学中、庭でスポーツを楽しんでいる姿があり、仲良くやっていることが伝わってきた。昨年日本を訪問した所長は、障がい者への支援が遅れていること、まずバリアフリーの考え方を広めることからが必要だと説明した。JICAには、教員のトレーニングとプログラムの提示を希望している。

最終日の食後、記念品としてECOPDで作った手作りの袋をいただいた。施設を訪問した時のことを思い出しながら、大切に使っていきたいと思った。

## Shigoto no aru kurashi

住宅街の家に、Shigoto no aru kurashiの作業場があった。訪問したときは、コンクリートを打っていた。ここで働く人は、牛の角を加工することで得た収入から、自信を持つことができた。以前生徒と開発プロジェクトを考えた時、支援は時間と予算が限られているので、その限られた時間と予算を使って、現地の人自立し継続できる技術を如何に残すかという視点を学んだ。加藤氏が立ち上げたこのプロジェクトは、加藤氏が日本に帰国した今も続いており、真の支援が実現できていると感じた。最後に日本の歌を歌えてよかったと思う。

## 参考文献

『シンガポールの教育 特に、ストリームについて』愛知教育大学教育創造開発機構紀要  
2011年3月 川上昭吾他

『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』文部省 1999年 開隆堂出版株式会社

[http://tb.sanseido.co.jp/english/column/relay\\_bc/20090209.html](http://tb.sanseido.co.jp/english/column/relay_bc/20090209.html) 三省堂英語教育 リレーコラム

財団法人埼玉国際交流協会 [http://www.os.rim.or.jp/~sia/kokusairikai/kokusai\\_01.html](http://www.os.rim.or.jp/~sia/kokusairikai/kokusai_01.html) から引用

田中治彦「学校における開発教育をどう進めるか」(「教職研修」増刊号、1997年8月、20-23頁より)  
<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/htanaka/98/Kaikyo.html> から引用

『高等学校学習指導要領』文部科学省 2009年

学 校 名	国立北九州工業高等専門学校 総合科学科
-------	---------------------

氏 名	荒 川 裕 紀
-----	---------

## 1 今回の現地研修全体に関する所感

所感として、非常に有意義な時間が持てたと感じます。まずは、参加者ひとりひとりが豊富な経験を持っていらっしゃいました。すばらしい人々に恵まれたと感じております。現地研修に関しては、豊富な経験をもたれた方ばかりだったこともあり、多くの意見が出てその1つ1つに大いに啓発されました。事象の切り口、そしてアプローチの仕方、教材化、どの点においてもこれまで受けてきた研修を凌ぐものがありました。是非とも教材化するのみならず、自身が教員生活する上においても「姿勢」の部分でこれからも大いに学んでいこうと感じております。まず、このような集まりを企画して下さったことに感謝いたします。

そして、このアドバンスコースが研修のみにとどまらず、日本の教育界や開発教育・国際理解教育、そして産業界までも大きく提言できる動きへの一歩になるのではないかというすばらしき動きも感じました。様々な意味でこのような素晴らしい研修に参加できましたことを感謝いたします。

## 2 研修に参加に際してのねらい

参加前から考えておりましたねらいとしては、①ルワンダに関しては民族同士の和解が教育ではどの様に行われているのかという実際を学ぶこと。②同時にエコツーリズムで大きな成果を挙げているというところからどこを売り出そうとしているのかを見てみたいということでありました。

またシンガポールに関しては、③各民族の共存するための教育の実際を見聞し、小国ではあるが多彩・多才な人材を輩出することのできるようになったのはなぜなのかということを実況から改めて学びたいということと、④過密の問題や高齢化社会への対策の実際を知り、日本の事例との比較検討を行うことで教材化していきたい。ということでありました。

両国に共通することとして⑤強いリーダーシップを持つ国であり、その中での「歴史の描かれ方」についての調査も行うことで、自身の授業の中で触れていく事例としたい。というものがあります。

事前研修を経て、この教材に関することとともに、⑥九州・日本での国際理解教育において、どのようなことを行うことで活性化、もしくは新しい機軸を出せるのかということルワンダ・シンガポール両国の戦略を見ることで考えていきたいです。

実際この中で、体験、もしくは深く考察することができましたのは①・③・⑤、そして大きくは⑥であったと思います。この研修が、1回目の研修よりも「アドバンス」であり、国際理解教育や開発教育を九州の中で盛んにしていきたいということが、研修の一番の目的でありますので、その話が大きい時間を割いて出来たことは、誠に有意義であったと思います。

### 3 現地研修を通しての気付き、疑問

#### ① 気付き

細かくは、各訪問先の所感にて報告いたしますが、シンガポール全体に関しては、小国ながら東南アジアのリーダーシップを発揮する国としてさまざまな努力を払っていることに改めて感じさせられました。ポリテクニクおよび政策大学院大学というレベル別での人材の輩出など、世界の中の国家戦略と教育が密接であることを改めて感じました。

ルワンダに関しては、17年前の虐殺以降急速に国づくりが行われていることが伺えましたが、強権的に国をリードしていこうとしているのがさまざまなところから垣間見えました。数日の滞在ですが、新しい国を作るのだという気概に燃えた国であるということを感じると同時に、いざ歯車が狂ってしまうと、民族間の争いが再燃するかもしれないということも感覚として感じました。

#### ② 疑問

疑問点としては、シンガポールに関しては彼らの懸案事項でもあると思いますが、高齢化に対する対策についてあまり見えなかったことです。今回の研修の中ではプログラムとしては入っておりませんでした。やはりこれからの日本を考える上でこれからも考えてみたい課題です。

シンガポール政府が戦略的に若い人材を育てることの部分は非常によく見えましたが、老人の知恵・知識を「使う」ところが少ないように感じました。町を見ていて、公共交通機関を使っても老人の姿をあまり見かけないところは、気にかかります。日本の福祉政策の現状を改めて考える、良いきっかけになったと思います。提言の中にもそのあたりは含めたく思います。

ルワンダに関しては、疑問点ではないですが、次のようなネガティブな部分に気付かされました。それは民族共存という形にはまだ程遠いということです。協力隊員と話していても、もちろん新たな国を作るのだという気持ちが現地の人たちにあるが、民族と経済格差という問題がどうしても横たわっていること、そこに国家として成り立たせるために政治が入っていることを改めて感じさせられました。自分として政治的な部分や人種の繊細な部分に踏み込むことが出来なかったことが悔やまれます。長期滞在での調査ではないので物理的に難しい部分があると感じますが、もう少し聞いてみたかった点であります。

### 4 JICA に対する提案、要望

#### ① 自らの学校の中で行っていく、JICA との関わりを含めた国際理解教育

世界史の中ではぜひルワンダの事例を 19 世紀以降の「アフリカ分割」の単元の中で、大いに組み入れていきたいと思えます。そのためには現在収集しているルワンダに関する歴史・文化・民族に関する文献の読み込みがこれから必要となると感じています。今年度もしくは来年度に現地での研修も含めた上での「ルワンダの歴史」の概論のような報告書を現在の勤務校の研究報告にて発表をしたいと考えております。シンガポールに関しては専攻科（大学 3 年 4 年程度）の授業の中でシンガポールの成立については詳しく話を行っていますが、今回の研修で得たシンガポールの戦略を改めて授業の中で示すことで、日本の工業人としての世界戦略を各学生の中で描かせる授業展開を行いたいと思えます。JICA とのコラボレーションする授業を組み立てたいとも思い

ます。距離的に非常に近いので、何か行動をおこしたいと考えております。学生たちにはこれまでどおり、JICA とのつながりとして実体験プログラムの参加やエッセイコンテストへの応募を引き続き行っていきたいとおもいます。様々な仕掛けを授業内やそれ以外で入れることで、学生たちの知的好奇心の中に世界を組み入れていきたいと考えております。

## ② この教員研修を九州の国際理解教育のきっかけとするために

今回の教師海外研修は、二回目ということもあり参加者・スタッフともに非常に個性の溢れ、そして各学校での実践も豊富な方ばかりでした。

それと同時に今回参加されなかったけれども、教師海外研修という形で行かれた先生方も多くいらっしゃると思います。私は一回目に関しては、JICA 大阪のプログラムで参りました。そこでの話をするのは申し訳ありませんが、関西地域では、教師海外研修に関しては発表の場・交流の場の規模が大きいと感じました。さまざまな NGO などの集まりの中で報告をする機会があり、教員やそれ以外の人たちとのつながりが生まれる場の設定がありました。

九州でも大きなイベントは難しいかも知れませんが「同窓会的」な研修会を JICA の主催で出来ないだろうかということを感じます。できれば NGO や他の業種も集まって、大々的なイベントができれば、これまでの国際理解教育・開発教育の枠を超えた大きな動きが生まれると感じます。

行った教員のワークショップを教育委員会や文部科学省の共催という形にすると公立学校の先生は出やすくなりますし、他では日本国際理解教育学会がやっているような試み（例えば、博物館でのワークショップなど）をより広げられる可能性があると感じます。

それと同時に大学生、特に教職を志望する学生たちを巻き込むために各大学のカリキュラムに組み込み、教師海外研修にいらっしゃる先生を講師として招くような講座を組むことの提案をしたいと思います。これは教師を目指す学生たちの新たな機軸になると感じます。すでに教職に就かっている教員の方への対象としては、教員免許更新の講座の中に教師海外研修を組み込むことが出来ればなおいいのではとも感じます。九州大学の大学院のカリキュラムの中に開発教育の授業があり、それに興味のある学生は参加していると思いますので、これを教育学の中に組み入れることを JICA としても積極的に推進していくと非常に面白いのではないかと感じます。

ルワンダに行って感じたことは韓国の KOICA では大学生のスタッフがワークキャンプのような形で彼らの生活を感じ取れるようなプログラムが確立されていることがあります。私は大学院生のときに兵庫県の国際交流協会に所属しておりましたが、そこで行われていたのが「大学洋上セミナーひょうご」でありました。兵庫県の4年制大学の学部学生が1ヶ月間船に乗り、4ヶ国(中国・シンガポール・オーストラリア・インドネシア)を回り、船内と現地で講義を受けるというものでした。半額を兵庫県が補助をして(36万円)、そこで受けた講義や現地実習での学びを各大学の単位として互換されるというもので、毎年500名近くの学生が参加しておりました。何か単位互換のシステムと渡航費の補助のシステムを作り、九州島内で JICA 現地派遣ワークキャンプのようなものが出来ないだろうかと感じます。その中で、教師海外派遣で行かれた先生を引率者という形で集めるのも面白いですし、広がりが出るとも感じます。JICA 実体験プログラムと JOCV を繋ぐ教育プログラムができてくると非常に有意義ではないかと感じます。

私が JICA の活動を特に知ったのは、4年生の時の「英語(スピーチ・コミュニケーション)」という授業の中で、協力隊に行く卒業生が多数参加している授業でありました。その教員が、普通の学生のみならず、商社関係や新聞関係そして旅行業や協力隊員など多岐に渡る人々を授業に組み入れていたために可能となった授業でした。大いに啓発された授業でしたが、なにか JICA

がこのような大学の授業の取り組みにより加わることになる、学生にとって非常に魅力に映ると感じました。あとは、日本の就業スタイル自体の変革が必要だと思えますが、まずは中東・高等教育でのカリキュラムに入り込むことで、活性化、社会変革は可能だと感じます。

シンガポールの報告で老人の対策について少し話をいたしました。是非日本では埋もれた財産を活かしていければと思います。海外の第一線で活躍された協力隊員の黎明期の方（以前で言いますとブータンの西岡京治先生のような方でしょうか）や商社にお勤めだった方などをお呼びして、経験からくるお話を聴く講座や、研修などがあっても面白いのではないかと感じます。彼らの築き上げてきた遺産を受け継ぐような場所が JICA にあっても非常に有意義ではないかと思えます。

今回のルワンダ行きの中での事前研修の中で紹介があった、ルワンダ中央銀行総裁であった服部氏が書かれた『ルワンダ中央銀行総裁日記』を読みました。1960年代という日本がまさに戦後復興から高度成長へと突き進んでいる時期の日銀の人の熱い息吹を本の中から感じ取れました。敗戦国、黄色人種の国日本が、どのような協力をアフリカの「最貧国」で行うのか、これだけでドラマです。彼らに続いた方々もまた日本の宝であり、彼らの話を聞く機会をもっともっと欲しいです。そういう方々に私は会いたいですし、学生たちにも素晴らしい機会になると思います。デジタルデータベース化するのではなく、対面で会って話すこと、彼らの所作から得られる思いを感じる場はとても必要と感じます。費用とそして何より時間との関係かも知れませんが、戦後の人たちの聞き語りを JICA がやっていくのは面白いし、産学官の連携につながると感じます。戦後の大変な時期に商社マンとして活躍された方、JICA 黎明期に必死な思いで技術を伝えた方、モノ作りで違う国の中で必死に自分たちの思いを伝えて軌道に乗せた方、その話を若い世代へ DNA としてその少しでも継承していく手段があればと本当に感じます。これは新聞社が行っている高校生対象の講演会みたいな形だとは思いますが、高校生・大学生、そして教員になにかそういう機会をお与えになれば、すぐにではなくても、いつかその言葉が彼らに響くと思います。

最後の提案といたしましては、沖縄の JICA 教師海外研修参加者に話を聞いたことからです。沖縄では海外派遣のされる先生は教育委員会もしくは県庁に行って報告を行うとのこと。それを現地の新聞（琉球新報・沖縄タイムズ）なりが報道されるシステムが確立されているとのこと、教員間ではよく知られた研修であるとのことでした。やっていらっしゃることだと思いますが、新聞やメディアなどの広報、教育委員会などの行政に働きかけるとより裾野が広がるのではと感じました。

まことに不躰な意見ばかりで申し訳ございません。

## 5 各訪問先の所感

### ① テマセク・ポリテクニク

同じ高専に勤めるものとして、その規模に圧倒されました。外国人の教員を多く受け入れている点、そして育てた技術者の研修先として海外までも視野に持っているところが日本の高専が学ばなければならない点であると痛感いたしました。同じような「世界に羽ばたく工業人」を標榜している学校であります。日本のそれは教員を含めて「内地思考」が強いことを改めて感じました。特に現在勤務校でも海外インターンシップの促進が進められていますが、テマセクが学生の費用の多くを負担するシステムは本校でも考えてみる価値があると思います。日本国内のイン



ターンシップでは多くが企業の負担になっていますが、日本の産業界の活性化の機軸になるのではと感じました。そのためにも学生たちに、どの様に目を外に向けさせるのかということを考えなければと改めて思いました。

## ② SCE

小さい国だからこそ、動ける国際協力の現実を感じました。日本のODAなどとは性格を異にするものではありませんでしたが、小国としてすばらしく機能した成功事例としてシンガポールがあり、その成功事例を各国に知らせるとするのは、非常に面白いと感じました。日本もちろんそのような活動を行っていますが、より集中的に場所を定めて行っているところ、そして営利事業として展開しているところに彼らの戦略性を感じました。シンガポールの成功事例は歴史の証明する「実現可能な」奇跡であり、それに途上国が羨望のまなざしで見ると、その部分をうまくマーケティングできていると感じました。

## ③ JICA ルワンダ訪問

小林所長を含め多くの方々に非常によくしていただきました。滝本さんからは最終日に中学生のころから、ここまで至った経緯を話してくださいました。ここから感じたのは、日本の子どもたちの教育に足りないのは教員側からのこのような事例の提示であるということを感じました。哲学のある教員にならねばとの思いを新たにすると同時に、熱い思いを持って仕事をしていたらっしやる姿に非常に心を打たれました。

## ④ 在ルワンダ日本大使訪問

畑中大使にはお忙しいのに関わらず、多くの時間を割いてわれわれと話してくださったことに非常に感謝いたします。特にその中で印象に残ったのは、大使がおっしゃった「日本のメディアは海外のそれと比較すると国際的なニュースを取り上げない、そのことは国の政策に反映されるのではないか」とのコメントでした。国際理解を進める上で、人々の関心をどのようにそちらに向かせるのかということを感じました。何かやってみたいと思います。なぜ日本では海外の事象よりも国内の事象に目が向くのか、分かりきった話かも知れませんが、教育現場の中でこの事例の提示は真に有効ではないかと感じます。

## ⑤ REACH

NGOと国の協力機関との棲み分けについて考えさせられました。宗教的な信念を織り込む、その上で援助を行うということの大切さ、歴史的にはこのやり方が多かったことを改めて感じさせられました。いかにして国家の機関とNGOをハイブリッドさせることが有意であるのかということを感じると同時に、その棲み分けの部分をもどのように教育に反映させていくのかについて考えなければならぬと感じました。国家として行う援助、信仰上、個人の道義上行う援助、2つとも大切であります。この2つの違いを教育の中で教えていくのも必要かも知れません。

## ⑥ SMASSE

専門家の方の生き方に感銘を受けました。海外での専門家として理数科教育を推進させることに意欲を燃やしていらっしやるその姿勢に一番感銘を受けました。そしてそこから発せられた、日本の教育に対する提言、諫言である「もっと早い段階から、世界のことを子どもたちに知らせしてほしい」というものは、帰国してから真っ先にやらなければならない課題と感じました。

## ⑦ ホームステイ

神父様の住居にてステイをさせていただきました。地域の中でのカトリックの立場を感じまし

た。歴史的にはブタレ3世がキリスト教受容をする中で大きな争いが起こったと聞いていますが、虐殺後も現在では人々の信仰のよりどころとしてやはりカトリックが大きな位置を占めていることを体感いたしました。それと同時に、カトリック者であり校長であったカミーレ神父の地域での尊敬のされ方、人々への「諭す」姿を見るたびに教員のあるべき姿の原点をそこに見ました。

すばらしい機会を与えてくださったことに感謝いたします。

#### ⑧ 戦傷者の復帰事業訪問

戦争の傷跡である障害を負った人々に就学・自立の機会を与えている援助の姿勢に感銘を受けました。一般の学生と制服の色が違う、手袋をはめずに作業をしているところなど、戦傷者と一般学生との差異が少し気になりましたが、学生たちの学ぶ意欲はあると感じました。途上国では、障害者にまで目が行き届かないことがあります。そこを支える日本の意義は非常にあると感じます。日本はまだまだ福祉途上国かも知れませんが、その部分のノウハウを積み重ねる上においても、途上国での支援、特にこのような障害者・傷痍軍人の支援は必要だと感じます。

#### ⑨ 「仕事のある暮らし」訪問

NGOとして、事業を成り立たせることの大変さを、加藤さんからもお聞きしていましたが、現地に行ってそのことを改めて感じました。難しい部分もたくさんあるように感じましたが、どの様にするのが彼らを本当に救えるのか、是非働いている彼らが良い暮らしを歩んで欲しいと感じます。

#### ⑩ TCT 訪問

JICA ルワンダの肝いりで行っている事業で、すばらしい工業器具、そして施設だったと感じます。訪問の報告書でも述べましたが、やはり工業系の学校として気にかかることはその立地状況ではないかと思えます。キガリにキャンパスを持つことにいたったと思えますが、いくらITといえども工業地帯から遠いというのは企業との産学連携やインターンシップなどといった問題に対応できるのかという危惧を抱きました。中で行われているカリキュラムやスタッフは素晴らしい方ですが、これからのルワンダの産業社会にどのような人材を送り込むのかということ、私も高専に勤める一人として感じました。機械を扱える人材から、ものを生み出すエンジニアを生み出す機関として成長させることが必要ではないかと思えます。日本の高専も分岐点に来ておりますが、同じような校種の学校であるがために余計にそのことを感じました。



日本の国際理解教育・  
グローバル教育を広げる方法

## 日本の国際理解教育・グローバル教育を広げる方法

我々9名は、この夏、国際協力機構（JICA）が初めて実施した「教師海外研修 アドバンスコース」への参加者として、シンガポールとルワンダを訪問した。各メンバーは、年度は異なるが以前 JICA の「教師海外研修」で開発途上国一ヶ国（シリア、マラウイ、サモアなど）を訪問しており、今回はどの人にとっても二度目の研修旅行となった。

参加者の所属は小学校・中学校・高等学校・高等専門学校と多岐に渡っていたが、全員に共通していたのは「日本の教育を良くしたい」という強い熱意と、豊かな海外体験・実践経験だった。

事前研修、現地研修、事後研修の全ての段階で、我々は暇を見つけては「日本の国際理解教育・グローバル教育はどうあるべきか。」「それを広げるにはどのようにしたらいいのか。」などについて真剣に話し合った。時には、議論が白熱しすぎて、ドバイやナイロビの空港待合室では他の乗客から『不思議な（変な）集団』だと警戒されたこともある。こうして我々が到達した考えには、何らかの意味（価値）があると思い、ここに紹介することにした。

### （1）国際理解教育・グローバル教育の全体像把握

国際理解教育・グローバル教育と言っても、はっきりした内容が定められているわけではない。また、どの学年で何をどのように教えるのかについても、予め決まっているわけではない。更に、頼りになるネットワークがあるわけでもない。従って、国際理解教育・グローバル教育の実態はと言えば、残念ながら「各教師が個人的に興味・関心のある分野について、自分の考えた方法で、一人で行っている。」といった印象を拭い切れない。

そこで、各県にある JICA 窓口には、国際理解教育・グローバル教育の『実践紹介の場』作りに協力してもらえないかと考えている。都会の大規模校で行われているもの、農・山・漁村の小規模校で行われているもの、離島で行われているもの、特別支援学校で行われているもの、工業高校で行われているもの、農業高校で行われているもの、教科指導の中で行われているもの、部活動で行われているもの、文化祭で行われているものなど、様々な現場で様々な内容が様々な方法によって行われている。こういった多彩な教育活動の全体像を把握することは、国際理解教育・グローバル教育に関心のある教師にとってとても参考になる。このことが、自らの実践の特徴・価値を知るきっかけにもなるからである。

そこで、今述べたような『実践紹介の場』作りを、JICA が各県に配置している国際協力推進員の仕事に加えて頂けないだろうか。出来れば、各県で年に一回、実践発表会を開催してもらいたい。これは、埋もれている貴重な実践の掘り起こしにも役立つだろう。

ただ、その際、注意しなければならないのは、実践発表会を学会形式にしないことである。あくまで、「こんな実践があるのか。」と驚き、また感心できるような情報交換の場にするのである。毎年来たくなるような「楽しんで学べる場」にするのである。こうしてこそ、国際理解教育・グローバル教育の裾野は広がると思う。

## (2) 国際理解教育・グローバル教育の新たなアプローチ

国際理解教育とグローバル教育が広がりにくい理由として、二つのことが考えられる。

一つは、様々な利害が対立する複雑な問題を教育現場で取り扱い易くするため、「貿易ゲーム」に代表される「間接的で抽象的、且つ緊張感のないアプローチ」が多く用いられていることである。もう一つは、英語や地理の先生が国際理解教育・グローバル教育に興味を示す一方、理科・数学・政経・倫理の先生はあまり関心を示さないという問題である。従って、国際理解教育・グローバル教育を学校現場で拡大させるには、これら二つの問題を解決しなければならない。

前者の「間接的で抽象的、且つ緊張感のないアプローチ」にはリアリティーが感じられないという理由で、高校生（特に、男子）は国際理解教育・グローバル教育にあまり関心を示さない。そこで、彼らのニーズに応えるため、「直接的で具体的、且つ深刻な対立を含むアプローチ」を新たに開発する必要がある。それには、現実にある問題（例えば、限られたODAを農業に使うのか、それとも保健衛生に使うのかを決める問題。或いは、ルワンダに投資する価値があるのかどうかを決める問題など）の解決を目指す issue approach や problem-based learning の方法が参考になる。

後者の問題解決には、キャリア教育的アプローチが役に立つ。まず、理科・数学の先生には、日本に居ながら物づくりを通して世界と深く繋がる人生があること（例えば、日本の携帯電話の技術が途上国で役に立っていること）、また短期間とは言え技術をもとに途上国で活躍する人生があること（例えば、漁業専門家がマラウイ湖で、蛋白源としての魚の養殖を指導するケース。或いは、日本工場の人がアフリカで大きな橋を建設するケースなど）に気づいてもらうようにするのである。これには、企業の協力が必要となる。次に、政経・倫理の先生には、国際機関やNGOで働く人の人生に焦点をあてるアプローチ（例えば、「人生の転機は何だったのか」「どこに人生の喜びを感じるのか」などについて語ってもらう方法）の面白さに気づいてもらうようにするのである。これには、国際機関やNGOの協力が必要となる。このように、国際理解教育・グローバル教育にキャリア教育的要素を加味させることが出来れば、英語や地理以外の先生も関心を持つようになり、その裾野はかなり広がることになる。

この10月には大分県の本耶馬溪中学校で、また5月には宮崎県の延岡工業高校と旭化成で今回の研修成果発表会が行われる。前者は（1）、後者は（2）の中に位置づけられていることを理解していれば、それぞれの発表会の持つ意味がよくわかるだろう。



# 添 付 資 料





# 1 事前研修プログラム

## ■ 7月2日 (土)

時間	内 容	担 当
9:20	受 付	推進員
9:30	司会及び担当スタッフ紹介	
9:35	JICA 九州市民参加協力課課長挨拶 ★フィリピンコースと共通	市民参加協力課 本田課長
9:40	JICA 事業概要、教師海外研修趣旨説明 ★フィリピンコースと共通	市民参加協力課 竹川職員
9:55	会場移動	
10:00	自己紹介 (アイスブレイキング)	ファシリテーター：桜井高志氏
10:25	ワ ー ク	ファシリテーター：桜井高志氏
10:55	会場移動	
11:00	ワークショップ体験 ★フィリピンコースと共通	ファシリテーター：松本亜樹氏
12:50	休 憩 (昼食)	
13:50	・アドバンスコースの背景と概要、シンガポールの基礎知識	竹川職員
14:00	・ルワンダの基礎知識、「仕事ノアル暮らし」について	加藤悦子氏 (青年海外協力隊 OG)
15:00	・ワ ー ク	ファシリテーター：桜井高志氏
15:55	会場移動	
16:30	講和「ホームレスの現状と課題」 ★フィリピンコースと共通	佐野太氏 (ホームレス支援機構)
17:30	事務連絡 (明日のスケジュール等)、アンケート記入	
18:30	懇 親 会 ★フィリピンコースと共通	
20:00	DVD 鑑賞 (ルワンダ関連)	
21:30	終 了	

■ 7月3日（日）

時間	内 容	担 当
9:00	事務手続き（渡航、保険、留意点他） ★フィリピンコースと共通	竹川職員
9:30	JICA の平和構築、復興支援の取組み	JICA 九州 村岡所長
10:00	目標にむけての戦略づくり (適宜休憩)	ファシリテーター：桜井高志氏
	参加者ミーティング（役割分担、研修までの準備他）	ファシリテーター：桜井高志氏
12:30	休憩（昼食）	
13:30	教材化と学習プログラムの検討	ファシリテーター：桜井高志氏
15:00	ふりかえり&今後（渡航当日と帰国後）の流れ確認 アンケート記入	
15:30	解 散	

## 2 現地研修 日程と訪問先のメモ

■ 訪問日時： 8月1日（月） 14：00～15：30

■ 訪問先： SCE (Singapore Cooperation Enterprise)

報告者：北九州工業高等専門学校 荒川裕紀

### SCE の概要

資源もなく、小国であるシンガポールは戦略的な経済計画により、アジアの龍と呼ばれる発展をしてきた。その発展させてきた手法を途上国に売り込むことを行う機関として2006年に政府直轄のSingapore Cooperation Enterprise (SCE)を立ち上げて、国内で培ってきた都市マネジメントモデルを都市化の進む発展途上国に売り込んでいる。

具体的には、①都市計画、②環境サービス、③教育、④ビジネス開発、⑤e-政府サービス、⑥公共サービス改革であり、特に国際機関との連携強化に取り組んでいる。例えば世界銀行とはThe World Bank-Singapore Urban Hubというパートナーシップを設立して（その拠点はもちろんシンガポールに置かれている）、途上国の都市マネジメントを支援している。アジア開発銀行とも同様の取り組みを行っている。シンガポールの開発の特徴としては、ODAのような直接資本を供与するのではなく、あくまでノウハウなどの提供を行うことに重きを置いている。これは政府の方針であるとのことであった。

SCEは世界22カ国で事業を展開している。具体的な内容としては、都市計画トレーニングプログラム（ナイジェリア）、公務員人事アドバイザー、空間データインフラ開発、港湾登録システムアドバイザー（バーレーン）、金融政策再構築（カタール）、州マスタープラン作成アドバイザー（ブラジル）、e政府アドバイザー・トレーニング（ブータン）などがある。

我々が研修に行く、ルワンダに関しては大きくは4つの事業の展開を行っている。それは①公共セクター能力向上、②社会保障基金改革、③空港開発アドバイザー、④都市マスタープラン作成であった。その他、中国と関連した事業もかなり多い。10以上の事業展開をしている。政府同士の接触もかなり多いという。

所感としては、まず日本のJICAの立場とは少し異なっていたことがある。小国としての「動きやすさ」からなのか、非常にピンポイントである。それでいて、諸外国のニーズにあることの実行を行っていることを感じた。ルワンダとシンガポールは似ているところもあるが、絶対的な違いとしてはシンガポールの「港市国家」としての側面である。シンガポールの発展にはやはり中継貿易港としての歴史的な地の利がかなり有意に働いたことは否めない。しかしながら、その後に訪れたリー・クワンユー政策大学院大学でも感じた、小国だからこそ有益に動ける人材を育て、そしてその人材やノウハウを世界に送り込んでいるのだということを肌で感じる事が出来た。

参加者からの質問では、この後に行くルワンダの国情に関する質問が多かった。説明を行ってくださった方は、JICAの事情についても精通していると同時に、ルワンダのこのことに関しては何度も訪れていることから非常に見識があり、事務的なことから、国情までの幅広い範囲についてお答えを下さった。

## 訪問先のメモ

■ 訪問日時： 8月1日(月) 15:30～16:30

■ 訪問先： TEMASEK POLYTECHNIC (以下、TPと略す)

報告者：福岡県立福岡高等学校 鹿野敬文

TPは school-leavers (辞書によると「進学ではなく就職を希望する学校卒業生」を指すイギリス英語) や working adults を対象にした学校で、生徒数は1万3千人、教職員数は1千2百人である。TPでは、単なる diploma 取得だけでなく、the practical learning, expert teaching, overseas experiences (海外体験)、campus life にも力が注がれている。

TP 設立にあたっては、産業界のニーズに応えられるよう、綿密な市場調査を行ったとのことである。従って、TP では経済の動きを敏感に反映した skill-based, tech-based の授業が行われている。見せて頂いた TP 紹介の DVD が、ベトナム語・ビルマ語など6ヶ国語で作られていたことからわかるように、多くのアジア諸国が TP を訪問している。

TP は以下の6学科からなる。

- (1) applied science (応用科学)
- (2) business (ビジネス)
- (3) design (デザイン)
- (4) engineering (工学)
- (5) humanities & social sciences (人文科学と社会科学)
- (6) informatics & IT

ここで、(6) の applied science 学科を例に、TP の授業で特徴的なものを挙げると、problem-based learning, e-learning, internship, project and research work, Overseas Community Projects, Student Leadership Program がある。一方、(2) の business 学科では leadership training, character development, conflict management などの授業も行われている。

TP は国際化に向けた4つの戦略を持っている。

- (1) キャンパス内に国際的な雰囲気を含養すること
- (2) 国際的な体験を付与すること
- (3) 海外の大学や企業と連携をはかること
- (4) 国際的な評価が学校に対して得られるようにすること

この中で特に特徴的なものとして、Overseas Student Internship Program (OSIP) がある。これは、8週間～6月間、海外の企業で Internship を経験するプログラムのことである。飛行機代は TP が負担し、ビザ取得も TP が代行する。企業にとって、マン・パワー不足が解消出来るし、将来のいい被雇用候補者を見つけられるというメリットがある。企業側は宿泊施設を提供しなければならないが、2名同室の方が経済的なため、各企業には同姓の TP 学生が派遣されることになる。

最後に TP の位置づけを理解するため、シンガポールの教育制度について説明する。

シンガポールでは、小学校 4 年生で受ける全国統一試験の結果をもとに、小学校 5 年生から能力別クラスに分けられる。そして、小学校修了試験（PSLE）の成績をもとに、生徒は special（特別）コース・express（急行）コース・normal academic（普通）コース・normal technical（普通）コースのいずれかの中学校に進学する。

次に、special（特別）コースと express（急行）コースに進んだ生徒は、中卒程度の GCE（General Certificate of Education）の O レベル試験を受けることになる。もし、O レベル試験に合格できなかったら、職業訓練校（25%）に進むか就職（10%）するしかない。一方、O レベル試験に合格した者は、高等教育機関である junior college（上位者 25%）、あるいは pre-university や TP のような polytechnics（40%）に進学する。

それから、高等教育機関（主に junior college）を終了するとき、生徒は高卒程度の GCE（General Certificate of Education）の A レベル試験を受けることになる。ここで、成績が良かった場合にのみ university（大学）に進学できるのである。従って、シンガポールの大学進学率は僅か 10～15% の狭き門となっている。

## 訪問先のメモ

- 訪問日時： 8月4日(木) 9:00～10:00
- 訪問先： 在ルワンダ日本国大使館
- 講話者： 畑中邦夫全権大使

報告者：福岡県糸島市立前原南小学校 福井陽子

### 1. 研修先の概要

2010年1月1日に在Rwanda日本国大使館が設立され、同年2月2日に畑中邦夫全権大使（初代大使）が着任された。以来、ルワンダの人々に日本のことを知っていただくことに尽力してこられた。

着任以前からJICAをはじめとするODA協力はあったが、当初約30名程度であったが、現在では約100名になっている。これは、アフリカ54カ国への人員派遣数のうち真ん中くらいの多さであり、アフリカの地図を見て米粒ほどの面積しかない国にしては多い方だと言える。日本国大使館は世界に31カ国あるが、そのうちの1つである。

日本との共通点も多い。人口密度が431人/km<sup>2</sup>と高いこと。緑が多く、自然条件に恵まれて農業や村が発達していること。またそのため、かつての日本のように食料自給率が高いことである。一方、鉱物資源がない（見つかっていない）ため、国の発展には、人材育成しかない。所得は500ドル/人程度である。

戦後1960年代に日本からの支援を受け、その卒業生となったシンガポールをモデルに国家再建に努力をしているところであるが、モデルの原点は日本である。カガメ大統領は汚職のない清潔な国家経営をしており、アフリカの中でも特異な国であるといえる。

しかし、まだ学歴格差が大きい社会であり、外国語が話せる人は20%程度で、小学校を出るか出ないかの人が多い。これは、1994年の大虐殺で4・5・6月の3ヶ月間に約100万人（ルワンダ政府発表）が死亡しており、その後の社会的混乱の中、十分な教育を受けられなかったことに因るところが大きい。大虐殺において救済を放棄した国連に対する不信感があり、現在も心の底からヨーロッパを信頼しているとは言えない。ルワンダ軍の規律はよく、平和を維持することへの意識が高い。

日本との関係は良好である。これまでルワンダ中央銀行元総裁 服部正也氏や国連高等難民高等弁務官 緒方貞子氏が、国家に尽力してきたことが認められ、信頼してもらっている。JICAとの関わりも1980年代に開始し、一旦停止したが、2004年再開している。

ルワンダの女性議員の多さは53%と世界第1位である。逆に日本は下から数えた方が早く、話題にできない。日本は最も遅れている。日本は島国・農耕民族であったため、これまで平均点を高める教育が中心で、他国の侵入から自国を守るために傑出した人物を育てる（英才教育）が必要とされなかったためであるとも考えられる。

ルワンダは現在、初等教育に力を入れている。向学心が強いが、就学年齢の9割が入学するものの、卒業するのは8割程度。生活の貧しさから、ストリートチルドレンになる者もいるのが現状。進学するものは、インドへの留学が多い。

カガメ大統領は93%という高い得票率で2選目を果たしたが、残された任期はあと6年である。

今後は、その中でいかに後継者作りをするか、また、コンゴ側無政府地帯の国境警備を固め、民主化をどのように実現できるかなど、課題はまだ多い。

日本は海外との交流なしにはやっていけないにもかかわらず、日本の報道は海外のニュースが不足している。日本の子ども達が、海外のことに敏感になることに努力することを日本の教育者に望まれている。

## 2. 研修先についての所感

広い見地から、ルワンダとの関係や日本の国際社会に果たす役割について、質問に答える形でお話しいただき、認識を深めた。日本が信頼を得ているということは、これまでの JICA をはじめとする ODA の技術支援や人材育成に因るところが大である。次世代を担う子ども達がこの国際社会に果たす日本の役割を自覚し、広く世界に目を向けていくことができるように、私達教師が責任持って指導していかなければならないと思った。



## 訪問先のメモ

- 訪問日時： 8月4日(木) 10:00～12:00
- 訪問先： Brief on REACH's activity at JICA Office
- 講話者： PIASS 開発学部上級講師・REACH プログラムアドバイザー  
佐々木 和之氏

報告者：鹿児島大学教育学部代用附属鹿児島市立田上小学校 高島 芳倫

### 草の根からの平和構築 – 修復的正義による和解をめざして –

「REACH」とは (Reconciliation Evangelism And Christian Healing for Rwanda) ルワンダの人々の癒しと和解を目的にする、現地の教派を超えたキリスト教信者による NPO 非営利組織。1966年にフィルバート・カリサ牧師によって創設された。現地スタッフ6名、外国人ボランティア2名で構成されている。主に、東部州の4県5地区で活動している。

※ 講義の内容は大きく分けて以下の4点 (別紙配布されたレジュメに記載あり)

- |                |                 |
|----------------|-----------------|
| 1 内戦とジェノサイドの痕跡 | 2 「REACH」のアプローチ |
| 3 活動を通して学んだこと  | 4 課題            |

#### ■ 佐々木 和之氏 について

ルワンダでの生活は6年目。この事業は11年前(2000年5月)から。大学では農村・農業開発を専攻。エチオピアでの活動時、紛争が起き撤退。若者が連れて行かれるのを見て、このままでいいのかという気持ちに。紛争により社会・開発が脆くも崩れていくのを目の当たりにし、平和構築・民族の和解を進めることが重要だと感じた。

- 和解は①キリスト教としての和解と②身内で罰するが、その後は身内(共同体)で受け入れるという和解の2つがある。
- 犠牲者の埋葬は今でも毎年行われている。
- 裁判では100万人の人々が有罪となっている。内訳は直接殺害に関わった人が30万人、略奪が70万人。
- 現在の最高刑は無期懲役刑。寛大措置として自白をして謝罪すれば公益労働。現在8万人。刑務所に収容しきれず、キャンプやテント生活。国家予算に負担をかけないようにしている。
- 虐殺による死者数には様々な説があり、ルワンダの公式見解では100万人、国連の公式見解は80万人、専門家レベルでは50万人とされている。
- 現在 REACH では、女性同士の関係修復の取組「癒しと和解のセミナー」に力を入れている。加害者との対話は2006年11月にスタート。

- 加害者のニーズに応える形でNGOが支援。今まで一番幸せだったこと・つらかったことを質問、話を聞き、加害者のアイデアで償いをしている（「幸せのカゴ（豊かさのシンボル）」や石けん作り等）。その延長として、家造りがスタートした。家造りの現場で被害者側が文句をいうケースが残っているところも。
- 敵に対する恐怖心（同じ地区・コミュニティで起きたこと）
- 奇跡の復興と言われているが、今後も政権が安定することはない。制度ができて経済が安定しても、使うのは国民。敵対意識をもつなと言われても、心の中に今でも根強く残っているのが現実。
- 「俺よりも何人も多く殺した悪い奴は逃げているのに…」といった、集団暴力の加害者が自分の罪と向き合うことが難しい。
- 虐殺の事実を公の場で言うと、来年のビザが出なくなる。

## 訪問先のメモ

- 訪問日時： 8月4日(木) 14:00～15:00
- 訪問先： Training site Lycee de Kigali Secondary School (SMASSE Rwanda)
- 講話者： ミス・ユージン、高橋 専門家

報告者：大分県別府市立北部中学校 大津留 美 紀

中等理数科教育強化プロジェクトは国の「科学技術発展に資する教育の推進」の目標の下、取り組まれているものである。ちょうどそのトレーニング期間だということで Lycee de Kigali Secondary School に見学させていただいた。

8月3週間の公立学校の長期休暇中に11日間、全国10ヶ所で約3000人が研修を受けている。この学校では189名が研修を受けていた。対象はA2レベル(高卒)で無資格の教員。年齢層は20代の新人から50代くらいのベテランまで様々であった。教員の知識と教授法の向上を目指し、思考力と自主性を高めるわかりやすい授業づくりの研修している。受講している教員は『child centered approach』(一方的でない対話形式の学びあう授業)を学んでいると答えていた。数学、生物、化学、物理の4コースに分かれ、更にコース内で小グループで分かれて、実験やアクティビティ、交流を行っていた。

数学コースは、二次関数などの文章題をどうアプローチで生徒に取り組ませるか、教授法についてグループでディスカッションしていた。



生物コースは、神経のメカニズムについてどう考えさせるかを話し合っていた。

化学コースは、白い物体と水を入れたビーカーをアルコールランプで熱し、物質が変化することから白い物体を予想させたり考えさせる実験を行っていた。



物理コースは、水を入れた風船をろうそくで熱し液体が温度で膨張することで風船が破れる実験を行っていた。あちこちで風船が破れ歓声が上がっていた。

どのコースも集中して取り組んでいたが、受講している教員に聞くと、教員は学歴によって給料が違うので大卒の資格が欲しいと言っていた。degreeがもらえないこの研修へのモチベーションは低いとのことであった。



この学校は実験道具が充実しており、生徒数が多く、学力が高い学校であることが予想された。休暇中だが、勉強に来ている学生もいた。

この研修のトレーナーはミス・ユージン、JICAの青年研修で山形県に一ヶ月滞在した。その際授業研究会に参加して、ぜひRwandaでも取り組んでみたいと思い、研修最後の2日間は授業研究をして、話し合い、改善した授業をもう一度行うプログラムを組んでいるそうである。

## 訪問先のメモ

- 訪問日時： 8月4日(木) 15:20～17:00
- 訪問先： ルワンダ JICA 駐在員事務所

報告者：大分県立大分東高等学校 廣川由美

### SMASSE プロジェクトについて 高橋氏による説明

- ・ SMASSE とは、アフリカ 12、3ヶ国で行われているプロジェクト  
ルワンダでは 2008 年から実施  
教育省が費用を出して、研修を実施
- ・ 虐殺後、教員不足で困っていた
- ・ A2 レベル教員が、全国 10ヶ所で研修を受ける キガリには 189 名が来ている
- ・ 授業で板書していた“Hands on!” “Minds on!” はケニヤから来た概念で、授業ではなるべく手と心を使いましょうという意味

Q1：(高島) ルワンダの協力隊員の項目で「図工」はあるのか

A1：ルワンダではない 美術系・体育系の募集はまだない

Q2：(福井) ルワンダの協力隊委員について

A2：現在 8～10 名が SMASSE で活動中

赴任先でニーズが異なるため、各学校のニーズに合わせて活動中

授業は英語で行うため、英語力が必要

今日いた男性は実験室の管理・実験のアドバイスをしている

女性は先学期教えていたが、英語力の問題で今は教えていない

Q3：(廣川) ルワンダの教育システムに関する資料と教科書について

A3：National Curriculum Development Center で調べると良い

2009 年に初めて教科書を作ったが、あつてないような教科書

授業では教員が教科書を持っているだけ

図書館で教科書を貸し出す学校もあるが授業で生徒は使わない

Q4：(福井) 図書館について

A4：フランス語と英語の本があるが、種類は少ない 口承文化だったため本は少ない

Q5：(鹿野) 進学率について

A5：高卒は 10% くらいなので、大学進学率は数%では？(正確なデータはない)

若者はケニヤ・ウガンダ・ヨーロッパなど外に出たいと思っている

Q6：(荒川) 理数の授業数について

A6：小学校では国語・英語・社会

高校卒業時、全員で 1ヶ月の合宿

5:00 から走って一日中歴史の勉強し愛国心をたたきこむ

以下は「ルワンダのカリキュラム」について関連資料を <http://www.ncdc.gov> より添付

**Primary CORE SUBJECTS (ALL COMPULSORY & EXAMINABLE)**

ENGLISH KINYARWANDA MATHEMATICS SOCIAL STUDIES

**CO-CURRICULA ACTIVITIES-COMPULSORY & NON EXAMINABLE**

SPORT RELIGIOUS STUDY MUSIC FINE ART CULTURAL ACTIVITIES  
PRACTICAL WORK CLUBS

**Secondary CURRICULA FOR O'LEVEL**

**SUBJECTS FOR ORDINARY/TC LEVEL**

English Kinyarwanda Mathematics Sciences (Physics, Chemistry, Biology)  
Computer Science History Geography Enterprenership

**COMPULSORY NON EXAMINABLE**

Political Science Creative Performance (Music,Drama and Fine Arts)

**ELECTIVE NON EXAMINABLE (Schools can choose1)**

French Swahili Agriculture

**CO-CURRICULA ACTIVITIES (Student can choose1hour)**

Sport Cultural Activities Clubs Religious Studies

**COMBINATIONS FOR A'LEVEL**

COMBINATION FOR SCIENCE SECTION COMBINATION FOR HUMANITIES SECTION

COMBINATION FOR LANGUAGES SECTION

COMBINATION FOR TEACHING TRAINING COLLEGES

※ A レベルのデータは多いため、各自で参照してください

Q7：（高島）特別活動について

A7： 毎週月曜日に全校朝礼がある

クラス担任は出欠をとるだけで、クラス活動はない

PTA はあるが、話し合うのは会費のことだけである

Q8：（福井）担当者について

A8： 以前は全教科を担当が担当していたが、今は教科担当性である

Q9：（八田）高校進学率が低い理由について

A9： 女子の就学率がどんどん減るため クラス40人中7～9人になる

理由は学費が高いこと、生理用品が高くて買えないため通学できなくなる→授業が受けられ  
ない→落第

高校に行ったとしても、女子の就職先が無いから

Q10： JICA の女性スタッフについて

A10： 国内の短大卒 JICA が広告で公募すると100人以上募集してくる

政府は、対外的なアピールで、最後まで競争で勝ち残った女性を多く登用している

Q11：（富山）東アフリカの教育に関する会議について

A11： ケニヤが主催して、近隣30ヶ国が集まった会議がある

交流することで友好関係を深める目的

Q12：（富山）就業率について

A12：正確な統計がない

科学技術立国を目指しているが、何をしたいのかは不明で今後の課題

教員も子どもは目標がわからないまま教育を受けている

「今上向きの国だ」という宣伝はしているが、何をするのかまだ分かっていない

カガメ大統領のリーダーシップが強いので、一言で方向性が決まる状態

インド・中国はルワンダに関心を持っている

Q13：（富山）日本のイメージは？

A13：日本への評価は高い 日本ブランドがある

Q14：（小川）2011年8月でプロジェクトが終了したあとの支援は？

A14：ルワンダ政府が要請したことを外務省が判断して支援内容が決まる

Q15：（鹿野）ルワンダ人の世界観について

A15：ケニヤを大国と考えている ケニヤに留学したり、就職してお金を貯めたいと考えている

タンザニヤ・ザイール・ウガンダに対しては少し懂れている

ヨーロッパに対しては懂れているが、現実には行けない国と考えている

Q16：（高島）今の日本の子どもたちへのメッセージ

A16：日本を去って16年になり、子どもたちの状況がよく分からないが、帰国して「今どきの子どもたちは・・・」と聞く割には、講演に行くとき実際の子供たちは素直だと感じる自分の意志で生きていく逞しさを身に付けて欲しい

一時期グローバル化が騒がれて、留学や英語学習がはやし立てられたが、言葉は道具に過ぎない まずは自分の国をよく知ること

（鹿野）昔は理数科が出来る人が評価されていたが、今は英語の出来る人が評価される

モノづくり立国としては不安を感じる

Q17：（福井）ルワンダが日本に求めていること

A17：日本政府に出来ることは限られているので、今は技術協力のみを行なっている

日本人の気質についていいイメージを持っている人の例）東京の研修センターでお財布を紛失したら、中身がそのまま戻ってきたことは奇跡だと感じている

Q18：高橋さんが日本を感じる時について

A18：どこに行っても周囲から「日本人」と言われる だからしっかりしたい



## 訪問先のメモ

- 訪問日時： 8月5日（金） 10:00～15:00
- 訪問先： TCT（トゥンバおよびキガリキャンパス）
- 講話者： 井川 真理子 専門家

報告者：北九州工業高等専門学校 荒川 裕 紀

### 概 要

TCT (Tumba College of Technology) は北部ルリンド郡にあるトゥンバにある高等技術専門学校である。設立として、まず1992年に日本の無償援助によって工業学校としての建設が行われた。

しかし1994年の民族対立の際には、堅牢な建物と山上という地形から、民族対立をする上においての基地として使用されたこともあり、それ以降はこの学校は破壊され荒廃を極めた。その後新政権となってからは、政策の中での職業訓練の需要が高まったこともあり、以前の中等教育の学校から中等教育卒業生対象のA1レベルの学校としての再建を考えられることとなった。

学生は工業高校か普通高校理数科の卒業生で、同校での2年間の課程を修了した後、12週間の企業実習を経て卒業する。この開校の背景には、即戦力となる国内の技術者不足がある。ルワンダでは1994年に起きたジェノサイド（大虐殺）で、人口の10～20パーセントに当たる80万人以上が殺害されたといわれている。2000年以降、急速に近代化が進み、近年のGDP成長率は年7パーセント前後と大きな伸び率を見せているものの、ジェノサイドの影響もあって、産業界にとって実践力を持つ技術者の育成が大きな課題となっている。

そのために特に情報教育に力を入れている。実習授業が多いのも特徴であり、理数科の教員としてJOCVの方がいるのと同時に、インドネシアのスラバヤの高等技術専門学校の教員や、ネパール人、ナイジェリア人の教員も多数いる。スラバヤの高等専門学校は日本の協力によって軌道に乗ったこともあり、その成功事例を元にインドネシア政府としては、いずれかはここでの理数科人材育成のプロジェクトに参画したいと考えているとのことであった。南南協力の形につながることも考えられる。学生はルワンダ全土からきており、彼らを受け入れるため学校は全寮制である。

問題点としては、北部のそれもランドクルーザーのような4輪駆動車でないと行くことが難しい場所に立地していることがあった。1992年の学校の設立の際にもより便利な場所であるということもあつたらしいのだが、政治的なこともあり、建設が始まったこともある。そのためそれを補う形として首都にTCTキガリキャンパスを作り、こちらは企業との協力、産学連携も視野に入れた活動を行いたいとのことであった。実際に、首都でも活動は行われており、就学の機会がなかった学生たちに対し、ITの教育を行うと同時に、政府の学位ではないが修了書を交付することで、各人のスキルアップに貢献をしているとのことであった。現地の専門家の声としては、コーディネーターとしての苦勞とするとそれは、職員のモチベーションを上げさせることであるという。

私からの所感としては、就職も現地企業がほとんどであるが、就職率も高いことからある程度の成功をみた事例であると考えられるが、プログラマーとして育てる、何かものを創るというクリエイターというよりも、まずは機材を使いこなせるテクニシャンとしての育成であるように感じた。情報



産業を軸として国を活性化させていく場合、このようなテクニシャンの育成よりも、より大切な人材育成に注力することも必要ではと感じた。それと同時に、ナイジェリア人の教員と話して感じたことであるが、虐殺もあって、教えられるルワンダ人教員は少ないとのこと。逆にナイジェリアでは工学系の大学を出て学位を持っているが仕事先の無い人間がたくさんいることなどから、アフリカ内での移動が活発化すると、ルワンダが職の無い他のアフリカ諸国の格好の就業の場として機能することになり、アフリカ全体としては良いものにはなるが、ルワンダ人の幸福に繋がっていくのにはより時間がかかるようにも思われる。

## ホームステイ

- 滞在日： 8月6日（土）～7日（日）
- 滞在先： Brother Camille Rudasingwa  
(St. Aloys Rwamaga Group School)
- 参加教員： 鹿野敬文・高島芳倫・荒川裕紀

報告者：北九州工業高等専門学校 荒川裕紀

### 概要

ホームステイをさせていただいた場所は、神父が集住している宿舎であった。学校には神父以外にも教員はいるが、ステイをさせていただいた宿舎（修道院と呼ぶのが相応しい）の長である、Brother Camille Rudasingwa が校長も務めていた。

ルワマガナの町には、カトリック以外にもプロテスタントの教会やマスジットもあるが、一番大きな教会が、彼らの属する教会であった。8月7日は日曜日であり、7時半からのミサに参列したが、カテドラルには3000人が収容できるとされ、それだけでは収容できないとのことで、2回に分けて行っているとの説明であった。ミサは教区ごとに分かれているとのことで、もう1つのミサ（10時半以降）は別の神父が行うとのことであった。1930年代に創設の教会であり、この地でのカトリック化に大きく寄与したことがうかがえた。

附属の学校も大きな規模であり、男女の寮が完備されていた。もともと小学校から学校運営は始まったが、1994年の虐殺にて30人の神父が「Friends」によって殺されたこともあり、現在では中等教育学校の運営に力を入れている。理数科教員として、JICAから1名派遣されており、近所に住んでいた。校長いわく彼女はキニアルワンダ語が達者であり、3ヶ月で流暢になったとのことである。教授法としても非常に立派なものがあり、普通なら現場で教えることはさせていないのだが、来年からは、是非授業を持ってもらおうと考えているとのことであり、日本の教員派遣には感謝をしているとのことであった。

教科書類はイギリス、アメリカからの援助からであり、世界地図などはドイツ語で書かれたものもあった。以前はフランス語を教育言語にしていたこともあり、フランス語の書籍も散見された。

ホームステイでは、1日目はほぼ修道院の中におり、校長の仕事がかなり押していたこともあって一緒に生活している6名の神父たちと共に話をしてきた。ただ、英語使用者が、校長と教員として仕事をしている神父以外の人の2名が主であったために彼らからの情報に偏ってしまったかもしれない。実際彼らは1994年の虐殺の際には大変な目に遭っている。校長は出張でキガリにいたために惨劇に遭わずに済んだとのことであったが30名の神父が殺されたというのは尋常ではない。その中だから余計に虐殺をした側のことを「Our Friends」と表現していたことが非常に印象に残った。我々の前だから恣意的に表現したのか、それとも日常的にそう表現しているのかは分からないが、実際に惨劇が起きた場所でこのような使われ方をして暮らしているところに心の傷跡を感じた。

同じ教員としてのもう1つの「気付き」としては、校長の地元での立場であった。2日目はミサのあと、学校の紹介があった。そしてルワマガナ市内見物に誘っていただいた。その際に行く人から彼

は、握手を求められ、また多くの人から尊敬を受けていた。宗教的な立場でも、教育としての立場からでも非常に重要な人であることがみてとれた。学校の中だけでなく、地域社会の中での指導的な立場にある教員という姿、希望を持たせる「訓導」という言葉があてはまる方であった。

ルワンダの地方都市でのカトリックを中心とした生活、学校の様子を見て感じられたことは、ルワンダの基盤社会であった。そのような、文化や歴史の部分と同時に教員としての態度、振る舞い、そして哲学といったもの、そこには地域性もあるだろうが、普遍性を感じた。私も教員として生活する身であるが、是非こういった姿勢を学んでいきたいと感じた。

## ホームステイ

- 滞在日： 8月6日（土）～7日（日）
- 滞在先： Mr. Rwamurangwa Stephen (Rwamagana)
- 参加教員： 富山隆志・八田智弘・小川邦夫

報告者：中津市立本耶馬溪中学校 小川邦夫

8月6日から7日にかけて、Rwamaganaにある Mr. Rwamurangwa Stephen の家庭にホームステイをした。Mr. Rwamurangwa Stephen は、Kayonza Secondary School の校長先生である。子どもは18歳の長女から2歳の次男まで5人おり、配偶者である奥さんは Kayonza 市の市議員を2期務めていて、副市長でもある。使用人が2人いて、日本車も2台保有しているこの国の典型的な富裕層である。13人の親戚も面倒を見ていて、現在の日本から見れば、大家族であった。

お父さんは、民族紛争のさなか、避難していたウガンダで生まれ、ルワンダ愛国戦線（RPF）がルワンダを制圧したあと、帰国したルワンダ人である。ケニアの大学で博士号を取得し、27歳で教員になったそうだ。現在は47歳で Secondary School の校長先生をしている。土日も先生方の研修を受け持ち、忙しい毎日を過ごしているという。お母さんはタンザニアで生まれ、その後ウガンダに移りお父さんと出会い結婚をしたそうである。市議員をつとめるお母さんと学校の校長先生をつとめるこの家庭は、この地域ではとても裕福な家庭である。

早めの夕食をとった後、近くの教会に連れていってもらった。プロテスタント系の教会で、自分が抱いていたキリスト教会のイメージとは、大きく違っていた。女性伝道師の言葉の意味はよくわからなかったが、「ハレルヤ」「ルワンダ」と叫ぶ彼女の言葉に聴衆は熱狂していた。その後、歌やダンスが続き聴衆の一体感は驚きであった。



ホームステイの2日目。朝食の前に子どもたちと折り紙を折って遊んだ。一枚の紙から鶴やキリンといった動物を作り出す様子に、校長先生であるお父さんは大変興味を示していた。日本のモノづくり



りと折り紙づくりとの関係や学校教育に取り入れているのかなど熱心に質問していた。

朝食後、飼育している乳牛をみせてもらった。牛を飼うことは、ルワンダでは豊かさの象徴であるという。ルワンダ政府が進めている“One Cow One Family Project”が実施されており、牛を飼育する専門の使用人がいた。貧しい日干しれんがの家で暮らす使用人の暮らしを見るにつけ、この国のもつ民族間の経済格差を見た気がした。

その後、昨夜に引き続いて教会へ連れて行ってもらった。ウーマンズウィークの最終日で、昨夜同様教会内は超満員であった。ルワンダは、国会議員の女性議員が占める割合が56%で世界一である。女性の伝道師は、女性の地位向上をルワンダから世界に発信するように聴衆に呼びかけていた。私の周りには、伝道師の言葉を熱心にメモする人たちを多く見かけた。教会が地域のコミュニティ中心であり、社会教育の場であるということがよくわかった。

次に、お父さんが校長を務める全寮制の Kayonza Secondary School を見学させてもらった。この学校は、日本政府の援助で設立されており、現在もアメリカをはじめ外国の援助を受けて教育環境の整備が進んでいた。学校は長期の休みに入っていたため授業の様子は見学することはできなかったが、教育環境の整った学校の様子をつぶさに見学することができた。



## ホームステイ

- 滞在日： 8月6日（土）～7日（日）
- 滞在先： Homestay: Mukarugina Monique さんの家
- 参加教員： 大津留美紀・福井陽子・廣川由美

報告者：大分県立大分東高等学校 廣川由美

虐殺で夫と子どもを失ったモニーク、11歳の女の子ハミダ、15歳の少年ダハイヨの家でホームステイした。協力隊員を何度か受け入れたことがある家庭で、我々の対応に慣れていて、前庭の地上と地下に水のタンク、裏庭は菜園で、バナナやパイナップル、ツリートマトなどがあり、家事は子どもが主に担当していた。小学校の先生2名が遊びに来ていて、一緒に Expo2011（国際貿易フェア）へ行った。沢山のテナントが並ぶ中、人ごみで呼吸ができなくなるほど混雑していた。



家



右が Hamida, 真ん中が Monique



Expo 2011



タンクとパラボラアンテナ



Dahaiyo が料理



菜園の pineapple と banana



庭にあったアボカドの木



牛乳はバイクで販売に来る



バナナの料理

近所の市場に行った。野菜や果物が並べられていた。英語はほとんど通じず、子どもたちが内容を通訳してくれた。写真を取られることは嫌がられ、写真を取るのならお金を払うよう言われた。

家の前にあるラジオ局を見学した。無料でアナウンサーが案内してくれた。写真は自由に撮ってよいと許可され、カガメ大統領が来て座った席に座ったり、放送機器に触れることができた。

我々に遠慮したのか、教会へは夕方行くと言っていたモニークさんは、日曜日の朝から着飾っていた。友人が教会帰りに立ち寄って話をしていた。部屋の随所にキリストの絵が飾られていて、宗教が生活に大きな影響を与えていることが伝わってきた。



アナウンサー兼プロデューサー



空席がカガメ大統領の座った席



アンテナは3つ

国営番組で、土曜日は数学、日曜日は英語の授業が放送される。ダハイヨは番組を見て、一生懸命英語の復習をしていた。ハミーダとダハイヨの成績表やノートを見せてもらった。

我々を歓迎して、踊ったり、踊りを教えていただいたり、民族衣装を見せていただいたりした。子どもたちは常に話しかけてくれた。



高校英語の板書を写したノート



国営番組の英語授業



成績表

## 訪問先のメモ

■ 訪問日時： 8月8日（月） 10:00～11:00

■ 訪問先： ニャンザ青年職業訓練センター（Nyanza）

報告者：中津市立本耶馬溪中学校 小川 邦夫

8月8日、ルワンダにおける JICA 事業「障がいを持つ除隊兵士の社会復帰のための技能訓練プロジェクト」の現場を訪問した。本プロジェクトでは、除隊兵士に対して技能訓練を提供し、社会復帰を促進するルワンダ国のプログラムを JICA が支援するという形である。

首都キガリから車で行くこと2時間半。ニャンザというところに、その訓練センターはあった。この訓練センターは、1997年に設立されて、これまで2908人が卒業している。設立当時は、除隊兵士を対象にしていたのだが、2011年からは、一般の人もこの職業訓練センター学ぶことができるようになった。JICA のが直接支援を行っている人数は、258人（男238人、女20人）である。



この訓練センターの特徴としては、障がいを持った元兵士の方々や一般市民の方々が、同じ敷地の中で日々技能訓練を受けているということである。具体的には、溶接・レンガ積み・左官工・水道工・木工・織物・縫製・シルクスクリーンといった訓練コースがあり、どの技能を身につけるかは自由に選択が出来ることになっている。しかし、入所希望者が多数あり、JICA が独自に認定基準を設けて、選考をしている。訓練期間は6ヶ月と1年コースがあり、ここで技能を身につけて社会復帰していくシステムになっている。人気があるのは溶接と建設で、特に建設は道具が少なくても仕事出来るので人気があるようだ。視察した日は、それぞれのコースで10～20名ほどの訓練生が学んでいた。ここニャンザの訓練センターでは、シルクスクリーンの指導として佐藤真実隊員が派遣されていた。



本プロジェクトには、大きく3つの特徴がある。1つ目は、平和構築に貢献しているという点である。除隊兵士には「現政府軍・旧政府軍・民兵」という3つのグループがあり、そのどのグループに属する人にも平等に技能訓練を提供することで、和解を促進することが出来ること。2つ目は、雇用を促進し、社会復帰に繋がる支援をしている点である。JICA に支援されている訓練生は、訓練終了後にスターターキットという仕事道具を配布され、すぐに仕事を始めることが出来ることになっている。また、協同組合セミナーやフォローアップ調査によって卒業後の自立の支援も行われてる。3つ目は、障害者支援をしている点である。JICA では、施設のバリアフリー化改修工事も行っており、このバリアフリー設置はルワンダにおいて障害者支援の先駆けとなっている。



本プロジェクトの成果を踏まえた一般障がい者も訓練対象とした後継案件が2011年2月より開始されたが、ルワンダ動員解除・社会復帰委員会（RDRC）が一元的に管理を行っている除隊兵士と異なり、一般障がい者への支援体制は整っておらず、プロジェクトが円滑に実施され、除隊兵士のみの場合と同様の成果を上げることができるか注視していく必要がある。



## 訪問先のメモ

- 訪問日時： 8月8日（月） 11：30～12：30
- 訪問先： ルワンダ動員解除社会復帰委員会

報告者：福岡市立福翔高校 八田智弘

---

### 障害を持つ元戦闘員と障害者の社会復帰のための 技能訓練及び就労支援プロジェクト The Skills Training and Job Obtainment Support for Social Participation of Ex-Combatants and Other People with Disabilities

#### （設置目的）

長年にわたる内戦及び1994年の大虐殺、コンゴ共和国等近隣諸国との紛争の結果

- ① ルワンダ愛国軍が肥大化したので、適正規模への縮小
- ② コンゴから流出した民兵の動員解除及び帰還の促進

上記2つの件を解決するために、1997年ルワンダ政府はルワンダ動員解除社会復帰プログラム（RDRP）を開始する。

#### （活動計画）

Stage 1（1997） 国軍兵士対象（ツチ族）

Stage 2（2001） 旧政府軍兵士とルワンダ国外の民兵（フツ族）も対象

2009年にステージ2が修了するまで、国軍兵士、旧政府軍兵士、元民兵合わせて、6万人以上の戦闘員の動員解除と社会復帰を果たした。

#### （活動上の問題点とJICAの関わり）

RDRPにおいて、多くの障害を持った元戦闘員が含まれたが、その支援は医療支援及びリハビリテーション器具の支給に限定されており、社会復帰を促進する技能訓練は含まれていなかった。当時ルワンダにおいて社会復帰を促進する技能訓練を実施する機関は限定されていた上に、元戦闘員を社会的に統合していくことは大変難しかった。このような状況下でルワンダ政府からの要請に基づき、JICAは2005年12月から3年間「障害を持つ元戦闘員と障害者の社会復帰のための技能訓練プロジェクト」を実施した。

#### （プロジェクトの目的）

非障害者や元戦闘員以外の人々とともに技能を習得することにより、障害を持つ元戦闘員の社会復帰を推進。

## (プロジェクトの手段)

- ① 技能訓練の提供
- ② 技能訓練センター関係者の研修
- ③ 技能訓練センターのバリアフリー化

## (プロジェクトの結果)

2005-2008年12月までに925人の障害を持つ戦闘員が技能訓練を終了。調査によると、約75%が習得した技能を活用して仕事を行ったと答えた。この訓練を受けて、2009年度にはプロジェクトのフォローアップ協力を実施し、約100人の障害を持つ戦闘員に対して、技能訓練を行った。

## (進行中のプロジェクト)

Stage 3 (2010.10~2012.12) 国軍兵士4000人とコンゴで活動している民兵5500人対象。

## (結論)

元戦闘員が文民としてコミュニティに社会復帰していくことは、ルワンダの平和定着のために重要であり、RDRPは国軍兵士のみならず、旧政府軍兵士や元民兵も支援対象としていることから、国民和解の促進や地域の安定にも影響しており、ルワンダ政府は彼らへの迅速な支援を必要としている。しかし、先行プロジェクトの対象外だった障害を持つ元戦闘員は1500人以上も存在し、多くが身体的、社会的、経済的問題を抱えている。

## (雇用の促進)

財政予算が1500億円という大分市と同じくらいの規模しかないルワンダの中で、このプロジェクトの出口とも言える、就労の機会を増やすためにルワンダ政府は各訓練コースに共同組合をつくって、雇用を増やしている。この組合は約2500人が参加しており、基本的に職種別（電気機器修理、縫製、農牧業、印刷等）になっているが、訓練終了時の期別となっている場合もある。利益の分配は各共同組合で組合員がしっかり管理しており、もめることはほとんどない。これは現政権が金銭的なクリーンさを全面に押し出していることと、過去の歴史において少しの不平等が大きな不幸につながるということを教訓として一人ひとりが認識していることが要因であろう。インターネット組合も以前存在したが、インターネット接続費（4～5万フラン）が払えなくて、この組合は消滅した。

## (所感)

ルワンダ政府は2007年に障害者支援のための法の制定がなされ、今まで無視されていたに等しい障害者支援に積極的に乗り出している。この法律はいわゆる大虐殺により、急速に増えた障害者（その60%は片足か両足がない）に対応するために作られた。ルワンダに職業訓練所は少なくないが、元戦闘員を受け入れる施設はまだ多くない。彼らを受け入れるには入所前に入念なカウンセリングセッションのようなものが手で手間がかかり、まだまだシステムとして完全に確立したとは言い難いようだ。それでもJICAが支援するこのプロジェクトの意義は単なる就労支援という以上にとつもなく大きい。以前、敵、味方として殺し合った者達が、一般市民と一緒に教室を分かち合い、懸命に技能を習得しようとしている。足がない者、胸に弾丸が入ったままの者、指がない者。それぞれがそれぞれの悲しみとやるせなさを背負ったまま、明日に向かって何とか技能を身につけようとしてい

る。かつて、世界の中で、このような施設が存在したのだろうか？ 彼らのその空間こそが、「アメリカの奇蹟」だと思った。そして、彼らが今後そこで費やしていく時間は、そのまま新しい世界の1ページとなるような気がした。

## 訪問先のメモ

- 訪問日時： 8月8日(月) 14:30～16:00
- 訪問先： SHIGOTO NO ARU KURASHI

報告者：福岡県糸島市立前原南小学校 福井陽子

### 1. 研修先の概要

加藤悦子氏(愛知県在住)が、青年海外協力隊員として2006年3月から2年5ヶ月の赴任中、2007年に設立した工房“Umulimo Mu buzima”。

臨床心理士の経歴を生かし、路上暮らしの子どもを保護施設に引き取って支援したが、学校に通い、職業訓練を受けても、販売に至らないので収入につながっていないという課題に気づき、安定した収入を得ることができる若者をもっと増やすことを目標に掲げ、寄付を得て工房を設立。モーターや万力、ハンドドリルなどの工具類は、JICA基金を利用して準備されたという。

牛の角を材料にしたペンダント・腕輪・指輪・髪飾り・皿・靴べら等を主に男性が作製し、ペンダントは2000Rwf、皿は1500Rwf、髪留めは1400Rwf、腕輪は500Rwfで販売している。日本円でそれぞれ、6～700円、200円、200円、70円と安価である。材料となる牛角は、一山30000Rwfで購入。2週間天日干しし、内容物を取りだした後、染色や成形等の加工が施されている。

ジェノサイドの被害にあったHIV罹患女性や貧困女性が作製しているという、伝統的なご編みのギフトボックス「アガセチェ」やエコバックは、当日は見る事ができなかった。見学时、建物の床をセメントで整える改装工事の最中であった。小さな工房の一角には、購入し天日干しをすませた牛角が山積みされていた。それらをコールトールに漬けて染色を施し、加工していることなど、一連の工程について説明を受けた。

我々がお土産として購入した際には、1つ1つの品目と値段について、1人分ずつ丁寧にレシートを記入して手渡され、収支についてきっちりと管理していこうという姿勢が感じられた。

### 2. 研修先についての所感

丘の中腹に下った小さな敷地にその工房があった。フレンドリーというよりはむしろ用心深いまなざしを感じたのは、ルワンダの人々の気質のせいもあるのかもしれないが、貧困に伴うこれまでの生活の厳しさの現れかとも思われた。ペンダント2000Rwfは、日本円で300円弱。提示された金額で購入することが働く人々の生活を支えることにつながっていることを考えると、取り立てて生活に困っているわけでもないのに普段旅先で安く買ったたきがちな日本人旅行者の行為は申し訳なく思われてきた。

手品を皮切りに、ギター伴奏に合わせて「上を向いて歩こう」、尺八の伴奏に合わせて「荒城の月」を合唱し、最後にギターに合わせて研修団全員で「ふるさと」を二部合唱したところ、スタッフみなさんの表情もゆるみ、笑顔が見られた。工房にいた11歳と19歳の少年2人に将来の夢と大切なもののアンケートをしたところ、いずれも大切なものは「勉強すること」、また、将来の夢はそれぞれ「社長になること」「通訳になること」と答えた。ストリートチルドレンだった頃に、この答えが返って

きたかどうかは分からない。少なくとも夢を持って生きることができる暮らしになっていること、そのために勉強することが大切だと自覚していることが伺えた。開発途上国における就労支援の重要性を実感するとともに、このように本当に厳しい人々の現状に目を向け支援をしている草の根の活動への敬意とともに、NGOが継続的に支援をしていく上で、資金面での難しさを感じた。

### 3 事後研修プログラム

#### ■ 8月27日（土）

時間	内 容	担 当
10：00	国際理解教育に携わるきっかけ Story Telling （各5分程度） 研修後の各自の実践計画発表（各20分程度）	司会：富山先生
12：00	休 憩（昼食）	
13：00	研修後の各自の実践計画発表（午前の続き） JICA への提言についてのディスカッション ①報告会の形式について ②報告会以外の提案について	
17：30	終 了	

#### ■ 8月28日（日）

時間	内 容	担 当
9：00	報告書についてのディスカッション 報告書①：JICA へ提出する報告書 報告書②：アドバンスコース独自で作成する報告書	司会：富山先生
12：00	休 憩（昼食）	
15：00	参加者ミーティング（役割分担、研修までの準備他）	

